

上級・超級学習者と母語話者の間に残る違い ：中国語母語話者の日本語L2習得

範, 雯婷 / FAN, Wenting

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

129

(発行年 / Year)

2025-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第625号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2025-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00031355>

法政大学審査学位論文

上級・超級学習者と母語話者の間に残る違い:

中国語母語話者の日本語 L2 習得

範 雯婷

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景と目的	1
1.2 論文の構成	2
第2章 臨界期仮説、母語話者と上級・超級学習者の違い	4
2.1 臨界期仮説と大人の L2 言語習得	4
2.2 母語話者と上級・超級学習者の違い	7
2.2.1 ドイツ語の母音弱化現象	7
2.2.2 英語の冠詞の習得	9
2.2.3 類似表現の使用	15
2.2.4 まとめ	17
第3章 類似表現に関する研究	19
3.1 名詞化表現「こと」と「の」	19
3.1.1 「こと」と「の」の使い分け	20
3.1.2 「の」の過剰使用現象	22
3.1.3 範（2024）による分析	23
3.1.3.1 「こと」と「の」の回答結果	26
3.1.3.2 「こと」と「の」の選択に影響する要因	29
3.1.4 まとめと考察	35
3.2 丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」	37
3.2.1 日本語母語話者による「ないです」・「ません」の使用：小林（2005）	38

3.2.2 L2 学習者による「ないです」・「ません」の使用：川口（2006）	4 0
3.2.3 範（2019）による分析	4 1
3.2.4 まとめと考察	4 8
3.3 理由を提示する表現「から」と「ので」	5 0
3.3.1 日本語母語話者による「から」・「ので」の使用：花井（1990）	5 1
3.3.2 L2 学習者による「から」と「ので」の使用	5 2
3.3.3 範（2019）による分析	5 5
3.3.4 まとめと考察	6 2
3.4 類似表現に関する研究のまとめ	6 4
第 4 章 長音の母音長の変化	6 7
4.1 日本語 L2 学習者による長音発話：小熊（2001）	6 7
4.2 長音の短音化現象	6 9
4.3 範（2021）による L2 学習者の長音発話の分析	7 3
4.3.1 調査方法	7 3
4.3.2 調査結果	7 4
4.4 まとめ	8 0
第 5 章 アクセントのデフォルトパターン	8 2
5.1 日本語のアクセントパターン	8 2
5.2 範ら（2020）による L2 学習者のアクセントのデフォルトパターンの分析	8 5
5.2.1 調査方法	8 5
5.2.2 調査結果	8 8
5.2.3 考察	9 7
5.3 まとめ	9 8

第6章 総合的な考察	1 0 0
6.1 各章のまとめと考察	1 0 0
6.2 結論	1 0 4
6.3 今後の展望	1 0 5
謝辞	1 0 7
参考文献	1 0 9
付録 1. 範（2024）で使⽤した調査⽤紙	1 1 5
付録 2. 範（2024）で使⽤したタイプ別の問題⽂リスト	1 1 9
付録 3. 範（2019）で使⽤した調査⽤紙	1 2 1
付録 4. 範（2020）で使⽤した調査問題	1 2 7

本文中の表一覧

表 1. 学習者のレベル別の素性の組み合わせごとの <i>the</i> と <i>a</i> の回答割合	1 4
表 2. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答数: 日本語母語話者	3 2
表 3. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答数: 中国語母語話者	3 4
表 4. データから得られた述語否定形表現の内訳 (小林 2005: 13)	3 8
表 5. 引用節別述語否定形表現の使用数 (小林 2005: 15)	3 9
表 6. 学習者の「ないです」と「ません」の使用割合 (川口 2006: 17)	4 0
表 7. 学習者コーパスによる「ないです」と「ません」の使用数と使用率	4 1
表 8. 「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 日本語母語話者	4 4
表 9. 「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 中国語母語話者	4 4
表 10. 話し相手別「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 日本語母語話者	4 5
表 11. 話し相手別「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 中国語母語話者	4 7
表 12. 「から」と「ので」の使用数と使用率 (花井 1990: 62)	5 2
表 13. 学習者コーパスによる「から」と「ので」の使用数と使用率	5 6
表 14. 「から」と「ので」の選択数と選択率: 日本語母語話者	5 8
表 15. 「から」と「ので」の選択数と選択率: 中国語母語話者	5 8
表 16. 話し相手別「から」と「ので」の選択数と選択率: 日本語母語話者	5 9
表 17. 話し相手別「から」と「ので」の選択数と選択率: 中国語母語話者	6 1
表 18. 長音の位置ごとの平均誤用率	6 8
表 19. 「ポポ」と「ポーポ」の計測結果 (助川・前川 1997: 12)	6 9

表 20. 長音の語中位置別による短音化の生起数と生起率（助川・前川 1997: 11） ...	
.....	7 2
表 21. 日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間	7 5
表 22. 位置ごとの長音持続時間: 日本語母語話者	7 8
表 23. 位置ごとの長音持続時間: 中国語母語話者	7 9
表 24. 東京アクセント体系表（秋永 2009: 89）	8 3
表 25. 無意味語タイプと例	8 7
表 26. 無標語発話におけるアクセントバターの使用割合：日本語母語話者...	8 8
表 27. 無標語発話におけるアクセントバターの使用割合：中国語母語話者...	8 8
表 28. 拗音語発話におけるアクセントバターの使用割合：日本語母語話者...	9 1
表 29. 拗音語発話におけるアクセントバターの使用割合：中国語母語話者...	9 1
表 30. 撥音語発話におけるアクセントバターの使用割合：日本語母語話者...	9 4
表 31. 撥音語発話におけるアクセントバターの使用割合：中国語母語話者...	9 5

本文中の図一覧

図 1. 英語冠詞使用時における 5 種類のエラーにおける習熟度別 9 群間の平均値の比率（水野 2000: 165, 図 46）	1 1
図 2. 「こと」のみ使用可能な問題の回答の割合	2 6
図 3. 「の」のみ使用可能な問題の回答の割合	2 7
図 4. 「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合.....	2 7
図 5. 「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合: 日本語母語話者	2 9
図 6. 「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合: 中国語母語話者	3 0
図 7. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答率: 日本語母語話者.....	3 2
図 8. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答率: 中国語母語話者.....	3 4
図 9. 学習者レベル別「ないです」と「ません」の使用の割合	4 2
図 10. 「ないです」と「ません」の選択率: 日本語母語話者と中国語母語話者 .	4 4
図 11. 話し相手別「ないです」と「ません」の使用の割合: 日本語母語話者.....	4 6
図 12. 話し相手別「ないです」と「ません」の使用の割合: 中国語母語話者	4 7
図 13. 学習者レベル別「から」と「ので」の使用の割合	5 6
図 14. 「から」と「ので」の選択率: 日本語母語話者と中国語母語話者	5 8
図 15. 話し相手別「から」と「ので」の使用の割合 : 日本語母語話者.....	6 0
図 16. 話し相手別「から」と「ので」の使用の割合 : 中国語母語話者.....	6 1
図 17. 理論上と実際の「空気」の割合	7 1
図 18. 日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間	7 5
図 19. 単語持続時間と長音持続時間の散布図: 日本語母語話者	7 6
図 20. 単語持続時間と長音持続時間の散布図: 中国語母語話者	7 7

図 21. 位置ごとの長音持続時間を比較した箱ひげ図: 日本語母語話者	7 8
図 22. 位置ごとの長音持続時間を比較した箱ひげ図: 中国語母語話者	7 9
図 23. 日本語母語話者と中国語母語話者による無標語の発話のアクセントパター ンの割合 : 3 モーラ語	8 9
図 24. 日本語母語話者と中国語母語話者による無標語の発話のアクセントパター ンの割合 : 4 モーラ語	8 9
図 25. 日本語母語話者と中国語母語話者による拗音語の発話のアクセントパター ンの割合 : 3 モーラ語	9 2
図 26. 日本語母語話者と中国語母語話者による拗音語の発話のアクセントパター ンの割合 : 4 モーラ語	9 3
図 27. 日本語母語話者と中国語母語話者による撥音語の発話のアクセントパター ンの割合 : 3 モーラ語	9 5
図 28. 日本語母語話者と中国語母語話者による撥音語の発話のアクセントパター ンの割合 : 4 モーラ語	9 6

第1章 序論

1.1 研究の背景と目的

臨界期を過ぎてからの第二言語（以下、L2 とする）習得では、母語話者並みのレベルに達するのは難しいと言われている（Bley-Vroman 1989、Gregg 1996、Long and Robinson 1998）。しかし、Birdsong and Molis（2001）、Bongaerts, Van Summeren, Planken and Schils（1997）などの研究によると、適切な状況があれば、L2 学習者は母語話者と同等の水準に達する可能性があると言っている。一方、学習レベルの向上に伴い、誤用は減っていくものの、母語話者とほぼ同等の言語能力を持つと見なされるレベルに達しても、L2 学習者と母語話者との間の文法には、異なるところがあるとの報告もなされている（Coppieters 1987）。

これまで中国語母語話者の日本語 L2 習得研究はさまざまなレベルの学習者を対象に行われてきている。しかし、研究の多くは学習者の誤用のみに着目したものであった。L2 学習者と母語話者の文法の間には様々な違いが存在するが、これらの違いのすべてが誤用として観察可能なわけではない。学習者と母語話者との間に見られる違いの中には、学習者の誤用としては表出せず、母語話者とは異なる選択傾向（プリファレンス）として表れるものもあるという（Sorace 2003）。

本論文では上級・超級学習者と母語話者との違いを、誤用のみに着目するのではなく、むしろ誤用としては表面化しない形のプリファレンスの違い（類似表現のプリファレンス）、発話の音響的な差異（長音の音響的な違い）や、通常の言語使用では表面化しづらい内在化された文法の違い（アクセントのデフォルトパターン）といった側面からも探究することを目的とする。特に、本論文では中国語を母語とする学習者の

日本語 L2 習得に焦点を当て、母語話者と上級・超級学習者の間に残る違いについての研究を行った。

1.2 論文の構成

本論文は、中国語を母語とする上級・超級日本語第二言語学習者と日本語母語話者の言語使用、および内在化された文法の違いを多角的に分析することを目的としている。以下では、本論文において各章でどのような内容を記述するのかについて説明する。

本論文は全 6 章で構成されている。第 1 章「序論」では、研究背景と目的、および論文の構成について述べる。

第 2 章「臨界期仮説、母語話者と上級・超級学習者の違い」では、まず先行研究により臨界期仮説と L2 言語習得について概観する。さらに、母語話者と上級・超級学習者の違いを比較する。具体的には、粕谷・荒井（2015）による L2 学習者のドイツ語の母音発話の研究を取り上げ、習熟度が上がることで母語話者との間に見られなくなる違いを説明する。次に、水野（2000）と Snape（2008）による L2 学習者の英語の冠詞使用の研究を取り上げ、習熟度が上がっても母語話者との間に誤用として残る違いについて説明する。そして、Sorace（2003）による L2 学習者のイタリア語の代名詞の使用の研究を取り上げ、習熟度が上がっても母語話者との間に残る、誤用とは言えない、プリファレンスの違いが存在することを示す。

第 3 章以降では、中国語を母語とする上級・超級日本語 L2 学習者が母語話者とはどのように異なるのかを、異なる文法項目について比較する。第 3 章「類似表現に関する研究」では、上級・超級学習者と母語話者のプリファレンスの違いを分析する。具体的には、名詞化表現「こと」と「の」、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ま

せん」、理由を提示する表現「から」と「ので」の三つの類似表現のペアを取り上げ、選択式問題などの調査方法により、L2 学習者と母語話者のプリファレンスの違いを比較する。

第 4 章「長音の母音長の変化」では、上級・超級学習者と母語話者の音声的な違いを分析する。長音の長さの変化を対象とし、Praat (Boersma and Weenink 2019) を使用した計測により、L2 学習者と母語話者の発話を音声的に比較する。

第 5 章「アクセントのデフォルトパターン」では、上級・超級学習者と母語話者の内在化された文法の違いを分析する。アクセントのデフォルトパターンを取り上げ、発話実験により、L2 学習者と母語話者の内在化された文法がどのように異なるのかを、明らかにする。

最終章の第 6 章「総合的な考察」では、本論文の総括と結論を述べる。ここでは、前章までの分析結果を統合し、中国語を母語とする上級・超級日本語 L2 学習者と日本語母語話者の間に残る違いの特徴と意義について考察する。また、本研究の限界と今後の課題についても言及し、第二言語習得研究における本論文の位置づけと将来の研究方向性を示す。

第2章 臨界期仮説、母語話者と上級・超級学習者の違い

2.1 臨界期仮説と大人の L2 言語習得

人間は生まれつき言語を獲得する能力を持っているとされるが、この生まれ持った能力を使用できる期間は限られているという。この言語の獲得に関する臨界期仮説は Penfield and Roberts が 1959 年に提案し、Lenneberg (1967) により提唱された。Lenneberg (1967) は脳に障害を受け、失語症になった成人と子どもの患者の回復状況を比較し、その結果から臨界期仮説を提唱した。後天性小児失語症患者を発症時の年齢を基準として分け、回復状況を比較したところ、思春期前と思春期後には回復の度合いに大きな違いが認められたという。思春期前（12～13 歳前）に脳に障害を受け、失語症になった患者は言語を回復できたという。しかし、12～13 歳を超える患者の場合には、言語能力が完全に回復することはなかったという (Lenneberg 1967: 153-162)。この結果から、Lenneberg (1967) は言語に関わる臨界期仮説を提唱した。臨界期仮説によると、生まれ持った言語獲得能力は思春期頃（12～13 歳ぐらい）を境に使用できなくなるという。そのため、子どもの言語獲得と大人の言語習得には根本的な違いが存在するとされる。

臨界期仮説に関わる研究は母語（以下、「L1」とする）の習得だけではなく、第二言語習得においても行われてきた (Bley-Vroman 1989、Gregg 1996、Long and Robinson 1998)。Bley-Vroman (1989) は子どもが母語を習得する場合と、大人が L1 に加えて L2 を習得する場合では、習得システムに根本的な違いが存在すると主張した（「根本的相違仮説」(The Fundamental Difference Hypothesis)）。Bley-Vroman (1989) では子どもの L1 習得と大人の L2 習得の様々な側面を比較し、子どもの言語習得では生得的な言語固有の言語獲得システム (a domain-specific acquisition system) を利用した習得が

なされるのに対し、臨界期後の大人の L2 習得では生得的な言語習得装置がもはや機能しなくなり、既に習得された母語の文法と一般的な問題解決能力 (problem solving skill) により学習しているとの仮説を提唱した。Bley-Vroman (1989) はこの言語の習得システムの違いにより、大人の L2 習得では子どもの母語習得と同じレベルの文法を獲得できないのではないかと述べた。

しかし、L2 学習者の中には言語習得が進むことで、母語話者とほぼ同等の言語能力を持つと見なされる学習者もいるという。たとえば、Birdsong and Molis (2001) では、スペイン語を母語とする英語 L2 学習者を対象とし、L2 の到達度を分析した。その結果、臨界期を過ぎてからの習得においても、L2 の到達度と学習を始める年齢との間に負の相関があると結論付けた。しかし、一部の L2 学習者は母語話者のような水準に到達したと述べており、臨界期を過ぎても適切な状況があれば、L2 学習者は母語話者と同等の水準に達する可能性があるとして主張した。

Coppieters (1987) は言語使用の流暢さでは、もはや母語話者と区別することができないような人々のことを Near-Native Speakers (以下、「NNS」とする) と呼び、フランス語の NNS が母語話者と同じレベルで基礎文法を獲得しているかどうかについて調査を行った。コントロールグループとしてフランスとベルギー出身のフランス語母語話者 20 人、NNS として 18 歳以上からフランス語を習得した母語が異なる 21 人を対象とし、研究を行った。NNS の母語はアメリカ英語 (4 人)、イギリス英語 (2 人)、イタリア語 (4 人)、中国語 (3 人)、スペイン語 (2 人)、ペルシア語 (2 人)、ポルトガル語 (1 人)、日本語 (1 人)、韓国語 (1 人)、ドイツ語 (1 人) であった。NNS のフランスでの滞在時間は 5.5 年から 37 年までで、平均 17.4 年であった。NNS は全員、言語の使用に高い習熟度を示し、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Lanuguages、アメリカ外国語教育評議会) テストでは 4 つのレベル (初級、中級、上級、超上級) の中、最高評価であるの「超上級」を獲得していた。Coppieters (1987)

は文法性判断テストと意味判断テストを実施した。調査の結果、学習レベルが NNS になっても、2 つの過去形 *imparfait*（半過去）と *passé composé*（複合過去）の解釈において母語話者とは異なっていた。母語話者は *imparfait* と *passé composé* の間に明確な意味的対比を感じ、*imparfait* は過去の継続的な状態や習慣的な動作、*passé composé* は過去のある特定の瞬間、または完了された特定の出来事だと考えた。一方、NNS は *imparfait* と *passé composé* の違いを理解していたものの、その違いを説明することが困難で、誤用する場合もあった。

さらに、学習レベルが NNS になっても、3 人称代名詞 *il* と *ce* の解釈において母語話者とは異なっていたという。母語話者は *il* を人称代名詞、*ce* を事物代名詞だと考えた。一方、NNS は *il* をより書き言葉的なもの、*ce* をより話し言葉的なものとする傾向があった。

以上の結果を踏まえ、Coppieters（1987）は母語話者とは表面上、区別が出来ないレベルにまで上達した学習者であっても、母語話者との文法の間には異なるところがあると結論付けた。

Coppieters（1987）の研究はフランス語 L2 学習者を対象とした、統語・意味判断を調査・比較した研究であった。これらの違いは異なる言語を L1 とし、異なる L2 をターゲット言語とした場合にも見られるのであろうか。また、統語・意味以外の異なる文法的側面にも見られるのであろうか。以下の 2.2 では異なる言語をターゲットとした L2 習得において母語話者と学習者の間に残る違いについての先行研究を概観する。なお、NNS の定義は研究者により大きく異なるので、本論文では NNS に限らず、L2 習熟度が高い上級・超級学習者を研究対象として扱う。

2.2 母語話者と上級・超級学習者の違い

前節では、臨界期仮説と根本的相違仮説に基づき、Coppieters (1987) による L2 フランス語習得の事例を紹介した。Coppieters の研究では、NNS レベルであっても、母語話者の文法との間には違いが見られることが示された。本節では、フランス語以外の言語をターゲットとした L2 習得においても、母語話者と学習者の間に違いが残るのかを先行研究を通して概観する。まず、2.2.1 ではドイツ語に見られる母音弱化現象について、母語話者と L2 学習者を比較した研究を概観する。

2.2.1 ドイツ語の母音弱化現象

ドイツ語では特定の環境で母音¹が弱化する現象が見られる。ドイツ語と日本語とは言語のリズム構造が異なる。日本語は聞き手にモーラがそれぞれ同じ長さであるという等時性の感覚を与えるリズム (mora-timed rhythm) の言語である。一方、ドイツ語は強弱拍リズム (stress-timed rhythm) の言語であり、強弱間で等時性を保つ。粕谷・荒井 (2015) によると、ドイツ語では音節における強勢の有無、先行する子音、話速、単語の種類 (機能語か否か) など、様々な要因により、母音の弱化が起こるといふ。弱化は明示的な母音 /e:/ や /ɛ:/ が /ə/ や /ɐ/ へと変化し、さらに弱化が進むと母音が脱落する (粕谷・荒井 2015: 7)。Helgason and Kohler (1996) はドイツ語母語話者の発話でどのような場合に母音の脱落が起こるのかを調査するため、ドイツ語母語話者のコーパス発話を分析した。その結果、強勢後音節における /ə/ の脱落する割合は

¹ ドイツ語には a, e, i, o, u, ä, ö, ü の 8 つの単母音が存在する。国際音声記号 (IPA) では a: /a/ と /a:/、e: /e:/ と /ɛ/, i: /i:/ と /i/, o: /o:/ と /ɔ/, u: /u:/ と /ʊ/, ä: /ɛ/ と /ɛ:/、ö: /o:/ と /ɔ/, ü: /y:/ と /y/ のように表記する (内藤 1958: 45-54、徐 2018: 154-155)。

59.1%であった (Helgason and Kohler 1996: 120)。この結果から、ドイツ語母語話者の発話において母音の脱落が起こりやすいことが分かった。このように母音が脱落する現象は多くのドイツ語母語話者の発話に見られる音声現象である。では、L2 学習者の発話においても母語話者と同様の母音弱化や、母音の脱落が見られるのであろうか。

粕谷・荒井 (2015) はドイツ語母語話者にみられる母音の弱化・脱落が日本語を母語とするドイツ語 L2 学習者にも見られるのかを、異なるレベルの学習者を対象として調査した。調査対象はドイツ語母語話者 2 名と日本語を母語とする学習者 24 名、合計 26 名であった。学習者の内訳は、CEFR 基準の A1 以上の初級学習者が 8 名、B1 以上の中級学習者が 8 名、C1 以上の上級学習者が 8 名であった。調査はドイツ語で母音弱化が起こりやすい「子音＋接尾辞 〈en〉」の構成を持つドイツ語の实在語 9 語を対象とした。

以下の (1) は粕谷・荒井 (2015) で使用した实在語とキャリア文の例である。

(1) 粕谷・荒井の調査で使用した实在語とキャリア文 (粕谷・荒井 2015: 8)

(实在語) geben , leben , lieben , reden , leden , beden , Iegen , Gegen , liegen

(キャリア文) Ich habe ____ gesagt. 「私は____と言いました。」

(読み上げ例) Ich habe geben gesagt. 「私は与えると言いました。」

粕谷・荒井 (2015) では対象語彙の母音のフォルマント周波数と持続時間を測定し、母音弱化を以下の (2) のように 3 段階に分類した。

(2) 粕谷・荒井 (2015) による母音弱化の三段階の定義 (粕谷・荒井 2015: 8)

not -reduced: 中間母音のシュワ音以外の周期的な時間波形を保つもの。

reduced: わずかながらも周期的な時間波形を保つシュワ音。

deleted: フォルマントも母音の時間波形も残っていないもの。

(2) で分類されたように、“not-reduced”は母音が保たれており、弱化・脱落がない場合である。“reduced”は母音が完全に脱落しておらず、弱化している場合である。“deleted”は母音が脱落する場合である。

粕谷・荒井（2015）による調査の結果、日本語を母語とするドイツ語の初級学習者の発話には弱化も脱落も見られず、“not-reduced”で発話していたことが分かった。中級学習者は話速が速くなることで“reduced”の発話が見られたが、母音の持続時間は比較的長く、完全に脱落してはいないことが分かった。そして、上級学習者ではさらに母音の弱化が見られ、話速が速くなると弱化“reduced”から脱落“deleted”へ変わるといふ、母語話者と同様の母音弱化・脱落が見られた。

以上の結果から、粕谷・荒井（2015）は習熟度が上がるにつれて、日本語を母語とするドイツ語 L2 学習者の発話が母語話者の発話に近づき、ドイツ語のリズムの特徴である母音弱화를習得していくと結論付けた。このように、ドイツ語の母音弱化現象に関して、日本語を母語とするドイツ語 L2 学習者と母語話者の間に違いは存在するが、この違いは学習レベルの向上に連れて消えていくことが分かった。しかし、L2 学習者と母語話者の間に、習得レベルが高くてもなお残る違いも存在する。以下の 2.2.2 では英語の冠詞の習得についての研究を見ていく。

2.2.2 英語の冠詞の習得

英語を L2 学習する者にとって、冠詞 (*a, the*) は特に習得困難な文法項目である。冠詞の L2 習得については、これまで数多くの研究が行われてきた (Hawkins et al. 2006, Ionin 2003, Kaneko 1996 など)。水野 (2000) では、大人が英語の冠詞を習得する際に犯すエラーがどのようなものかを調査するため、日本語を母語とする英語 L2 学習者を

対象とし、学習者の習熟度による英語の冠詞の使用エラーについての分析を行った。

水野（2000）ではまず、学習者の冠詞エラーを 5 種類に分けた。以下の（3）は水野（2000）による冠詞エラーの分類である。

（3）冠詞エラーの種類（水野 2000: 49-50）

- a. 共起エラー：冠詞と他の決定詞の並置
I like a this book.
- b. 語順エラー：冠詞とそれに後続する形容詞の語順の倒置
That is new a book.
- c. 忘却エラー：冠詞の脱落
She is ϕ mother of that boy.
He was ϕ brave man.
- d. 濫用エラー： ϕ の位置における冠詞使用
after the school, after the breakfast
a holy places, a human beings
- e. 誤用エラー：the の位置における a の使用、あるいは、その逆
A worst, a best boy in class.
A sun becomes red.

水野（2000）では学習者の習得レベルにより、冠詞使用のエラーがどのように変化するかを調査した。参加者は、日本語を母語とする英語 L2 学習者合計 353 名であった。参加者は英語圏居住歴が無く、4 年以上の英語学習歴を持つ成人であった。学習者は Takahashi and Tanaka の英語習熟度テストの基準により判定し、9 段階のレベルに分けた（Takahashi and Tanaka 1983）。水野（2000）では、1～3 を初級学習者、4～6 を中級学習者、7～9 を上級学習者とした。調査では、正誤判断テスト、語順配列テスト、多

肢選択クローズテストの3種類のテストを行った。

以下の図1は水野（2000）による学習者のレベルごとに冠詞使用におけるエラーの平均数をエラーの種類別に比較した表を筆者がまとめ直したものである。

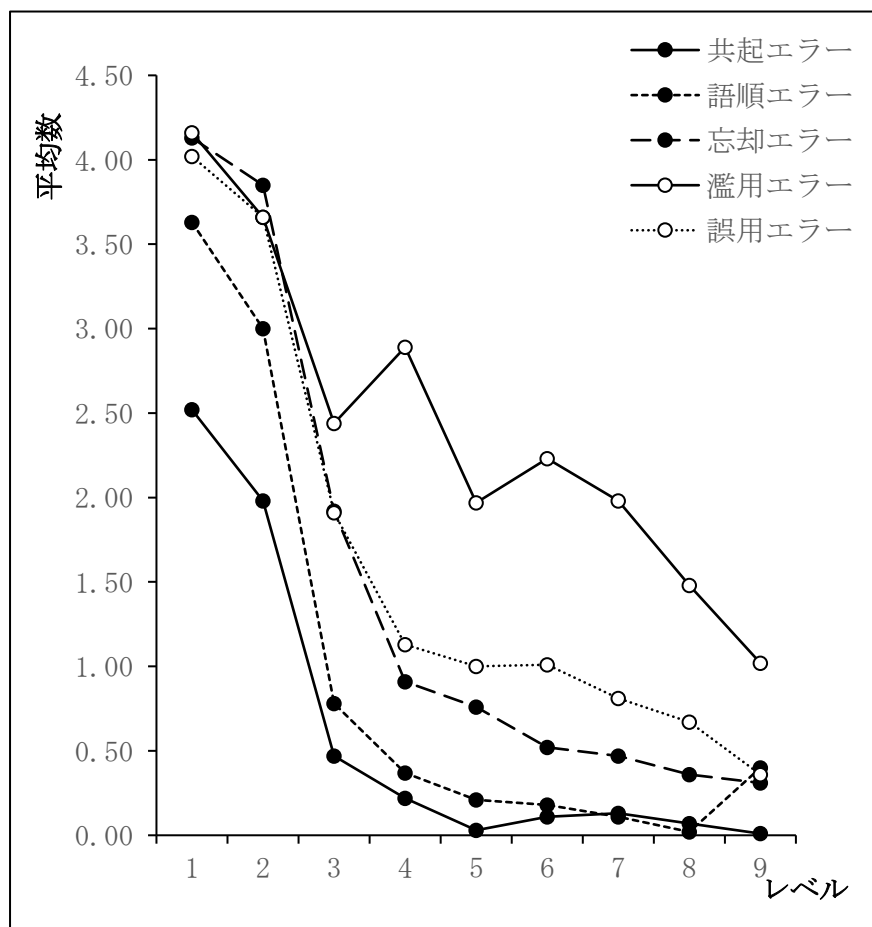


図1. 英語冠詞使用時における5種類のエラーにおける習熟度別9群間の平均値の比率
(水野 2000: 165, 図 46)

図1に見られるように、学習者がレベル3（初級レベル後期）になると、共起エラーと語順エラーが急激に減り、中級レベル以降になるとほとんど起きていないことが分かった。また、中級レベル以降でも忘却エラー、濫用エラー、誤用エラーは残っていることが分かった。特に、濫用エラーは習得レベルが上がってもあまり減少しな

かった。忘却エラーと誤用エラーはレベル 1 からレベル 4（初級レベルから中級レベル初期）で急激に減少したが、レベル 9（上級レベル）になっても少し残っており、レベル 4 以降、最も多く出現するエラーであった。

このように、水野（2000）によれば日本語を母語とする英語 L2 学習者の冠詞使用のエラーは、習熟度が上がるに連れて減り、共起エラー、語順エラーはほぼなくなるのに対して、忘却エラー、濫用エラー、誤用エラーは減少しこそするものの、上級レベルになっても残るという。

また、Snape（2008）は日本語を母語とする英語 L2 学習者の冠詞 *the* と *a* の使用が [±definite] の素性に影響されるかどうかを調査した。調査の対象は、英語母語話者 15 名と日本語を母語とする英語 L2 学習者 30 名、合計 45 名であった。学習者はすべて大学院生であり、OQPT（Oxford Quick Placement Test）のスコアに基づいて中級レベル（15 名）と上級レベル（15 名）に分けられた。英語圏の滞在期間の平均は中級学習者が 6 ヶ月、上級学習者が 31 ヶ月であった。Snape の調査では参加者に *the*、*a*、*an*、 $\varnothing$ の四つの選択肢から、一つだけを選ばせる、選択タスクを使用した。

以下の（4）は Snape（2008）にて使用した選択タスクの例である。

（4）Snape（2008）にて使用した選択タスクの例（Snape 2008: 241-243）。

a. [+definite, +specific]

A: Could I have some water, please?

B: Sure, I'll bring you another glass.

A: Just use ____ glass I had wine in.

$\varnothing$ an a the

b. [+definite, -specific]

A: Are you interested in our internship programme?

B: Yes, I would like to work in your Colchester bank.

A: OK, then, I will contact ____ branch manager for you.

the ϕ an a

c. [-definite, +specific]

A: Kylie went to Tim's party.

B: Did she have fun?

A: She met ____ man who I knew at school.

an ϕ the a

d. [-definite, -specific]

A: Rose is happy.

B: Why?

A: She got ____ car for her birthday. I wonder what it looks like?

an a the ϕ

以下の表 1 は、定冠詞と不定冠詞を使用する文脈において、母語話者と学習者の *the* と *a* の反応をまとめた Snape (2008: 245-246) による表を筆者がまとめ直したものである。

表 1. 学習者のレベル別の素性の組み合わせごとの *the* と *a* の回答割合

	[+definite]			[-definite]		
	the	*a	*φ	*the	a	*φ
中級 (n=15)						
[+specific]	91.70%	6.70%	1.60%	35.00%	63.30%	1.70%
[-specific]	71.70%	23.30%	5.00%	5.00%	95.00%	0.00%
上級 (n=15)						
[+specific]	90.00%	8.30%	1.70%	20.00%	78.30%	1.70%
[-specific]	88.30%	10.00%	1.70%	1.70%	98.30%	0.00%
母語話者 (n=15)						
[+specific]	100.00%	0.00%	0.00%	5.00%	95.00%	0.00%
[-specific]	98.30%	0.00%	1.70%	1.70%	98.30%	0.00%

*は誤った冠詞を表す

表 1 に見られるように、冠詞 *the* と *a* の使用に関して、母語話者の冠詞選択は [±specific] の素性には影響されず、[+definite] の場合は *the* を、[-definite] の場合には *a* を使用していることが示された。一方、学習者には [±specific] の影響により冠詞 *the* と *a* を誤用する場合があった。この誤用は学習レベルが向上につれて減少するが、英語圏に長期滞在する上級学習者においても、誤用が残ることが示された。

以上のように、日本語を母語とする英語 L2 学習者の冠詞の使用について、水野 (2000) と Snape (2008) では上級レベルになっても、L2 学習者と母語話者との間には違いが存在し、学習者には誤用が残るとの報告がなされた。

これらの研究の焦点は、異なるレベルの学習者にどのような誤用が見られるかであり、上級学習者になっても誤用という形で母語話者の文法との違いが残るのかを調査したものであった。では、上級・超級学習者と母語話者の間に誤用という形では表面化しない違いは見られるのであろうか。以下の 2.2.3 では Sorace (2003) による類似表現の研究を概観する。

2.2.3 類似表現の使用

言語には、同じような意味を表すのに異なる表現が存在することが多く見られる。たとえば、「今朝地震があったことは知らなかった」と「今朝地震があったのは知らなかった」という二つの文においては、「こと」と「の」は先行する文を名詞化するという働きをしており、この 2 つの文はほぼ同じ意味である。このような「類似表現」は、会話の相手や場面、細かな意味など、その使われ方は異なるが、使い方や意味は類似しており、使用範囲の重なりが多く、置換できる状況が多い。しかし、類似表現が複数許容される文脈であっても、選択される表現が偏ることがあり、その選択傾向をプリファレンスと呼ぶ。

Sorace (2003) では母語話者と上級・超級学習者の類似表現の使用に違いが存在するかどうか、イタリア語の代名詞の使用に関する調査を行った。参加者は英語を母語とし、イタリア語を L2 として学ぶ上級・超級学習者 24 人と、コントロールグループとして成人のイタリア語母語話者 36 人であった。時間制限つきで 48 文の文法の正誤判定を行った。結果、母語話者と学習者の発話には違いが存在することが示された。

以下の (5) は、Sorace によって例示された違いの例である。

(5) イタリア語の代名詞の使用 (Sorace 2003: 140-141)

(【】は筆者が追加したラベルである)

a. Perchè Lucia non ha preso le chiavi?

why Lucia not has taken the keys

‘Why didn’t Lucia take her keys?’

a1. Perchè lei pensava di trovarti a casa 【L2 学習者】

because she thought of find-you at home

‘Because she thought she would find you at home’

a2. Perchè pensava di trovarti a casa 【イタリア語母語話者】

because thought of find-you at home.

b. Che cosa è successo?

what is happened

‘What happened?’

b1. Paola ha telefonato 【L2 学習者】

Paola has telephoned

b2. Ha telefonato Paola 【イタリア語母語話者】

has telephoned Paola

上記の質問 (a) と (b) に対して、母語話者は (a2) と (b2) のように答えたが、学習者は上級・超級レベルになっても (a1) と (b1) のように答えたという。母語話者は、(a2) に見られるように主語の代名詞を省略しているが、上級・超級学習者は、(a1) のように主語の代名詞を省略しないという。また、母語話者は (b2) のように主語の名詞を後置する傾向にあるが、上級・超級学習者は (b1) に見られるように主語を動詞の前の位置に残す傾向にあった。(a1、a2) と (b1、b2) という二つの表現が可能である場合、上級・超級学習者と母語話者の選択する表現は異なったという。

以上の結果から、Sorace (2003) は上級・超級学習者の文法が母語話者と同じような統語的選択肢を可能なものとして含んでいる場合でも、母語話者とは異なるプリファレンスを示すことがあると結論付けた。つまり、代名詞の使用において、イタリア語母語話者と L2 学習者の間には、誤用ではない、選択傾向における違いが存在すると報告された。

2.2.4 まとめ

本節では L2 習得において母語話者と学習者、特に上級学習者の間にどのような違いが残るのかに関する先行研究を異なるターゲット言語、異なる文法項目について見てきた。

2.2.1 ではドイツ語の母音弱化現象について母語話者と L2 学習者を比較した。粕谷・荒井（2015）では日本語を母語とするドイツ語 L2 学習者の発話を母語話者のものと比較した。その結果、初級、中級のドイツ語 L2 学習者においては、母語話者の母音発話との間に違いが存在するものの、上級学習者の母音発話は母語話者と同様の音声現象が見られ、母語話者との違いが見られなくなったことが分かった。そして、2.2.2 では英語の冠詞の習得の研究を見てきた。英語の冠詞の使用に関して、水野（2000）はエラーのタイプから、そして Snape（2008）では意味素性の $[\pm\text{specific}]$ の影響の観点から、日本語を母語とする L2 学習者の誤用を分析した。その結果、上級学習者になってもエラーが残り、母語話者と L2 学習者の間には違いが存在すると結論付けた。

2.2.3 では Sorace（2003）によるイタリア語の類似表現の使用に関する研究を紹介した。Sorace（2003）ではイタリア語の代名詞の使用を比較した結果、上級・超級 L2 学習者になってなお、母語話者との間には誤用という形では表面化しないものの、違いが存在すると結論付けた。

以上のように、L2 習得において、習熟度が上がることで母語話者と同様の運用が見られる項目もあるが、それでもなお、母語話者と上級・超級学習者の間には様々な違いが見られることが報告されている。これらの違いは特定の言語を母語、ターゲット言語とした場合に限るものではない。また、母語話者と学習者の間には、学習レベルが上がるにつれて消えていく違いもあるが、上級・超級レベルになっても残っている違いもある。さらに、上級・超級レベルになっても残る違いの中には、誤用として観

察されない違いも存在する。第三章では、日本語において、どちらを使用しても誤用にはならない類似表現について、日本語母語話者と中国語母語話者の選択を比較する。学習者の習得レベルが高くなり、上級・超級学習者のレベルになっても日本語母語話者との間にプリファレンスの違いが存在するのかを明らかにする。

第3章 類似表現に関する研究

2.2.3 では Sorace (2003) によるイタリア語の類似表現における、上級・超級 L2 学習者と母語話者との違いについての研究を概観した。Sorace (2003) で見られたような類似表現選択のプリファレンスの違いは、中国語を母語とする学習者の日本語 L2 習得の場合にも見られるのであろうか。日本語母語話者と中国語を母語とする上級 L2 学習者の間にも、類似表現の選択において異なるプリファレンスが存在するのであろうか。本章では、日本語母語話者と中国語を母語とする学習者との間には、類似表現の使用にどのような違いがあるのかを調査する。学習レベルが高くなり、上級・超級学習者のレベルになっても日本語母語話者との間にプリファレンスの違いが存在するのかを明らかにする。

3.1 名詞化表現「こと」と「の」

本節では名詞化表現「こと」と「の」の使用に関して、日本語母語話者と中国語母語話者の違いについての範 (2024) の研究を取り上げる。範 (2024) では「こと」と「の」について、どちらの表現も可能である場合、日本語母語話者と中国語母語話者がどちらをより選択するのかを比較し、両者の名詞化表現の使用に違いが見られるのかどうかを調査した。

「こと」と「の」はそれぞれ動詞、イ・ナ形容詞、または文に付いて、それらを名詞化する働きを持つ類似表現である。この類似表現の使用について、中国語母語話者は日本語母語話者とは異なる選択傾向を示すのであろうか。本節では、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語上級・超級学習者による、名詞化表現「こと」と「の」の使用を比較する。

3.1.1 「こと」と「の」の使い分け

名詞化表現の「こと」、「の」の使用について、市川（2011）はそれぞれがどのような場合に使用されるのかをまとめた。市川は、「こと」と「の」の両方が使用可能となるのはどのような場合なのか、また、それぞれの名詞化表現がどの場合に使用されるのかを例を挙げつつ、後続する動詞句、および動詞の意味ごとに分類した。

以下の（6）は、市川による、名詞化表現「こと」と「の」の両方が使用可能な文の例である。また、（6）～（8）に挙げる例文は、すべて市川（2011）によるものである。

（6）「こと」と「の」の両方が使用可能である例（市川 2011）

父が賞をもらった（こと／の）をととてもうれしく思います。

一方、以下の（7a-h）は「こと」のみが使用可能な場合の例文である。

（7）「こと」のみが使用可能である例（市川 2011）

- a. 私の趣味は絵を描く（こと/~~の~~）です。
- b. 仕事を辞める（こと/~~の~~）にした。
- c. 来週出張する（こと/~~の~~）になった。
- d. 富士山に登った（こと/~~の~~）がある。
- e. わざわざ行く（こと/~~の~~）はない、電話をすればいいよ。
- f. 人間は趣味を持つ（こと/~~の~~）が必要だ/大切だ。
- g. 大学院を受ける（こと/~~の~~）に決めた。
- h. 二度と遅刻しない（こと/~~の~~）を約束します。

市川（2011）によると、「です、だ、である」の前では「こと」のみが使用可能であ

るという ((7a))。さらに、「～ことにする」、「～ことになる」、「～ことがある」、「こととはない」などの定型表現では「こと」のみが使用可能であり、「の」で代用することはできないという ((7b、7c、7d、7e))。また、「必要だ」、「大切だ」、「決める」、「約束する」が後続する場合には、「こと」のみが使用可能であるという ((7f、7g、7h))。

つぎに、同じく市川 (2011) による「の」のみが使用可能な場合の例文を以下の (8a-f) に示した。

(8) 「の」のみが使用可能である例 (市川 2011)

- a. きこのう人が車にはねられた (こと／の) を見た。
- b. 車が近づいてくる (こと／の) が聞こえる。
- c. 彼が私に気を使っている (こと／の) を感じる。
- d. 私は、彼が仕事をやめようとしている (こと／の) を止めた。
- e. 母が料理を作る (こと／の) を手伝う。
- f. 彼からメールが来る (こと／の) を待っている。

市川によると、動詞「見る・見える」「聞く・聞こえる」「感じる」の前では「の」のみが使用可能である ((8a、8b、8c)) という。また、「止める」「手伝う」「待つ」の前でも「の」のみが使用可能である ((8d、8e、8f)) という。

以上のように、「こと」と「の」について、市川 (2011) では日本語の母語話者の使用規則をまとめた。では、学習者は市川に示されたような、日本語母語話者と同様の文法を習得しているのでしょうか。以下の 3.1.2 では奥野 (2003) による「の」の過剰使用現象についての研究を概観する。

3.1.2 「の」の過剰使用現象

日本語 L2 学習者による日本語の「の」の過剰使用については、先行研究にても指摘されている。奥野（2003）は L2 学習者による「の」の使用を研究し、日本語 L2 学習者の「の」の過剰使用に焦点を当て、母語の影響を明らかにするため調査を行った。奥野（2003）では、中国語・韓国語・英語母語話者の上級日本語 L2 学習者 10 名を対象に、「の」に関する名詞句の文法性判断テストを実施した。奥野による調査ではまず OPI（Oral Proficiency Interview）により学習者の習得レベル判定を行い、そして、即時的処理を求める文法性判断テストを実施した。文法性判断テストは「の」に関する名詞句の正用・誤用を判断する問題、フィラー問題、およびその他の文法項目の正用・誤用を判断する問題の合計 80 問であった。参加者は調査文の音声を聞きながら、聞いた名詞句部分が文法的に正しいかどうかを判断した。以下の（9）は奥野（2003）で使った名詞句である。

（9）「の」の過剰使用調査で用いた名詞句の例（奥野 2003: 83）

a. 名詞＋名詞

正用：今年の冬

誤用：高校先生

b. イ形容詞＋名詞

正用：古い映画

誤用：汚いの部屋

c. ナ形容詞＋名詞

正用：自由な時間

誤用：有名の大学

d. 動詞＋名詞

正用：(今から) 作る料理

誤用：(今) 来ているの人

(読み上げ例) 汚いの部屋を掃除したので、疲れました。

(問題例) _____を掃除したので、疲れました。(×)

(9a) の誤用はあるべき箇所に「の」が使用されていない例である。そして、(9b、9c、9d) の誤用はすべてあるべきではない箇所に「の」が使用されている例である。調査の結果、(9d) の「動詞＋名詞」の場合、韓国語母語話者と比べて、中国語母語話者は「の」が過剰使用されている場合の誤用判断が困難であることが示された。そして、中国語母語話者は「の」を過剰使用していない正用表現を、正しく正用だと判断していた。このことから、中国語母語話者は必ず「の」は必要であると考えているのではなく、修飾部と被修飾部の間に「の」がある表現も可能だと認識していると奥野(2003)は述べている。つまり、中国語母語話者の「の」に対する許容範囲は広く、修飾部と被修飾部の間に「の」がある表現もない表現も共に文法的であると考えているのである。

3.1.3 範(2024)による分析

3.1.2 に述べたように、奥野(2003)では他の言語の母語話者(英語、フランス語、韓国語、スペイン語、ドイツ語)と比べて、中国語を母語とする L2 学習者は上級になっても、広範囲に不要なところでも「の」を過剰使用するとの報告がなされている。奥野(2003)は中国語母語話者の「の」に対する許容範囲は広く、修飾部と被修飾部の間に「の」がある表現もない表現も共に文法的であると述べている。「の」が過剰使用されていたことから、範(2024)は中国母語話者の名詞化表現「こと」と「の」の

使用に対して二つの予想を立てた。まずは「こと」のみが使用可能な文においても、中国語母語話者は「の」も使用可能であると考え、「両方とも良い」と判断する傾向が示されるのではないかと。次に、「こと」と「の」の両方が使用可能な場合でも、「の」だけが使用可能であると判断する傾向が示されるのではないかと。つまり、全般的に「の」をより多く使用すると予想した。中国語母語話者の「こと」と「の」の文法が日本語母語話者のものと異なるのか、もし異なるとするならばどのように異なるのかを明らかにするため、範（2024）では、3.1.1 に示した市川による「こと」と「の」の使用ルールに基づき、「こと」のみが使用可能な文、「の」のみが使用可能な文、「こと」と「の」の両方が使用可能な文について、「こと」と「の」のどちらを使用するかを選択式問題を作成し、日本語母語話者と上級・超級学習者の選択を比較した。

範（2024）の調査参加者は全員、標準中国語を母語とする上級・超級学習者であった。参加者は合計 21 名で、すべて N1 に合格し、日本に 3 年以上の留学経験があり、かつ日本の会社に勤務する社会人であった。そして、比較のため、日本語を母語とする関東出身の日本在住者 11 名をコントロールグループとした。

調査では選択式の問題を使用し、「こと」と「の」を使用すべき部分を空欄にした文を呈示し、空所を補充するのに使用可能な表現を選択させる形式であった。選択肢として設けたのは、a. 「こと」、b. 「の」、c. 「両方とも良い」、の三つであった。調査で使った問題は市川（2011）に基づき作成した。その内訳は「こと」のみ使用可能な文についての問題を 10 問、「の」のみ使用可能な文についての問題を 10 問、「こと」と「の」の両方が使用可能な文についての問題を 10 問、合計 30 問であった。以下の(10)、(11)、(12) は実際の調査に使用した選択式問題の例である。

(10) 「こと」のみが使用可能である問題例

私の趣味は映画を見る___です。

- a. 「こと」
- b. 「の」
- c. 両方とも良い

(11) 「の」のみが使用可能である問題例

私は彼が歌う___を聞いた。

- a. 「こと」
- b. 「の」
- c. 両方とも良い

(12) 「こと」と「の」の両方が使用可能である問題例

日本語を勉強する___は難しいです。

- a. 「こと」
- b. 「の」
- c. 両方とも良い

(10) は (7a) のタイプ、(11) は (8b) のタイプ、そして、(12) は (6a) のタイプの問題である。本実験にて使用した全 30 問は、付録 1 に掲載した。

調査は Google フォームを使用して行った。収集したデータは問題文のタイプによって分類し、分析を行った。問題ごとに日本語母語話者の回答を検証したところ、想定されているものと異なる回答の割合が一定数みられた問題があった。このように、該当する問題において日本語母語話者の回答が割れた場合、問題文が適切でなかった可能性がある。そのため、日本語母語話者 11 人のうち、4 人以上が想定した回答と異なる選択をした問題については、分析から除外した。これによって、分析対象として使用した問題は「こと」のみ使用可能な文の問題が 10 問、「の」のみ使用可能な文の問題が 10 問、「こと」と「の」の両方が使用可能な文の問題は 7 問となった。

3.1.3.1 「こと」と「の」の回答結果

以下に示す図 2、図 3、図 4 は、問題文のタイプごとに日本語母語話者と上級・超級学習者の「こと」と「の」の回答の割合をグラフに表したものであり、図 2 は「こと」のみ使用可能な問題の回答の割合を表したものである。図 3 は「の」のみ使用可能な問題の回答の割合を表したものである。図 4 は「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合を表したものである。以下の図中において、JN は日本語母語話者、CN は中国語母語話者を表している。

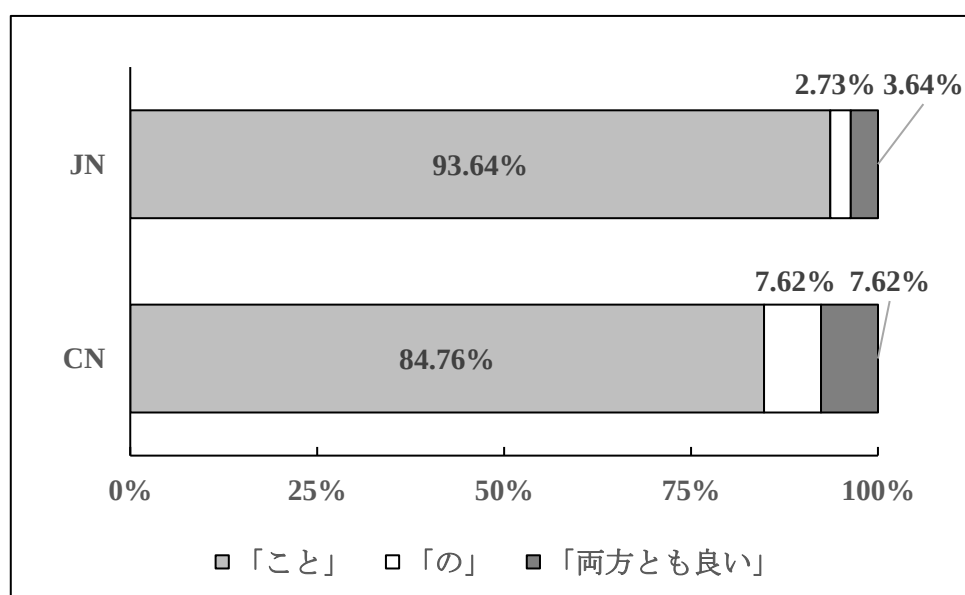


図 2. 「こと」のみ使用可能な問題の回答の割合

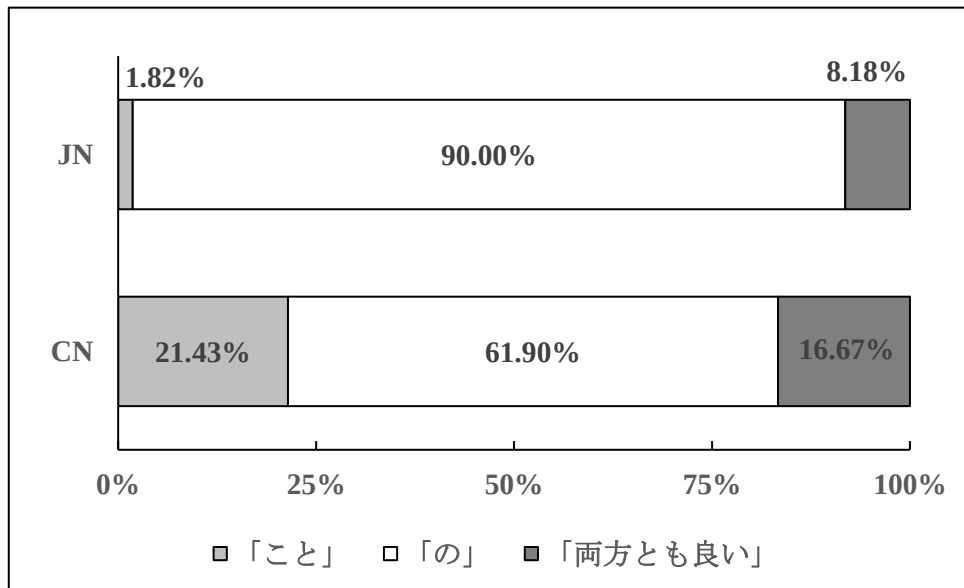


図 3. 「の」のみ使用可能な問題の回答の割合

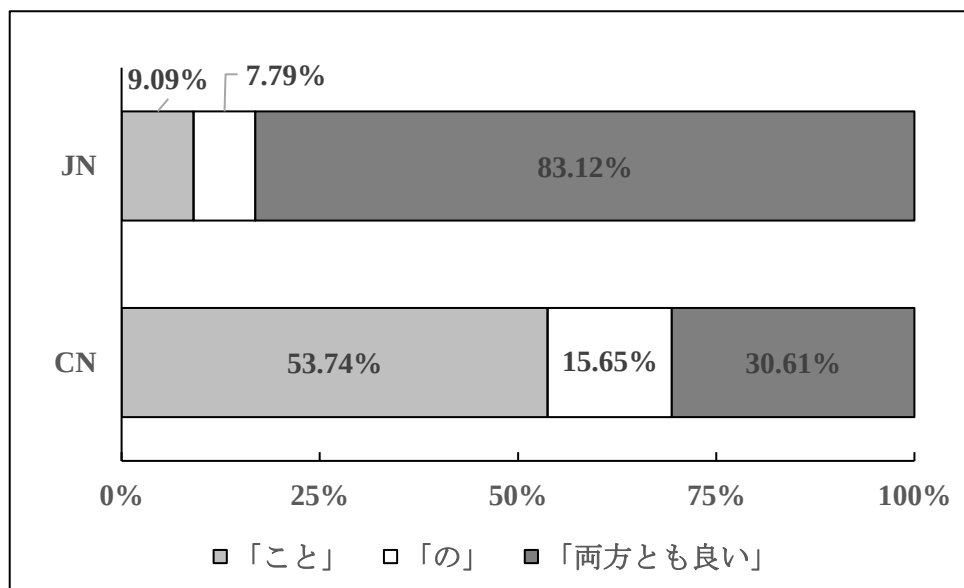


図 4. 「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合

「こと」と「の」の回答の割合を調査したところ、図 2、図 3、図 4に見られるように、日本語母語話者は (7)、(8) に基づき、「こと」のみが使用可能な問題では「『こと』のみ」を、「の」のみが使用可能な問題では「『の』のみ」を選択しており、結果

は想定した通りであった。「こと」と「の」の両方が使用可能な問題については、「両方とも良い」の選択がほとんどであったが、9.09 % が『『こと』のみ』、7.79 % が『『の』のみ』を選択した。このタイプの問題での回答を見る限り、日本語母語話者に「こと」と「の」について特に明らかな指向性は無いと言えるであろう。一方、中国語母語話者は「の」のみが使用可能な問題では、21.43 % が『『こと』のみ』、16.67 % が「両方とも良い」という、間違った回答をしており、正答の『『の』のみ』の選択は61.90 %であった。これは中国語母語話者が「こと」の許容範囲を誤って広くとらえていることを示している。また、「こと」と「の」の両方が使用可能な問題において、53.74 % の中国語母語話者が「こと」を選択し、「の」を選択した回答者の割合の15.65%をはるかに上回っていることが明らかになった。つまり、「の」と「こと」の両方が使用可能な場合からも、中国語母語話者は「こと」を選好する傾向があることが分かった。

以上のことから、名詞化表現「こと」と「の」の使用において、中国語を母語とする L2 学習者は、上級・超級レベルになっても、「こと」のみが使用可能な場合と、「の」のみ使用可能な場合において、誤用が残ることが分かった。そして、「こと」と「の」の両方が使用可能な場合では、中国語を母語とする L2 学習者は、上級・超級レベルになっても、母語話者とは異なる選択指向性を持っていることが分かった。つまり、中国語母語話者と日本語母語話者の間には、誤用とは言えないまでも、プリファレンスの違いが残っていることが明らかになった。では、「こと」と「の」の両方が使用可能な場合、日本語母語話者と中国語母語話者の選択は、どのような要因に影響されるのだろうか。以下の 3.1.3.2 では「こと」と「の」の選択に影響する要因について検討する。

3.1.3.2 「こと」と「の」の選択に影響する要因

本節では、「こと」と「の」の両方が使用可能な場合、日本語母語話者と中国語母語話者の選択がどのような要因に影響されるのかを検証するため、「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答を分析する。

以下に示す図 5 と図 6 は両方が使用可能な文の問題ごとの回答の割合をグラフに表したものである。図 5 は日本語母語話者の回答の割合を、図 6 は中国語母語話者の回答の割合を問題ごとに示している。また、問題 8、問題 9、問題 10 は 4 の集計した分析から除外の対象となった問題である。²

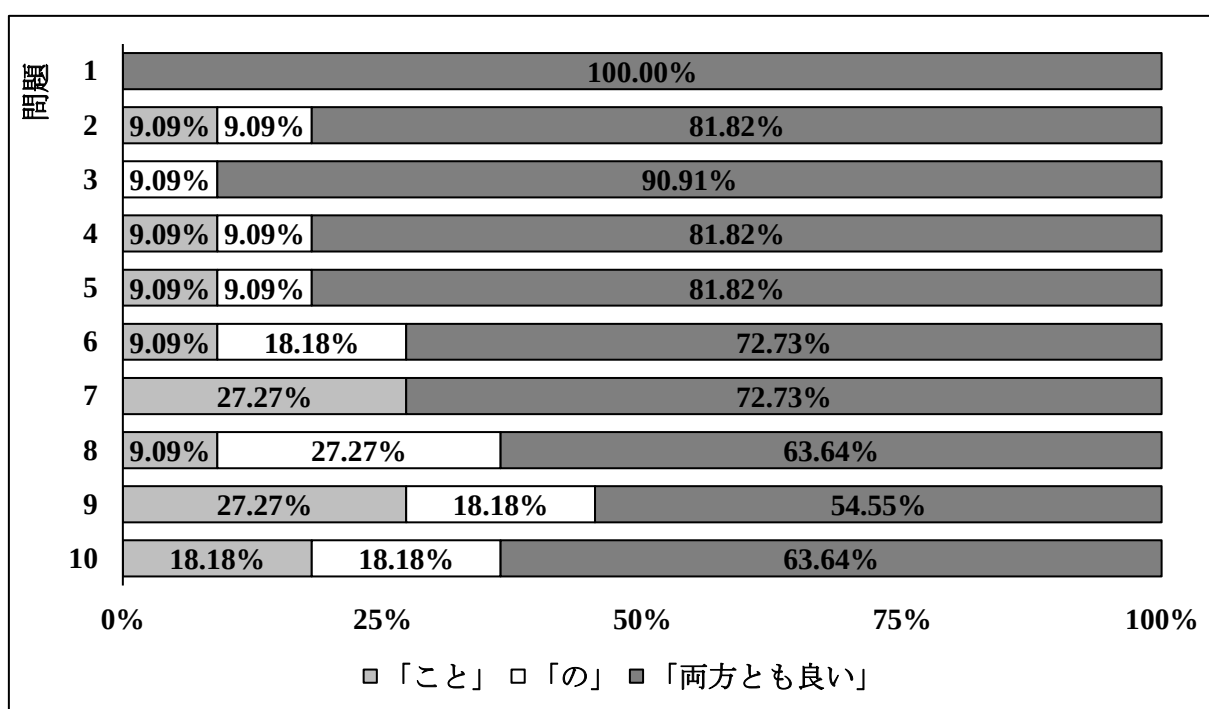


図 5. 「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合: 日本語母語話者

² 分析から除外された 3 つの文はそれぞれ、問題 8「スケジュールを調整する_____を忘れた」、問題 9「田中さんから電話が来た_____を彼に伝える」、問題 10「料理を作る_____が楽しい」であった。また、それぞれのタイプ別の問題文リストは付録 2 に掲載した。

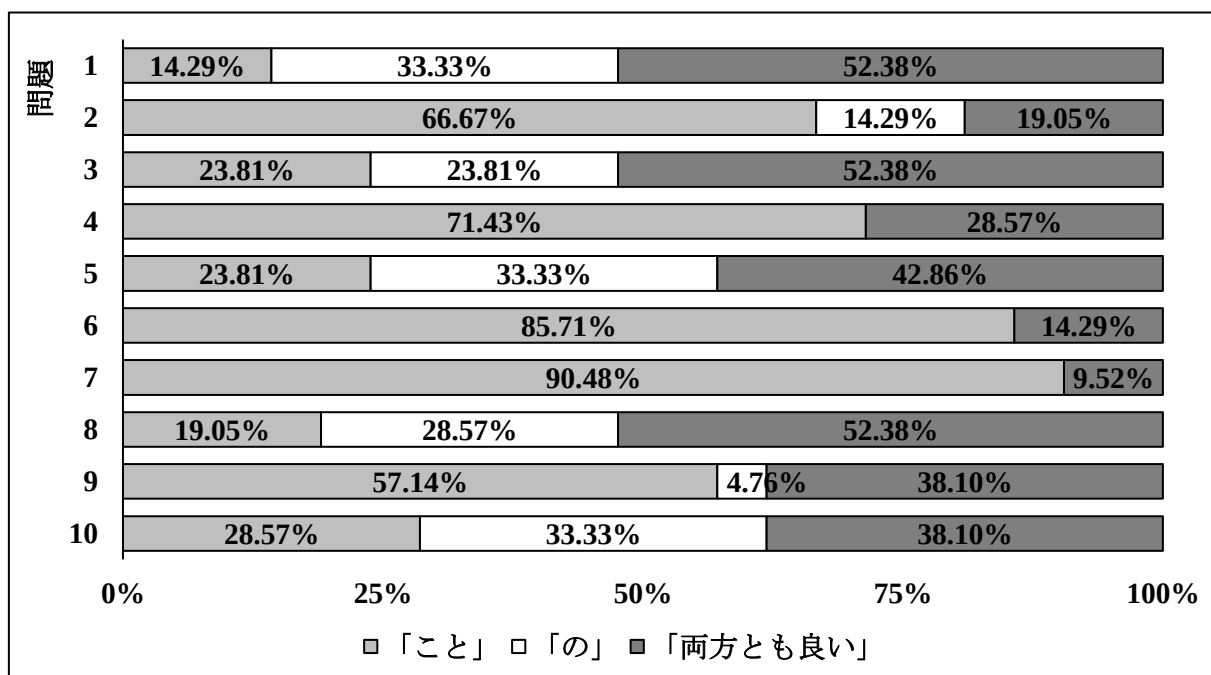


図 6. 「こと」と「の」の両方が使用可能な問題の回答の割合: 中国語母語話者

図 5 に見られるように、問題 6 と問題 7 では日本語母語話者の「両方とも良い」の選択数は比較的少なかったことが分かる。問題 6 は「自転車で日本一周する____に成功した」であった。日本語母語話者のうち、問題 6 では 9.09 % が「こと」を、18.18 % が「の」を、72.73 % が「両方とも良い」を選択した。問題 7 の「アメリカに留学するに賛成する」では、日本語母語話者のうち、27.27 % が「こと」を、72.73 % が「両方とも良い」を選択し、「の」の選択は見られなかった。

全ての問題の選択率を集計したところ、中国語母語話者については「こと」と「の」の両方が使用可能な問題において、「両方とも良い」の選択が少なかった。中でも、図 6 に見られるように、問題 2、問題 4、問題 6、問題 7 において、中国語母語話者の選択は、異なる傾向を示しており、「こと」のみの選択率が高いことが分かった。中国語母語話者が異なる回答傾向を示した 4 問のうち、問題 2 は「試合が終わった____に気づいた」であり、問題 4 は「二年前富士山に登った____を思い出した」であった。問題 6 と問題 7 では、日本語母語話者の回答においても「両方とも良い」の選択が少な

かった。³ 中国語母語話者の回答でも、問題 6、7 は最も「両方とも良い」の選択が少ない 2 問であり、問題 6 では中国語母語話者の 85.71 %が「こと」を選択し、「両方とも良い」を選択した中国語母語話者は 14.29 % であった。また、問題 7 では 90.48 % が「こと」を選択し、「両方とも良い」を選択したのは、9.52 % であった。

では、「両方とも良い」の選択が日本語母語話者と中国語母語話者において共に少なかった 2 問、問題 6 と問題 7 にはどのような共通点があるのであろうか。問題 6 と問題 7 に共通することは前の動詞句が「～する」で終わるという点である。このことから、日本語母語話者と中国語母語話者はともに前の動詞句が「～する」で結尾する場合、「こと」を選択する傾向が強くなるという仮説が立てられる。この仮説を検証するため、調査で使用した全 30 問のうち、日本語母語話者と中国語母語話者の回答を名詞化表現の前の動詞句の末尾が「～する」で終わるものと、それ以外のものに分け、その前の動詞句が「～する」で結尾するかどうかによって回答を分類し、比較した。

以下の表 2 は全問題を「こと」と「の」の前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかによって分類し、日本語母語話者の回答数を比較したものである。表 2 の中の ▲ は 5 %レベルで有意に多いことを、▽ は 5 %レベルで有意に少ないことを示している。図 7 は日本語母語話者の「こと」と「の」の選択率をグラフに表したものである。

³ 分析対象外とした問題 8～10 を除けばもっとも「両方とも良い」の回答が少なかった。

表 2. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答数:

日本語母語話者		
	「する」	「する」以外
「こと」	26 (29.55%)	92 (38.02%)
「の」	25 (28.41%)	90 (37.19%)
「両方とも良い」	37 (42.05%) (▲)	60 (24.79%) (▽)
合計	88 (100%)	242 (100%)

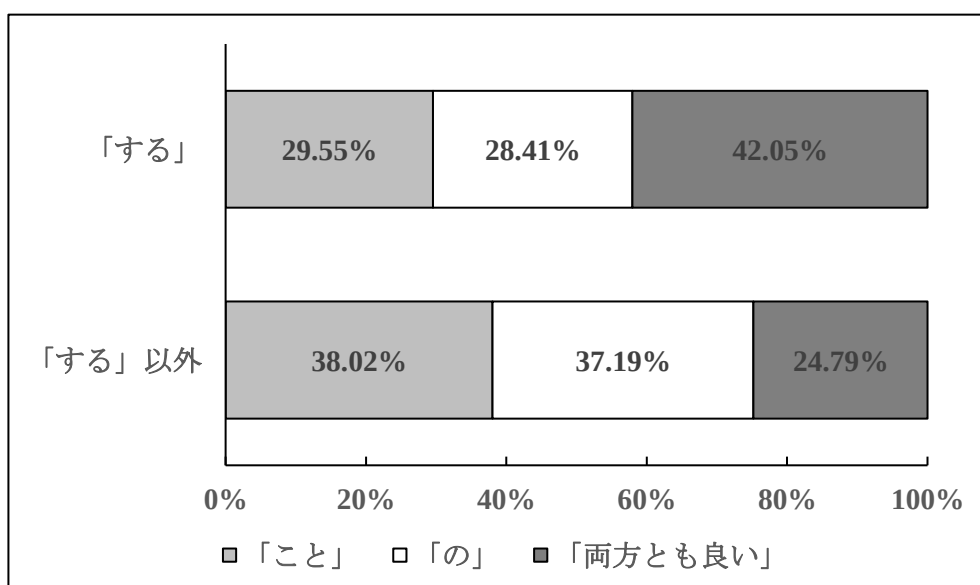


図 7. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答率:
日本語母語話者

表 2 と図 7 に見られるように、前接動詞句が「～する」で結尾する場合、日本語母語話者は 88 例中、37 例（42.05%）で「両方とも良い」を選択した。「こと」の選択は 26 例（29.55%）、「の」の選択は 25 例（28.41%）であった。これに対して、前接動詞句が「～する」以外で結尾した場合には、242 例中、60 例（24.79%）で「両方とも良い」を選択した。「こと」の選択は 92 例（38.02%）、「の」の選択は 90 例（37.19%）であった。日本語母語話者の「こと」と「の」の選択が、前接動詞句が「～する」で

結尾するかどうかによって変わるのかを検証するため、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 9.2574$, $df = 2$, $p < 0.01$)。検定の結果、前接動詞句が「～する」で結尾する場合と「～する」以外で結尾した場合とでは、日本語母語話者は「こと」と「の」の選択に差があることが分かった。さらに、日本語母語話者の残差分析の結果から見ると、日本語母語話者は前接動詞句が「～する」の場合、「両方とも良い」の選択が有意に多く、「～する」以外の場合、「両方とも良い」の選択が有意に少なかった。つまり、前接動詞句が「～する」の場合、日本語母語話者は「こと」と「の」の使用に対して、「両方とも良い」と判断する割合が多かったことが分かった。一方、前接動詞句が「～する」以外の場合、日本語母語話者は「両方とも良い」の判断が少なかったことが分かった。以上のことから、日本語母語話者は前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかに影響され、「こと」と「の」の選択傾向が変わることが明らかになった。

以下の表 2 は全問題を「こと」と「の」の前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかによって分類し、中国語母語話者の回答数を比較したものである。表 3 の中の ▲ は 5 %レベルで有意に多いことを、▽ は 5 %レベルで有意に少ないことを示している。図 8 は中国語母語話者の「こと」と「の」の選択率をグラフに表したものである。

表 3. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答数:

中国語母語話者		
	「する」	「する」ではない
「こと」	100 (59.52%) (▲)	224 (48.48%) (▽)
「の」	30 (17.86%) (▽)	152 (31.90%) (▲)
「両方とも良い」	38 (22.62%)	86 (18.61%)
合計	168 (100%)	462 (100%)

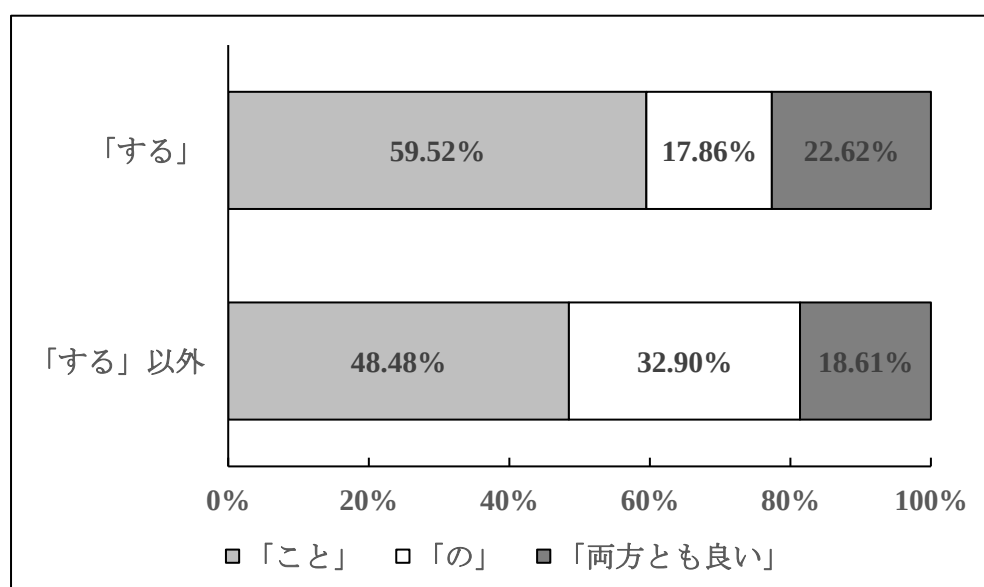


図 8. 前接動詞句が「する」・「する」以外で結尾する場合の「こと」と「の」の回答率:
中国語母語話者

表 3 と図 8 に見られるように、中国語母語話者は前接動詞句が「～する」で結尾する場合、168 例中、100 例（59.52%）で「こと」を選択した。「の」の選択は 30 例（17.86%）であり、「両方とも良い」の選択は 38 例（22.62%）であった。これに対して、前接動詞句が「～する」以外で結尾した場合、「こと」の選択は 462 例中 224 例（48.48%）、「の」の選択は 152 例（31.90%）、「両方とも良い」の選択は 86 例

(18.61%)であった。中国語母語話者の「こと」と「の」の選択傾向は、前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかによって変わるのかを検証するため、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 13.574$, $df = 2$, $p < 0.01$)。検定の結果、前接動詞句が「～する」で結尾する場合と「～する」以外で結尾した場合とでは、中国語母語話者は「こと」と「の」の選択に差があることが分かった。さらに、中国語母語話者の残差分析の結果から見ると、中国語母語話者は前接動詞句が「～する」の場合、「こと」の選択が有意に多く、「の」の選択が有意に少なかった。また、前接動詞句が「～する」以外で結尾した場合、「こと」の選択が有意に少なく、「の」の選択が有意に多かった。つまり、前接動詞句が「～する」の場合、中国語母語話者は「の」より「こと」を選択する指向性があることが分かった。一方、前接動詞句が「～する」以外の場合、中国語母語話者は「こと」より「の」を選択する指向性があり、「の」を選択する指向性が強いことが分かった。以上のことから、中国語母語話者は前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかに影響され、「こと」と「の」の選択傾向が変わることが明らかになった。

3.1.4 まとめと考察

本節では名詞化表現「こと」と「の」において、中国語を母語とする日本語上級・超級学習者の選択傾向が日本語母語話者の選択傾向とどのように異なるのかについて見てきた。奥野（2003）では、中国語母語話者の「の」の過剰使用が報告されていることから、名詞化表現においても中国語を母語とする学習者は「の」をより多く選択する傾向があると予測したものの、調査の結果、中国語母語話者は名詞化表現では「の」より「こと」をより多く使用する傾向があることが分かった。「こと」のみが使用可能な場合と、「の」のみ使用可能な場合において、中国語を母語とする学習者が上

級・超級レベルになっても、誤用が残ることが分かった。さらに、「こと」と「の」両方が使用できる場合、日本語母語話者の選択には偏った選択傾向は見られなかったが、中国語母語話者は「の」より「こと」をより多く使用する傾向があることが分かった。また、日本語母語話者と中国語母語話者は共に前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかに影響されるが、その影響の現れ方はそれぞれ異なっていた。

以上は中国語母語話者の「こと」と「の」の選択を総合的に分析した結果である。中国語母語話者と日本語母語話者には選択の違いが見られたか、本研究では上級レベルと超級レベル学習者を合わせて調査対象にしたため、参加者の中には日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ超級学習者が存在する可能性もある。このような学習者が存在するのかを検証するため、中国語母語話者の調査結果を話者ごとに分析した。最も日本語母語話者の選択傾向に近い回答をした中国語母語話者 1 名の回答では、分析対象とした 27 問の中、日本語母語話者と異なった選択をしたのは 3 問のみであった。そのほか、5 問で異なる選択をして参加者も 2 人いた。最も日本語母語話者に近い回答をした話者でも、3 つの異なった選択があり、日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ中国語母語話者はいなかった。

以上のように、中国語母語話者の全体、および個人レベルの両面の分析結果から、名詞化表現「こと」と「の」の使用に関して、中国語を母語とする L2 学習者は、上級・超級レベルになっても、母語話者とは異なる選択指向性を持っており、中国語母語話者と日本語母語話者の間に誤用という形以外でも確認できる違いが見られた。

では、「こと」と「の」以外の類似表現も、中国語母語話者と日本語母語話者の間に違いが残っているのであろうか。以下の 3.2 では丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の選択について検討する。

3.2 丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」

3.1 では類似表現としての名詞化表現「こと」と「の」の選択傾向が中国語母語話者と日本語母語話者で異なるのかを比較した。本節ではさらなる類似表現のペアである、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の使用が日本語母語話者と中国語を母語とする L2 学習者との間で異なるのかについて調査する。

日本語は丁寧語で否定を表す場合に、「ないです/なかったです」（以下「ないです」）と「ません/ませんでした」（以下「ません」）という二つの表現形式が存在する。

以下の (13) は小林 (2005) による「ないです」と「ません」の使用例である。

(13) 「ないです」と「ません」の使用例 (小林 2005: 9)

時間がないです/なかったです。
何も食べません/ませんでした。

「時間がないです」と「何も食べません」の二つの文において、「ないです」と「ません」は共に否定を表し、その意味はほぼ同じである。「ないです」と「ません」の使用は名詞化表現「こと」と「の」のような限定された使用規則がなく、どちらを使用するのは話者の好みによるものである。このように、文法的にどちらを使用しても許容される類似表現について、学習者は日本語母語話者と同様の表現を選択するのであろうか。本節では、中国語を母語とする日本語 L2 学習者と日本語母語話者による、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の選択傾向を比較する。以下の 3.2.1 では小林 (2005) による「ないです」と「ません」の日本語母語話者の使用状況についての研究を概観する。

3.2.1 日本語母語話者による「ないです」・「ません」の使用：小林（2005）

小林（2005）は日本語母語話者の日常会話に現れる丁寧体の述語否定形表現について、その選択傾向を調査した。小林（2005）の調査では『名大会話コーパス』（以下『名大』）、『女性のことば・職場編』（現代日本語研究会（編）1999、以下『女性』）、と『男性のことば・職場編』（現代日本語研究会（編）2002、以下『男性』）の3種類のコーパスを使用した。そして、音声を媒体とするやり取りであること、双方向のやり取りであること、事前に準備されたやり取りではないこと、という3つの特徴を備えた会話を「日常会話」として定義し、調査対象とした（小林 2005: 12）、その中から「ないです」と「ません」の文字を含むデータを抽出し、分析を行った。

以下の表4は、小林（2005）による「ないです」と「ません」の出現数を比較した表を筆者がまとめ直したものである。

表4. データから得られた述語否定形表現の内訳（小林 2005: 13）

	「ません」（個）		「ないです」（個）		合計
	ません	ませんでした	ないです	なかったです	
『名大』	95	4	194	9	302
『女性』	45	2	60	4	111
『男性』	39	4	126	4	173
総計	189 (32.2%)		397 (67.7%)		586 (100%)

表4は日本語母語話者の日常会話における「ないです」と「ません」の使用割合を示したものである。表4に見られるように、「ないです」の使用が586例中397例（67.7%）であったのに対して、「ません」の使用は189例（32.2%）であった。この結果から、小林（2005）は日常会話における丁寧体の述語否定形表現の使用に関して、日本語母語話者は「ません」より「ないです」をより多く選択し使用する傾向がある

と結論付けた。

そして、丁寧体の述語否定形表現の使用が、引用節で用いられているかどうかによって影響されるのかを調査するため、小林（2005）は全 586 例を改めてグループに分け、分析を行った。分析では「[我が国ではありませんねえ]、みたいな感じで。」のように、引用節（[]）の中で用いられている述語否定形を「引用節内」とし、それ以外の引用節の外にある述語否定形を「引用節外」とした（小林 2005: 15）。

以下の表 5 は、小林（2005）による「ないです」と「ません」の引用節別に使用数を比較したものである。

表 5. 引用節別述語否定形表現の使用数（小林 2005: 15）			
	「ません」（個）	「ないです」（個）	合計（個）
引用節外	13.3（25.7%）	387（74.3%）	521（100%）
引用節内	55（84.6%）	10（15.4%）	65（100%）

表 5 は「ないです」と「ません」のそれぞれの「引用節内」と「引用節外」での使用数とその割合を示したものである。表 5 に見られるように、「引用節外」の場合には「ないです」の使用が多かった（74.3%）。これに対して、「引用節内」の場合には、「ないです」の使用が 15.4%と少なく、「ません」の使用が 84.6%であった。この結果から、日常会話における丁寧体の述語否定形表現の使用に関して、小林（2005）は「引用節外」には「ないです」を、「引用節内」には「ません」を選択する傾向があると結論付けた。

上の小林（2005）は、「ないです」と「ません」についての日本語母語話者の選択傾向を調査したものであった。これに対して、川口（2006）は日本語 L2 学習者がどのような選択を行うのかの研究を行った。以下の 3.1.2 では川口による L2 学習者による「ないです」と「ません」の習得研究を概観する。

3.2.2 L2 学習者による「ないです」・「ません」の使用：川口（2006）

川口（2006）は丁寧体の述語否定形表現について、日本語を L2 として学ぶ学習者を対象とし、その選択傾向を調査した。10 名の参加者は事前テストの結果に基づき、初級・中級学習者 5 名と、上級学習者 5 名の 2 グループに分けた。初級・中級学習者のグループは英語を母語とする学習者 3 名、中国語を母語とする学習者 1 名、タイ語を母語とする学習者 1 名であった。上級学習者グループは韓国語母語話者 1 名、ネパール語母語話者 4 名であった。そして、調査対象者はそれぞれ、一人の日本語母語話者（30 代女性大学院生）がペアになって、約 20 分の会話を 2 回行い、合計 400 分の談話資料を文字化した上で、分析を行った。

以下の表 6 は、川口（2006）による「ないです」と「ません」の用例数を比較した表を筆者がまとめ直したものである。

表 6. 学習者の「ないです」と「ません」の使用割合（川口 2006: 17）

	初級・中級学習者（個）	上級学習者（個）
「ません」	69（94.5%）	12（25.5%）
「ないです」	4（5.5%）	35（74.5%）

表 6 は学習者の「ないです」と「ません」の使用割合を示したものである。表 6 に見られるように、初級・中級学習者「ません」（94.5%）を多く使用したのに対して、上級学習者では「ません」の使用率は大幅に少なかった（25.5%）。一方、「ないです」の使用率は初級・中級学習者では 5.5%であったのに対し、上級学習者では 74.5%であった。この結果から、川口（2006）は日本語 L2 学習者の習熟度が上がるに連れ、「ないです」の使用が増加すると結論付けた。

前述した小林（2005）と川口（2006）の研究は、それぞれ日本語母語話者と初級・中級、上級の学習者を対象とした丁寧体の述語否定形表現の使用を調査したものであった。では、上級・超級 L2 学習者の丁寧体の述語否定形表現の選択傾向は、日本語母語話者とどのように異なるのであろうか。範（2019）では中国語を母語とする日本語学習者が「ないです」と「ません」をどのように使用しているのかを調査した。以下の 3.2.3 では範（2019）による研究を概観する。

3.2.3 範（2019）による分析

範（2019）では、中国語を母語とする上級・超級学習者と日本語母語話者が丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」をどのように使用しているのかを、二つの調査により比較した。調査 1 では日本語学習者コーパス OPI インタビューデータ KY コーパス（鎌田・山内 1999、以下「KY コーパス」）を利用した。KY コーパスに含まれる発話のうち、中国語を母語とする日本語学習者のものを習熟度により分け、発話のうち「ないです」と「ません」の出現数を数え、その選択傾向を分析した。

以下の表 7 は学習者の習熟度別に「ないです」と「ません」の使用を比較したものである。また、図 9 は学習者の習熟度別に「ないです」と「ません」の使用率をグラフに表したものである。

表 7. 学習者コーパスによる「ないです」と「ません」の使用数と使用率

	中級（個）	上級・超級（個）
「ないです」	65 (36.11%)	89 (40.45%)
「ません」	115 (63.89%)	131 (59.55%)
合計	180 (100.00%)	220 (100.00%)

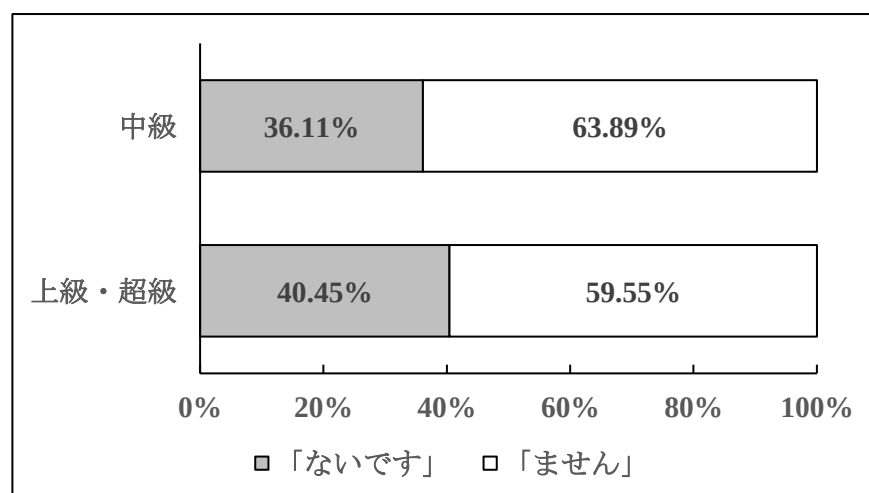


図 9. 学習者レベル別「ないです」と「ません」の使用の割合

表 7 と図 9 に見られるように、「ないです」の使用は、中級学習者では 65 例 (36.11%) であったのに対して、上級・超級学習者では 89 例 (40.45%) であった。一方、「ません」の使用は、中級学習者では 115 例 (63.89%) であり、上級・超級学習者では 131 例 (59.55%) であった。中級学習者と比較して、上級・超級学習者の「ないです」の使用率はより高かった。中級学習者と上級・超級学習者の「ないです」と「ません」の使用に差が認められるかカイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差は認められなかった ($\chi^2 = 0.7888$, $df = 1$, $p > 0.1$, NS.)。このように検定の結果、「ないです」と「ません」の使用について、中級学習者と上級・超級学習者の間には統計的な差は認められなかった。

上に示した調査 1 では「ないです」と「ません」について、異なる習熟度の学習者の間に使用の違いが存在するのかを調査したものであった。以降では、習熟度の高い学習者であっても「ないです」と「ません」を混用するのかどうか、そしてどのように混用するのかにについて、さらに調査を行った。

日本語母語話者と上級・超級学習者の間に「ないです」と「ません」の使用に違いが存在するのかを明らかにするため、範 (2019) では調査用紙による調査 2 を行った。

調査用紙の前半では場面を説明し、「ないです」と「ません」の 2 つの選択肢から正しいと思う表現を選択させる選択式問題であり、後半は指定された表現を使用して日本語で作文をする問題であった。

以下の (14) は実験に使用した問題の例である。

(14) 丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の問題例

- ① あなたは友達と雑談をしています。「新しい映画はどうですか？」と聞かれました。どう答えますか？
 - a. あの映画はまだ見てないです。
 - b. あの映画はまだ見ていません。

- ② あなたは先輩に「お酒を飲みに行きませんか？」と聞かれました。「飲みに行く」という動詞句を使用し、断る文を書いてください。

(14) に示したように、「ないです」と「ません」に関する問題を選択式問題 5 問、作文問題 2 問を作成した（本実験にて使用した問題は、付録 3 に掲載した）。調査 2 の参加者は関東出身の日本語母語話者 37 名、日本に留学中の標準中国語を母語とする日本語学習者 25 名であった。中国語母語話者はすべて日本語能力試験 N1 に合格し、日本での留学経験がある学習者であった。本研究ではこれらの参加者を上級・超級学習者として扱った。

以下の表 8 と表 9 は、日本語母語話者と中国語母語話者による「ないです」と「ません」の選択数と選択率を表にしたものであり、図 10 は日本語母語話者と中国語母語話者の「ないです」と「ません」の選択率をグラフに表したものである。

表 8. 「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 日本語母語話者

	選択数（個）	割合
「ないです」	112	49.78%
「ません」	113	50.22%
合計	225	100.00%

表 9. 「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 中国語母語話者

	選択数（個）	割合
「ないです」	114	69.09%
「ません」	51	30.91%
合計	165	100.00%

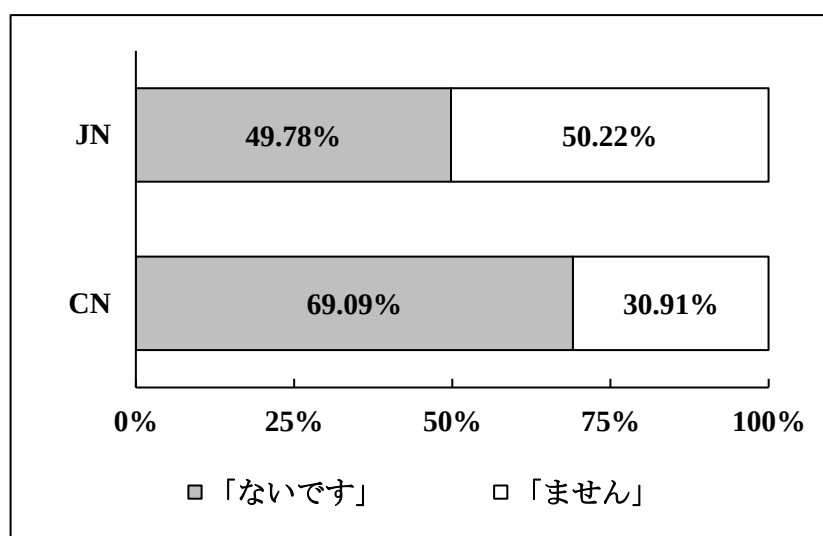


図 10. 「ないです」と「ません」の選択率: 日本語母語話者と中国語母語話者

表 8 と表 9、および図 10 に見られるように、「ないです」と「ません」において、日本語母語話者の「ないです」の選択数は 225 例中 112 例（49.78%）であったのに対して、中国語母語話者の選択数は 165 例中 114 例（69.09%）であった。そして、日本語母語話者の「ません」の選択数は 113 例（50.22%）であり、中国語母語話者は 51 例

(30.91%) であった。日本語母語話者と中国語母語話者の「ないです」と「ません」の選択に差が認められるかどうか、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 14.571$, $df = 1$, $p < 0.01$)。中国語母語話者の「ないです」の選択率は日本語母語話者に比べて高く、日本語母語話者では「ないです」と「ません」の選択率がほぼ同じであったのに対して、中国語母語話者は「ないです」をより多く選択していたことが分かった。

また、述語否定形表現の使用が話し相手に影響されるのかを分析するため、「目上の人」と「目上の人以外」による「ないです」と「ません」の使用状況を分析した。

以下の表 10 は日本語母語話者の話し相手別による、「ないです」と「ません」の選択数と選択率を表にしたものであり、図 11 は日本語母語話者の話し相手別による「ないです」と「ません」の選択率をグラフに表したものである。

表 10. 話し相手別「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 日本語母語話者

	目上の人 (個)	目上の人以外 (個)
「ないです」	18 (32.73%)	94 (55.29%)
「ません」	37 (67.27%)	76 (44.71%)
合計	55 (100.00%)	170 (100.00%)

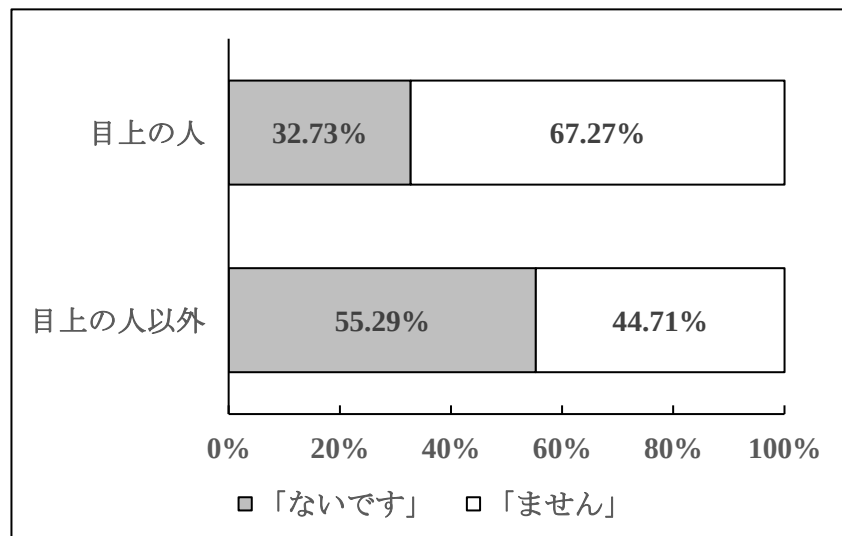


図 11. 話し相手別「ないです」と「ません」の使用の割合: 日本語母語話者

表 10 と図 11 に見られるように、日本語母語話者は話し相手が「目上の人」の場合、55 例中、18 例（3.173%）で「ないです」を選択、一方、「ません」の選択は 37 例（67.27%）であった。これに対して、話し相手が「目上の人以外」の場合、170 例中 94 例（55.29%）で「ないです」を選択し、一方、「ません」の選択は 76 例（44.71%）であった。日本語母語話者の「ないです」と「ません」の選択傾向は、話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」によって変わるのかどうかを検証するため、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 8.4652$, $df = 1$, $p < 0.01$)。以上の検定の結果、話し相手が目上かどうかによって、日本語母語話者は「ないです」と「ません」の使用に対しての選択が変わったことが分かった。話し相手が「目上の人」の場合では「ません」へのプリファレンスを示したが、話し相手が「目上の人以外」の場合は明らかな選択傾向を示していなかった。

そして、以下の表 11 は中国語母語話者の話し相手別による、「ないです」と「ません」の選択数と選択率を表にしたものであり、図 12 は中国語母語話者の話し相手別による「ないです」と「ません」の選択率をグラフに表したものである。

表 11. 話し相手別「ないです」と「ません」の選択数と選択率: 中国語母語話者

	目上の人 (個)	目上の人以外 (個)
「ないです」	20 (45.45%)	108 (80.00%)
「ません」	24 (54.55%)	27 (20.00%)
合計	44 (100.00%)	135 (100.00%)

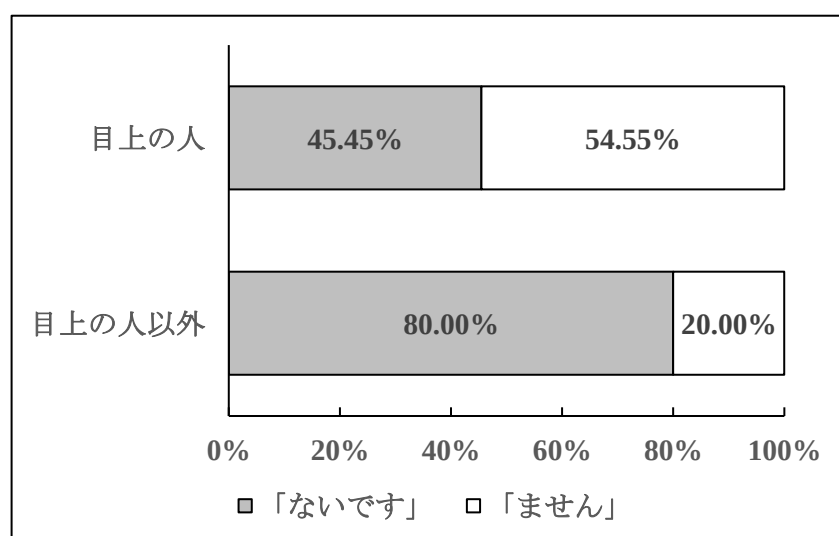


図 12. 話し相手別「ないです」と「ません」の使用の割合: 中国語母語話者

表 11 と図 12 に見られるように、話し相手が「目上の人」の場合、中国語母語話者は 44 例中、20 例 (45.45%) で「ないです」を選択した。一方、「ません」の選択は 24 例 (54.55%) であった。これに対して、話し相手が「目上の人以外」の場合、135 例中、108 例 (80.00%) で「ないです」を選択、「ません」の選択は 27 例 (20.00%) であった。中国語母語話者の「ないです」と「ません」の選択傾向は、話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」によって変わるのかどうかを検証するため、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 19.438$, $df = 1$, $p < 0.01$)。従って、検定の結果、話し相手が目上かどうかによって、中国語母語話者は「ないです」と「ません」の使用に対しての選択が変わったことが分かった。話し相手が「目上の人」の

場合では明らかな選択傾向を示していなかったが、話し相手が「目上の人以外」の場合では「ないです」へのプリファレンスを示した。

調査 2 では、日本語母語話者と中国語母語話者の「ないです」と「ません」の選択状況について探究した。全般的に選択傾向を見ると、日本語母語話者は顕著なプリファレンスを示していなかったが、中国語母語話者は「ないです」への選択傾向を示すことが分かった。そして、話し相手別の選択傾向を見ると、日本語母語話者と中国語母語話者はともに話し相手により、「ないです」と「ません」の選択傾向が影響されるが、その影響の現れ方は異なっていた。

3.2.4 まとめと考察

本節では学習者コーパスと調査用紙を使用した調査により、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」において、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の選択傾向が日本語母語話者の選択傾向とどのように異なるのかについて見てきた。先行研究の川口（2006）の日本語 L2 学習者は習熟度が上がるにつれて、「ないです」を使用するようになるという結論から、調査 1 では上級・超級学習者が中級学習者より「ないです」の選択率が高いと予測した。しかし、調査の結果、超級・上級学習者の「ないです」の選択率は高かったが、中級学習者の選択率と比べて、有意な差は認められず、選択傾向に違いが存在するとは言えなかった。川口（2006）の L2 学習者の習熟度が上がるにつれ、「ないです」を使用するようになるという結論を支持する結果とは言えなかった。

小林（2005）では日本語母語話者は日常会話において、「ません」より「ないです」をより多く選択し使用する傾向があるという調査結果から示した。調査 2 から、日本語母語話者は「ないです」を選択する傾向があると予測した。しかし、その結果、「な

いです」と「ません」の、日本語母語話者の選択率がほぼ同じであり、中国語母語話者は「ないです」をより多く選択していたことが分かった。日本語母語話者は明らかな選択傾向を示さなかったが、中国語母語話者は「ないです」へのプリファレンスを示した。また、話し相手が「目上の人」の場合、日本語母語話者は「ません」へのプリファレンスを示し、中国語母語話者には明らかなプリファレンスは見られなかった。一方、「目上の人以外」の場合、日本語母語話者は明らかな選択傾向はなく、中国語母語話者は「ないです」へのプリファレンスを示した。「ないです」と「ません」の使用について、日本語母語話者と中国語母語話者は共に話し相手に影響されるが、その影響はそれぞれ異なっていた。

以上では中国語母語話者の「ないです」と「ません」の選択を総合的に分析した。さらに、個人として日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ超級学習者が存在するのかを検証するため、話者ごとに中国語母語話者の調査結果を分析した。その結果、話し相手が「目上の人」の場合、日本語母語話者のように「ません」を使用した中国語母語話者は 25 人の中 7 人いた。しかし、話し相手が「目上の人以外」の場合には、日本語母語話者は明らかな選択傾向が示さなかったが、この 7 人の中国語母語話者は共に「ないです」へのプリファレンスを示していた。話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」の場合の両方において、日本語母語話者と同様のプリファレンスを持つ中国語母語話者は見られなかった。

以上のように、中国語母語話者の全体、および個人レベルの両面からの分析結果では、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の使用に関して、中国語を母語とする L2 学習者は、上級・超級レベルになっても、母語話者とは異なる選択傾向を示しており、中国語母語話者と日本語母語話者の間に誤用としては観察されない違いが見られることが明らかになった。では、「ないです」と「ません」以外の類似表現においても、中国語母語話者と日本語母語話者の間に選択傾向の違いが見られるのであ

ろうか。以下の 3.3 では理由を提示する表現「から」と「ので」の使用について検討する。

3.3 理由を提示する表現「から」と「ので」

3.2 では、類似表現のペア丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の選択傾向が中国語母語話者と日本語母語話者で異なるのかを比較した。本節では類似表現として、理由を提示する表現「から」と「ので」の使用が日本語母語話者と中国語母語話者との間で異なるのかを取り上げる。

「から」と「ので」は、日本語が理由を提示する場合に使用する二つの表現形式である。その使用の違いについて、永野（1952: 38）は以下のように述べた。

「から」は、表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付けられる言い方、「ので」は、前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、表現者の主観を超えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方である（永野 1952: 38）。

このように、永野（1952）は「から」を主観的な描写、「ので」を客観的な描写に用いられると論じた。しかし、実際の使用では、「から」と「ので」の使用範囲は多く重なり、お互い置換できる状況が多い（小西 2010）。

以下の（15）は花井（1990）による理由を提示する表現「から」と「ので」の使用例である。

(15) 理由を提示する表現「から」と「ので」の使用例（花井 1990: 57）

電車が遅れたから遅刻しました。

電車が遅れたので遅刻しました。

「電車が遅れたから遅刻しました」と、「電車が遅れたので遅刻しました」の二つの文において、「から」と「ので」は共に原因・理由を提示し、意味はほぼ同じであり、発話者の好みに応じて使用され、お互いに置換可能である。このような文法的にどちらも同じ環境での使用が許容される類似表現について、学習者は日本語母語話者と同様の表現を選択するのであろうか。本節では、中国語を母語とする日本語 L2 学習者と日本語母語話者による、理由を提示する表現「から」と「ので」の選択傾向を比較する。以下の 3.3.1 では花井（1990）による「から」と「ので」の日本語母語話者の使用状況についての研究を概観する。

3.3.1 日本語母語話者による「から」・「ので」の使用：花井（1990）

花井（1990）は理由を提示する表現「から」と「ので」について、日本語母語話者を対象とし、その使用傾向を調査した。花井による調査の資料は新聞の随筆 50 編と対談 23 編であった。随筆は『日経夕刊』から選んだ短編（1988 年 9 月～11 月）であり、対談は『ユリイカ』（1988 年 8 月号）、『文学界』（1988 年 3 月）を使用した。そして、資料から「から」と「ので」を含むデータを抽出し、分析を行った。

以下の表 12 は、花井（1990）による「から」と「ので」の使用数と使用率を比較した表を筆者がまとめ直したものである。

表 12. 「から」と「ので」の使用数と使用率（花井 1990: 62）

	随筆（個）	対話（個）		
		ユリイカ	文学界	向田対談
「から」	45 (44%)	54 (93%)	21 (87.5%)	190 (93%)
「ので」	57 (56%)	4 (7%)	3 (12.5%)	15 (7%)
合計	102 (100%)	58 (100%)	24 (100%)	205 (100%)

表 12 は日本語母語話者の「から」と「ので」の使用割合を示したものである。表 12 に見られるように、対話の場合、「から」の使用が大半を占めていたのに対して、随筆の場合「ので」の使用が多かった。この結果から、花井（1990）は日本語母語話者の「から」と「ので」の使用に関して、「から」は会話の中、「ので」は一方的な伝達文で主に利用されると結論付けた。

理由を提示する表現「から」と「ので」について、本節で述べた花井（1990）の研究は日本語母語話者の選択傾向を調査したものであった。では、L2 学習者はどのように「から」と「ので」を習得し使用しているのだろうか。以下の 3.3.2 では L2 習得における「から」と「ので」の習得研究を概観する。

3.3.2 L2 学習者による「から」と「ので」の使用

これまで L2 学習者がどのように「から」と「ので」を習得し使用するのかについて、多くの研究がなされてきた。そのうち、周（2009）は「から」と「ので」について、日本語を L2 として学ぶ学習者と日本語母語話者を対象とし、その使用状況を調査した。母語話者は大学 4 年生計 41 名であり、学習者は中国語を母語とし、かつ中国に在住している日本語学科の学生であり、そのうち 2 年生が 50 名、3 年生 41 名、4 年生 40 名、合計 131 名であった。そして、調査対象に 6 つの場面を設定し、相手の誘いを断るように指示し、談話完成テストを実施した。談話の場面は上下関係により上、同、下を設定し、さらに親疎関係により疎と親に分類した。それぞれが上疎、上親、同疎、同

親、下疎、下親に当たる。そして、調査の回答文の中から、「から」と「ので」を使用する例を抽出し、分析を行った。その結果、目上の人（上疎、上親）に対して、母語話者は「から」をほとんど使用しておらず（2%～7%）、「ので」が8割以上で使用されていた（80%～85%）。これに対して、目上の人以外（同疎、同親、下疎、下親）ではほとんど「ので」は使用されず（2%～5%）、「から」の使用が多かった（24%～41%）。一方、学習者の場合、目上の人に対しても「から」の使用が多く（25%～46%）、目上の人以外に対する「から」の使用（18～41%）と大きな違いは見られなかった。つまり、学習者は話し相手を問わず「から」と「ので」を混用したことが分かる。以上の結果から、周（2009）が母語話者は話し相手の上下と親疎関係の違いにより、「から」と「ので」の使用を変えていたが、学習者はその関係に影響されず「から」と「ので」を混用していたと結論付けた。

また、畠山（2012）も「から」と「ので」について、日本語をL2として学ぶ学習者と日本語母語話者を対象とし、その使用状況を調査した。母語話者は46名であり、学習者はアメリカの大学で外国語として日本語を学ぶ中級以上の学生22名と、日本の大学で留学していた学生12名、合計34名であった。学習者の母語は英語、韓国語、スペイン語、フランス語、中国語などであった。調査対象に25項目の場面を設定した上、「から」と「ので」が入る部分を空欄にした文を呈示し、正解だと思う表現を「から」と「ので」の中から選択させた。そして、まだ習得していない漢字や語彙による混乱を防ぐため、英語での訳文を付け、「から」と「ので」の部分を“because”を用いて翻訳した。また、25項目の場面のうち10項目は錯乱肢であり、基準である母語話者の選択が散在する項目も分析から外した。分析対象としたのは8項目の場面であった（「から」と「ので」それぞれ4項目）。

以下の（16）は畠山（2012）に使用した質問の例である。

(16) 「から」と「ので」の問題例 (畠山 2012: 7)

Situation : Professor mentions that a student did not come to class the day before. The student explains why she was absent.

先生：昨日クラスに来ませんでしたね。

学生：すみません。頭がとても_____休みました。

Professor: You didn't come to class yesterday.

Student: I'm sorry. I stayed home because I had a really bad headache.

・痛かったから

・痛かったので

結果、母語話者は目上の人に対しては「ので」を、目上の人以外では「から」を使用する傾向が示された。これは周（2009）の結果と一致している。一方、学習者の場合、話し相手による「から」と「ので」の使用傾向に差が見えなかった。つまり、学習者は話し相手が目上かどうかで使い分けしておらず、「から」と「ので」を使用していた。つまり、母語話者を対象とした調査同様、学習者を対象とした結果も、周（2009）で得られた結果と一致していることが分かった。

以上のように「から」と「ので」の選択使用傾向について、花井（1990）と周（2009）と畠山（2012）はそれぞれ、日本語母語話者と学習者を対象として調査を行った。しかし、周（2009）と畠山（2012）の調査対象は初級レベル以上の学習者であり、学習レベルにばらつきが見られた。畠山（2012）の研究では学習者の母語が様々であった。そこで、範（2019）では中国語を母語とする上級・超級学習者が「から」と「ので」をどのように使用しているのかを調査した。以下の 3.3.3 では範（2019）による研究を概観する。

3.3.3 範（2019）による分析

範（2019）は、上級・超級学習者と日本語母語話者が理由を提示する表現「から」と「ので」をどのように使用しているのかを、二つの調査により比較した。3.2.3 で述べたように、調査1では日本語学習者コーパス OPI インタビューデータ KY コーパス（鎌田・山内 1999）を利用した。KY コーパスに含まれる発話のうち、中国語を母語とする日本語学習者のものを習熟度により分け、「から」と「ので」の出現数を数え、その選択傾向を分析した。

以下の表 13 は学習者の習熟度別に「から」と「ので」の使用を比較したものである。また、図 13 は学習者の習熟度別に「から」と「ので」の使用率をグラフに表したものである。

表 13. 学習者コーパスによる「から」と「ので」の使用数と使用率

	中級（個）	上級・超級（個）
「から」	107（91.45%）	252（82.89%）
「ので」	10（8.55%）	52（17.11%）
合計	117（100.00%）	304（100.00%）

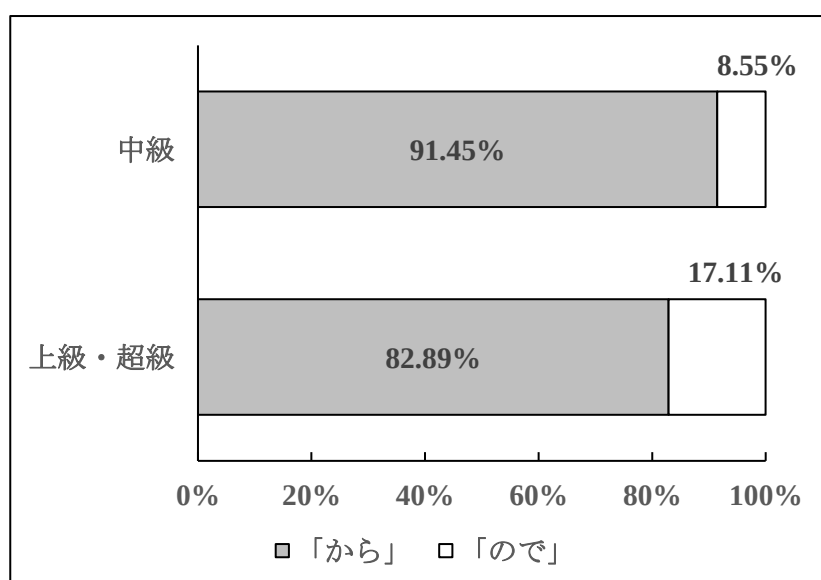


図 13. 学習者レベル別「から」と「ので」の使用の割合

表 13 と図 13 に見られるように、「から」の使用は中級学習者では 107 例（91.45%）であったのに対して、上級・超級学習者では 252 例（82.89%）であった。一方、「ので」の使用は、中級学習者では 10 例（8.55%）、上級・超級学習者では 52 例（17.11%）であり、中級学習者と比較して、上級・超級学習者の「ので」の使用率はより高かった。中級学習者と上級・超級学習者の「から」と「ので」の使用に差が認められるかカイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 4.9275$, $df = 1$, $p < 0.05$)。このように検定の結果、「から」と「ので」の使用について、中級学習者と上級・超級学習者の間には統計的な差が認められた。つまり、中国語母語話者は日本語能力の向上するにつれ、「ので」の使用率が高くなる傾向があることを示した。

上に示した調査 1 は「から」と「ので」について、異なる習熟度の学習者の間に使用の違いが存在するのかを調査したものであった。この調査 1 に加え、習熟度の高い学習者であっても、「から」と「ので」を混用するかどうか、そしてどのように混用するのかについて、さらに調査を行った。

日本語母語話者と中国語母語話者の間に「から」と「ので」の使用に違いが存在するのかを明らかにするため、範（2019）では調査用紙による調査 2 を行った。調査用紙の前半では場面を説明し、「から」と「ので」の 2 つの選択肢から正しいと思う表現を選択させる選択式問題であり、後半は指定された表現を使用した日本語で作文をする問題であった。

以下の（17）は実験に使用した問題の例である。

（17）理由を提示する表現「から」と「ので」の問題例

- ① 授業に遅刻した理由を先生に聞かれました。どのように答えますか？
 - a. すみません、電車が遅れたから、遅刻しました。
 - b. すみません、電車が遅れたので、遅刻しました。

- ② 授業中、気分が悪くなってしまいました。担当の先生に、帰宅したい旨と、その理由を伝える文を 1 文で書いてください。

（17）に示したように、「から」と「ので」に関する問題を選択式問題 5 問、作文問題 2 問を作成した（本実験にて使用した問題は、付録 3 に掲載した）。3.2.3 で述べたように、調査 2 の参加者は関東出身の日本語母語話者 37 名、日本に留学中の標準中国語を母語とする日本語学習者 25 名であった。中国語母語話者はすべて日本語能力試験 N1 に合格し、日本での留学経験がある学習者であった。本研究ではこれらの参加者を上級・超級学習者として扱った。

以下の表 14 と表 15 は、日本語母語話者と中国語母語話者による「から」と「ので」

の選択数と選択率を表に表したものである。図 14 は日本語母語話者と中国語母語話者の「から」と「ので」の選択率をグラフに表したものである。

表 14. 「から」と「ので」の選択数と選択率: 日本語母語話者

	選択数 (個)	割合
「から」	49	20.50%
「ので」	190	79.50%
合計	239	100.00%

表 15. 「から」と「ので」の選択数と選択率: 中国語母語話者

	選択数 (個)	割合
「から」	68	43.04%
「ので」	90	56.96%
合計	158	100.00%

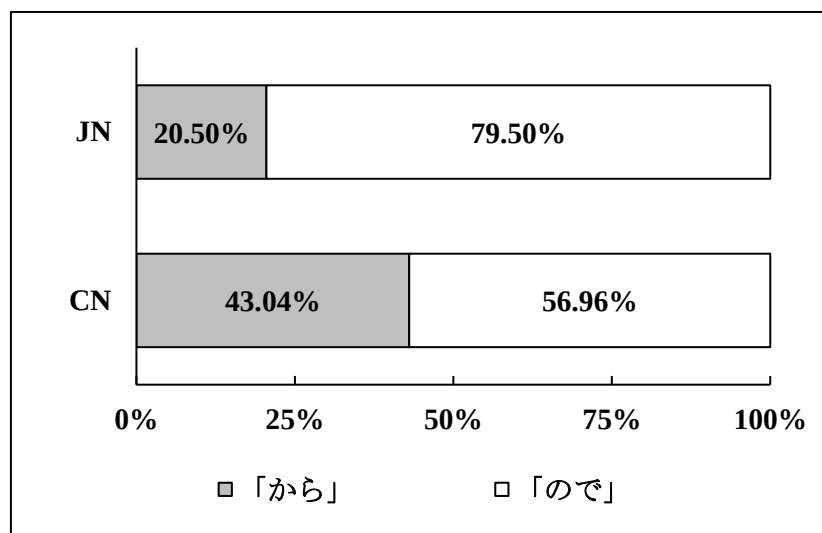


図 14. 「から」と「ので」の選択率: 日本語母語話者と中国語母語話者

表 14 と表 15、および図 14 に見られるように、「から」と「ので」において、日本語

母語話者の「から」の選択数は、239 例中 49 例（20.50%）であったのに対して、中国語母語話者の選択数は 158 例中 68 例（43.04%）であった。そして、日本語母語話者の「ので」の選択数は 190 例（79.50%）であり、中国語母語話者は 90 例（56.96%）であった。日本語母語話者と中国語母語話者の「から」と「ので」の選択に差が認められるかどうかについてカイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた（ $\chi^2 = 23.141$, $df = 1$, $p < 0.01$ ）。日本語母語話者は「から」に比べて「ので」を大幅に多く選択していたのに対して、中国語母語話者は「ので」をより多く選択していたが、「から」の選択率とは大きな差がなかった。

また、理由を提示する表現の使用が話し相手に影響されるのかを分析するため、「目上の人」と「目上の人以外」による「から」と「ので」の使用状況を分析した。

以下の表 16 は日本語母語話者の話し相手別による「から」と「ので」の選択数と選択率を表にしたものであり、図 15 は日本語母語話者の話し相手別による「から」と「ので」の選択率をグラフに表したものである。

表 16. 話し相手別「から」と「ので」の選択数と選択率: 日本語母語話者

	目上の人（個）	目上の人以外（個）
「から」	2（1.96%）	47（34.31%）
「ので」	100（98.04%）	90（65.69%）
合計	102（100.00%）	137（100.00%）

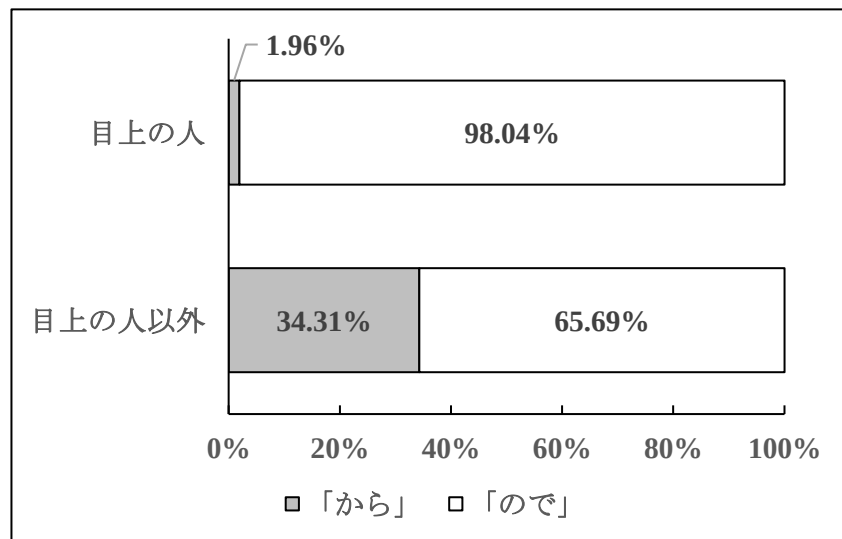


図 15. 話し相手別「から」と「ので」の使用の割合：日本語母語話者

表 16 と図 15 に見られるように、日本語母語話者は話し相手が「目上の人」の場合、102 例中、2 例（1.96%）で「から」を選択し、「ので」の選択は 100 例（98.04%）であった。これに対して、話し相手が「目上の人以外」の場合、137 例中、47 例（34.31%）で「から」を選択し、「ので」の選択は 90 例（65.69%）であった。日本語母語話者の「から」と「ので」の使用は話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」によって変わるのかどうかを検証するためカイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が認められた ($\chi^2 = 37.53.1$, $df = 1$, $p < 0.01$)。以上の検定の結果、話し相手が目上かどうかによって、日本語母語話者は「から」と「ので」の使用の選択が変わったことが分かった。話し相手が「目上の人」の場合では「ので」への強いプリファレンスを示したのに対して、話し相手が「目上の人以外」の場合もこの選択傾向を示したものの、「目上の人」の場合と比べて、その傾向は弱くなっていることが分かった。

そして、以下の表 17 は中国語母語話者の話し相手別による「から」と「ので」の選択数と選択率を表にしたものであり、図 16 は中国語母語話者の話し相手別による「から」と「ので」の選択率をグラフに表したものである。

表 17. 話し相手別「から」と「ので」の選択数と選択率: 中国語母語話者

	目上の人 (個)	目上の人以外 (個)
「から」	17 (25.76%)	51 (55.44%)
「ので」	49 (74.24%)	41 (44.56%)
合計	66 (100.00%)	92 (100.00%)

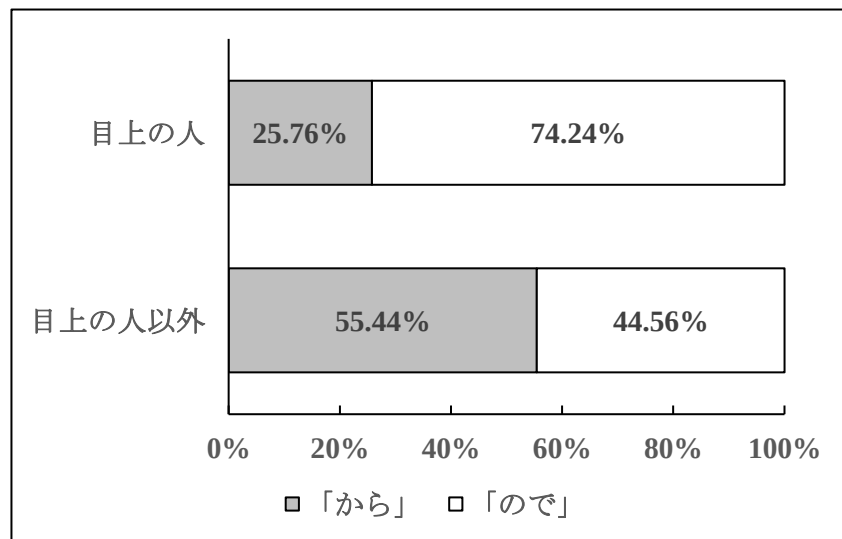


図 16. 話し相手別「から」と「ので」の使用の割合: 中国語母語話者

表 17 と図 16 に見られるように、話し相手が「目上の人」の場合、中国語母語話者は 66 例中、17 例 (25.76%) で「から」を選択し、「ので」の選択は 49 例 (74.24%) であった。これに対して、話し相手が「目上の人以外」の場合、92 例中 51 例 (55.44%) で「から」を選択し、「ので」の選択は 41 例 (44.56%) であった。中国語母語話者の「から」と「ので」の選択傾向は、話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」によって変化しているのかどうかを検証するため、カイ 2 乗検定を行ったところ、有意な差が見られた ($\chi^2 = 13.806$, $df = 1$, $p < 0.01$)。従って、検定の結果、話し相手が目上かどうかによって、中国語母語話者は「から」と「ので」の使用に対しての選択が変わったことが分かった。日本語母語話者ほどではないが、話し相手が「目上

の人」の場合では、中国語母語話者においても「ので」へのプリファレンスを示した。一方、話し相手が「目上の人以外」の場合では中国語母語話者は明らかなプリファレンスを示さなかった。

3.3.4 まとめと考察

本節では学習者コーパスと調査用紙の 2 つの方法を使用し、理由を提示する表現「から」と「ので」において、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の選択傾向が日本語母語話者の選択傾向とどのように異なるのかについて分析した。先行研究の周（2009）と畠山（2012）では、母語話者は話し相手との上下と親疎関係の違いにより、「から」と「ので」を使い分けるという結果が示されたが、L2 日本語学習者は話し相手との関係に影響されず「から」と「ので」を混用していたと結論づけた。「から」と「ので」の使用状況は学習者の習熟度によって変わるのかを検証するため、範（2019）では学習者コーパスを用いた調査 1 を通して、習熟度別で「から」と「ので」の使用を比較した。その結果、中国語母語話者は能力の向上につれ、「ので」の使用率が高くなるという結果を得た。つまり、学習者の習熟度によって、理由を提示する表現「から」と「ので」の使用状況が変わることが分かった。

さらに、母語話者と上級・超級学習者は「から」と「ので」をどのように使用しているのかを調査するため、調査用紙を用いた調査 2 を行った。その結果、日本語母語話者は「ので」への強いプリファレンスを示していたが、中国語母語話者は顕著なプリファレンスを示さなかった。また、話し相手が「目上の人」の場合、日本語母語話者と中国語母語話者は共に「ので」への強いプリファレンスを示したものの、中国語母語話者の指向性は日本語母語話者と比べて、さほど強くなかった。一方、「目上の人以外」の場合、日本語母語話者も「ので」へのプリファレンスを示したが、その指向

性は「目上の人」の場合より弱くなった。中国語母語話者は明らかなプリファレンスを示さなかった。本研究では「から」と「ので」を類義表現として扱ってきたが、「目上の人」の場合、日本語母語話者がほぼ「ので」を選択したことから、「目上の人」に対して「ので」を選択することが規範的であると言える。しかし、この社会的関係による「から」と「ので」の使い分けが正しく出来ていない学習者も多いことが分かった。このように、「から」と「ので」の選択について、日本語母語話者と中国語を母語とする L2 日本語学習者は共に話し相手に影響されるが、その影響の度合いは異なることが分かった。

これまで、中国語母語話者の「から」と「ので」の選択を総合的に分析してきた。そこで、日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ超級話者が存在するのかを検証するため、話者ごとに調査結果を分析した。その結果、話し相手が「目上の人」の場合、日本語母語話者のように「ので」を使用した中国語母語話者は 25 人の中 6 人いた。そのうち、話し相手が「目上の人以外」の場合にも、「ので」へのプリファレンスを示したのは 1 人であった。このように、上級・超級学習者の中には日本語母語話者と同じく、社会的立場によって「から」と「ので」を適切に使い分けられていると思われる話者も見られた。しかし、この話者は目上の人以外の場合にも「ので」を選択しており、「から」と「ので」の使用を正しく身につけているのかどうかについては判断が困難である。

これまで見てきたように、上級・超級レベルの中国語母語話者の「から」と「ので」の使用を全体、および個人レベルで比較した結果、目上の人に対する場合の「から」と「ので」の選択には誤用が残る場合が多いことが分かった。しかし、1 名、参加者の中には目上の人に正しく「ので」を使用している参加者も見られた。しかし、この参加者はほかの場合にもいても全て「ので」を選択しており、「から」と「ので」の使用を正しく母語話者と同じレベルで獲得しているのかどうかは明らかではなかった。

全体的には、中国語母語話者は日本語母語話者とは異なる選択傾向を示しており、中国語母語話者と日本語母語話者の間に誤用としては見られない相違が見られることが明らかになった。

3.4 類似表現に関する研究のまとめ

中国語母語話者と日本語母語話者の間に誤用としては表れない違いが見られるかを調査するため、本章では名詞化表現「こと」と「の」、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」、理由を提示する表現「から」と「ので」の 3 つの類似表現のペアを取り上げ、選択のプリファレンスの違いについて調査し、分析を行った。

3.1 では名詞化表現「こと」と「の」の使用について分析した。総合的に分析した結果、「こと」のみが使用可能な場合と、「の」のみ使用可能な場合において、中国語を母語とする学習者が上級・超級レベルになっても、誤用が残ることが分かった。さらに、「こと」と「の」両方が使用できる場合、日本語母語話者の選択には偏った選択傾向は見られなかったが、中国語母語話者は「の」より「こと」をより多く使用する傾向があることが分かった。そして、日本語母語話者と中国語母語話者は共に前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかに影響されるが、その影響は日本語母語話者と L2 学習者では異なっていた。話者ごとに分析した結果、日本語母語話者と 3 つの異なった選択をした中国語母語話者が 1 名いた。しかし、日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ中国語母語話者は見られなかった。以上のように、上級・超級中国語母語話者と日本語母語話者の「こと」と「の」の使用をグループレベル、個人レベル両方から分析した結果、両者の選択傾向には違いが見られることが分かった。

3.2 では丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」の使用について分析した。総合的に分析した結果、日本語母語話者は明らかな選択傾向を示さなかったが、中国

語母語話者は「ないです」への指向性を示した。そして、日本語母語話者と中国語母語話者は共に話し相手が目上かどうかに影響されるが、その影響はそれぞれ異なっていた。話者ごとに分析した結果、話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」の場合両方、日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ中国語母語話者はいなかった。以上のように、中国語母語話者全体と個人レベルの両面からの分析結果からは、「ないです」と「ません」の使用において、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の場合、上級・超級学習者のレベルになっても日本語母語話者のような、選択傾向は見られなかった。

3.3 では理由を提示する表現「から」と「ので」の使用について分析した。総合的に分析した結果、日本語母語話者は「ので」への強い選択傾向を示していたが、中国語母語話者は日本語母語話者より「から」を多く選択するものの、明らかな選択傾向を示さなかった。そして、日本語母語話者と中国語母語話者は共に話し相手が目上かどうかに影響されるが、その影響はそれぞれ異なっていた。話者ごとに分析した結果、話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」の場合両方で、日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ中国語母語話者はいなかった。以上のように、中国語母語話者の全体と個人レベルの両面からの分析結果では、「から」と「ので」の使用において、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の場合、上級・超級学習者のレベルになっても、日本語母語話者の文法とは異なることが分かった。

以上のように、本章では名詞化表現「こと」と「の」、丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」、理由を提示する表現「から」と「ので」の三つの類似表現のペアを例として分析を行った。その結果、類似表現の選択に関して、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の場合、上級・超級のレベルになっても、母語話者とは異なる選択傾向を持っており、日本語母語話者の間には誤用としては表出しない違いが残っていることが示された。

本章では類義表現の選択傾向の研究をまとめたが、範（2019）と範（2024）では調

査を行った時期も異なり、使用したテスト方式が異なる。類似表現の選択傾向をより詳細に調査するためには、範（2024）で使用したような調査、またはそれぞれの表現を使用した文を呈示し、許容するかどうかを調査するという方式で、統一した方式の調査を行う必要がある。

第4章 長音の母音長の変化

第3章では中国語を母語とする日本語 L2 学習者と日本語母語話者の類似表現の選択を比較し、誤用としては表面化しない、選択のプリファレンスの違いが見られることを示した。本章では、音声的な側面から学習者の文法を日本語母語話者のものと比較する。たとえば、音の代用（/d/ を /n/ に代用する）や促音の脱落（[katta] をに [kata] 発話する）といった音韻的なエラーではなく、通常のコミュニケーション上、問題はないものの、わずかに訛りとして残るような微細な違いについて検討する。本章で扱うのは、日本語母語話者にみられる長音の短音化現象である。日本語母語話者は特定の音韻環境において、長母音をやや短く発音することが報告されている（助川・前川 1997）。このような長音をやや短く発音する現象は中国語を母語とする上級・超級学習者にも見られるのであろうか。本章では、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語 L2 学習者との間には、長音の長さにどのような違いが存在するのかを調査する。学習レベルが高くなり、上級・超級のレベルになっても、日本語母語話者との間にわずかな音声的な差異が存在するのかについて分析を行う。まず、4.1 では日本語 L2 学習者の長音発話の L2 習得研究について、小熊（2001）の研究を概観する。

4.1 日本語 L2 学習者による長音発話：小熊（2001）

小熊（2001）は単語内での位置が長音発話にどのように影響するのかについて、日本語を L2 として学ぶ 学習者を対象とし、その発話特徴を調査した。学習者は英語を母語とする、オーストラリア（14名）、アメリカ（6名）、イギリス（5名）、カナダ（5名）の出身者であった。学習者のうち、日本語学習歴が 50 時間以下、かつ日本での滞在期間が 8 ヶ月以内の 10 名を初級、日本語能力試験 3 級合格程度の 10 名を中級、日

本語能力試験 2 級合格以上の 10 名を上級としてレベル分けした。そして、長音を含む単語を学習者に読ませて、録音をした。録音で使用する単語は長音を「語頭」（「のーむ」、「きょーいく」）、「語中」（「きょーな」）、「語末」（「じくー」、「かいせー」）に含む語であった。そして、母語話者である 7 名の日本語教師に録音した音声を聴覚判断させ、誤用であるかどうかの評定をした。

以下の表 18 は、小熊（2001）による学習者の長音の位置ごとの平均誤用率を比較した表を、筆者がまとめ直したものである。なお、小熊（2001）の調査では、誤用のうち長音を短音化したものが 36 個、促音化したものが 2 個であったことが報告されている。

表 18. 長音の位置ごとの平均誤用率

長音位置	日本語能力レベル			学習者全員
	初級	中級	上級	
語頭	5%	15%	5%	8%
語中	23%	17%	13%	18%
語末	20%	13%	7%	13%
合計	18%	15%	9%	14%

表 18 に見られるように、全 30 名の学習者の平均結果を見ると、長音位置が「語中」の場合、誤用率は 18%が最も高く、続いて「語末」の 13%、「語頭」の 8%であった。

この結果から、小熊（2001）は英語母語話者の長音発話に関して、長音位置が「語中」の場合が難しく、その次が「語末」で、「語頭」の難易度はもっとも低いと結論付けた。

このように、L2 学習者にとって、長音の習得は難しく、その長さが十分に保たれていない場合も多く見られる。しかし、この長音の長さが十分ではない現象は L2 学習者の誤用によるものとは限らず、日本語母語話者の発話に影響されている可能性がある。

理由としては、日本語母語話者の発話においても長音の長さが短い場合が存在する。

以下の 4.2 では、日本語母語話者による長音の短音化現象について説明する。

4.2 長音の短音化現象

日本語は母音の長短により語彙の意味が変化する言語である。「おばさん」と「おばあさん」、「ここ」と「高校（こうこう）」のように、短音が長音に変わることで、語の意味が変わる。日本語の長音は短音のほぼ 2 倍の長さを持っているという。助川・前川（1997）の調査では、長音の長さは短音の 2 倍であるという結論を検証した。「ポポ」、「ポーポ」などの短音のみの語と、長音を含む語の発話を録音し、長さの比較を行った。

以下の表 19 は、助川・前川（1997）による「ポポ」と「ポーポ」の計測結果の比較した表を筆者がまとめ直したものである。V1 は第 1 母音の長さ、V2 は第 2 母音の長さである（単位: msec）。

表 19. 「ポポ」と「ポーポ」の計測結果（助川・前川 1997: 12）

	ポポ		ポーポ	
	V1	V2	V1	V2
話者1	52	58	112	68
話者2	57	58	108	63
話者3	48	63	119	57
話者4	47	65	120	65

表 19 に見られるように、「ポポ」の第 1 母音と第 2 母音は共に短音の「ポ」である。一方、「ポーポ」の第 1 母音は長音の「ポー」、第 2 母音は短音の「ポ」である。表 15 に示しているように、短音である「ポポ」の V2 と「ポーポ」の V2 には大きな差が見

られなかった。これに対して、長音である「ポーポ」の V1 は、短音である「ポポ」の V1 のほぼ 2 倍の長さであった。このように、日本語の長音は短音のほぼ 2 倍の長さを持っていることが示された。

しかし、日本語母語話者の自然会話において、「風景（フウケイ）」を「フウケ」とするように、実際の発話では長音の短音化も頻繁に見られる（助川・前川 1997）。つまり、日本語母語話者の発話では、長音であっても、発話スタイルや音環境によって長音が短縮される傾向が見られるという。

筆者は日本語母語話者の長音の長さを追調査するため、I-JAS の音声データから 1 名の日本語母語話者の 3 モーラ語、「空気」の発話を抽出し、音節ごとの長さを計測した。

「空気」は「クウ」という長音を含む 2 モーラの第 1 音節と、「キ」という単音を含む 1 モーラの第 2 音節から成る語である。この第 1 音節と第 2 音節の長さを比較することにより、単音と長音の長さの割合を計測した。以下の図 17 は、3 モーラ語「空気（クウキ）」の 2 モーラから成る第 1 音節と、1 モーラの第 2 音節の長さの割合を比較したものである。S1 は第 1 音節、S2 は第 2 音節である。図の上は長音を含む 2 モーラ音節の長さが単音の 1 モーラ音節の 2 倍の長さであった場合の理論的な長さの割合を表しており、下は実際の計測による長さの割合を表したものである。

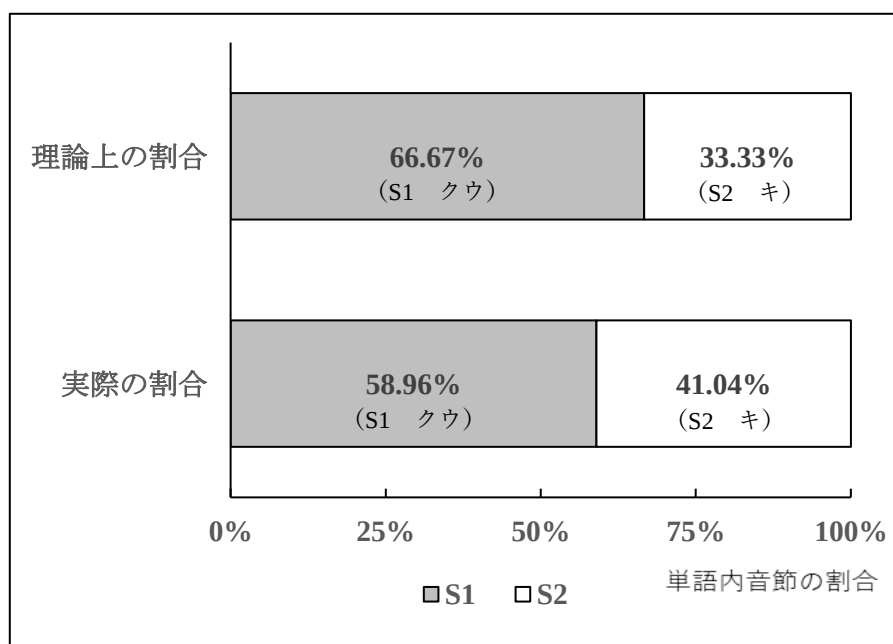


図 17. 理論上と実際の「空気」の割合

図 17 に見られるように、3 モーラ語「クウキ」では、「クウ」の S1 が長音を含む 2 モーラの音節であり、もし単音と長音が 1 : 2 の長さの割合なのであれば、単語長のうちの 66.66% を占めることになる。実際の計測では、単語「空気（クウキ）」の持続時間は 471.1 ms であり、「クウ」の持続時間は 277.8 ms であった（I-JAS、ID : JJJ11）。そのため、長音「クウ」の実際の単語内での割合は 58.96% であった。これは理論上割合の 66.66% より短く、助川・前川（1997）で述べられていた日本語母語話者に起こる「くずれた」発音、長音の短音化現象が起こった結果である。

では、日本語母語話者による長音の短音化現象はどのような環境で起こるのであるうか。助川・前川（1997）は単語内長音の位置と発話スタイルが長音の短音化にどのように影響するのかについて分析を行った。約 19 分間のインタビュー形式で行われた録音資料を自然発話として分析し、聴覚的に短音化が起こっているかどうかを判断した。彼らの分析によれば、自然な会話の記録では、364 語の長音を含む単語のうち、118 語（31.4%）にて短音化が起こった。さらに、単語内の位置が影響するのかを分析

するため、長音の語中位置（「語頭」・「語中/語末」）による短音化の生起状況を分析した。

以下の表 20 は助川・前川（1997）による長音の語中位置別での短音化の生起数と生起率を比較した表を筆者がまとめ直したものである。

表 20. 長音の語中位置別による短音化の生起数と生起率（助川・前川 1997: 11）

位置	語頭	語中/語末
生起数	7例	108例
語数	178語	239語
生起率	0.4%	45.2%

表 20 に見られるように、「語頭」で短音化が起きたケースは 0.4%のみであった一方、長音位置が「語中/語末」の場合では、45.2%に短音化が見られた。この結果から、助川・前川（1997）は長音位置が「語頭」の場合で短音化がほぼ起こらず、「語中/語末」の場合で起きやすいと指摘している。

前述した小熊（2001）と助川・前川（1997）の研究は、それぞれ英語を母語とする日本語 L2 学習者と日本語母語話者を対象とした長音の発話を調査したものであった。小熊（2001）では L2 学習者にとって、長音の習得は難しく、その産出は位置が「語頭」＜「語末」＜「語中」の順番で難しくなり、長さが十分に保たれていない場合も多く見られると指摘している。しかし、長音の長さが短くなる現象は、L2 学習者だけではなく、日本語母語話者の発話にも見られる。助川・前川（1997）では、母語話者は長音位置が「語中/語末」の場合で短音化が起きやすく、「語頭」の場合ではほぼ起こらないと指摘している。このように、母音の長短が対立的でない言語を母語とする L2 学習者にとって、長音と短音を発音し分けるのは容易ではない上、日本語母語話者の長音を短音化する現象に影響され、長音の発話がさらに難しくなる。しかし、この長音を

短音化する現象は間違いではなく、多くの日本語母語話者に存在するただ少しの音の崩れである。つまり、長音を短音化する現象は日本語母語話者の長音発話の特徴である。

では、日本語母語話者にみられる長音の短音化現象は L2 学習者の長音発話にも見られるのであろうか。中国語を母語とする日本語学習者が上級・超級のレベルになると、日本語母語話者と同じような発話特徴を持つのか、それとも異なる発話になるのであろうか。本章では、日常会話では気づきにくい長音の長さの変化を対象に調査を行った。範（2021）では日本語母語話者と中国語を母語とする上級・超級学習者がそれぞれどのように長音の発話をしているのかを調査した。以下の 4.3 では範（2021）による研究を概観する。

4.3 範（2021）による L2 学習者の長音発話の分析

範（2021）では日本語母語話者と中国語を母語とする上級・超級学習者の長音発話を調査した。日本語母語話者と中国語母語話者の間で長音発話の長さに差があるのか、両方の群の長音発話時間は話速によって変化するのか、また、長音の持続時間は単語内での位置（語中、語末）に影響されるのかの三つの方面から分析を行った。

4.3.1 調査方法

調査では、I-JAS と日本語学習者会話データベースから日本語母語話者と中国語母語話者による発話を抽出し、その中から長音を含む語を計測した。両方の群の発話はいずれに対話形式であり、内容は「日本語学習の動機」、「誕生日の祝い方」、「好きだった先生」、「将来の夢」などの話題について 30 分程度の会話であった。発話の中の長音を含

む 3 モーラ語を対象とし、単語に含まれる長音の長さで単語の長さを計測した。4 モーラ以上の単語は、長音が 1 語に 2 つ含まれる場合や、長音の他に特殊拍（促音、撥音など）が含まれる場合など、さまざまな状況が含まれる上、コーパスでそれぞれの状況別に分析するにはデータ数が少ないので、本研究の対象から除外し、3 モーラ語のみについて分析した。そして、日本語母語話者 10 名と中国語を母語とする上級・超級学習者 10 名による発話を抽出した。音声データを Praat (Boersma and Weenink 2019) で読み込み、長音を含む語を切り分け、単語持続時間と長音持続時間を計測した。20 個の発話データの中から 3 モーラ語を日本語母語話者の発話から計 67 個、中国語母語話者の発話から計 68 個を抽出し、その音声についての分析を行った。対象とした学習者はすべて J-CAT の点数が 300 点以上、SPOT の点数が 80 点以上かつ学習歴が 3 年以上、または N1 を持ち、日本での滞在経験があった。本論文ではこれらの学習者を上級・超級学習者として扱った。

4.3.2 調査結果

まず、日本語母語話者と中国語母語話者の長音の長さに差があるのかを調査するため、日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間を比較した。以下の表 21 は日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間をまとめたものである。図 18 は日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間を箱ひげ図に表したものである。

表 21. 日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間

	long vowel: duration (s)	
	JN	CN
Mean	0.26	0.27
Median	0.24	0.25
S. D.	0.09	0.10

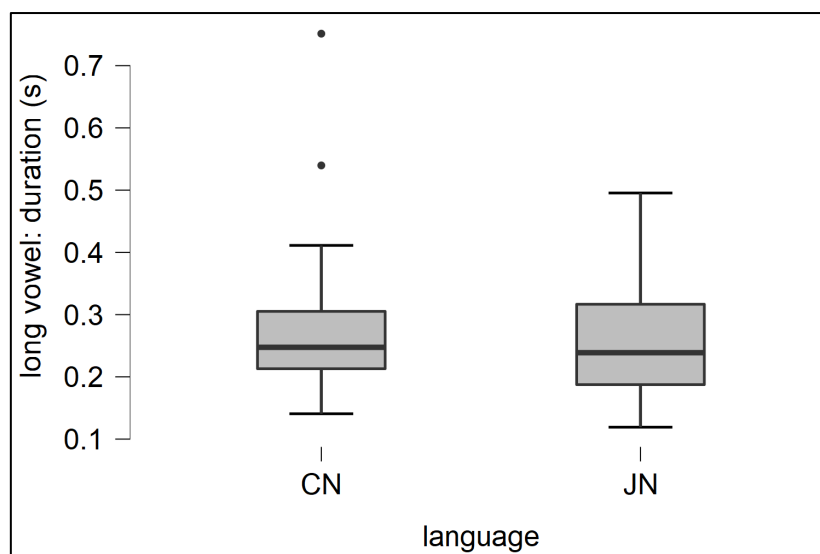


図 18. 日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間

表 21 および図 18 に見られるように、日本語母語話者の長音持続時間の平均値は 0.26s、中央値は 0.24s、標準偏差は 0.09 であった。これに対して、中国語母語話者の長音持続時間の平均値は 0.27s、中央値は 0.25s、標準偏差は 0.10 であった。日本語母語話者と中国語母語話者の長音の長さに差があるのかを調べるために t 検定を行ったところ、有意な差が認められなかった ($t = 1.108$, $df = 13.2$, $p = 0.270$)。検定の結果、日本語母語話者と中国語母語話者の 3 モーラ語長音の長さに差があるという結果は得られなかった。また、図 18 から、中国語母語話者と日本語母語話者の長音の持続時間には違いがほぼ無いことが分かった。つまり、調査対象の中国語母語話者は日本語母語話者と同程度の長さで長音を発話していたことが分かった。

そして、日本語母語話者と中国語母語話者がそれぞれ話速によって長音の長さを変化させているのかを調査するため、日本語母語話者と中国語母語話者の単語持続時間と長音持続時間の相関分析を行った。以下の図 19 と図 20 は、それぞれ日本語母語話者と中国語母語話者による発話の単語の長さと言音部分の長さの関係を散布図に表したものである。

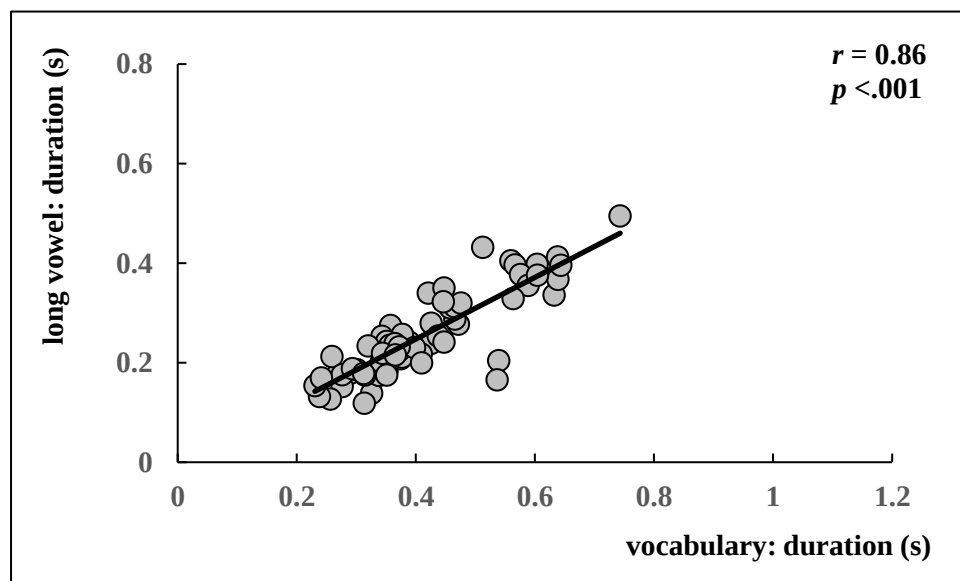


図 19. 単語持続時間と長音持続時間の散布図: 日本語母語話者

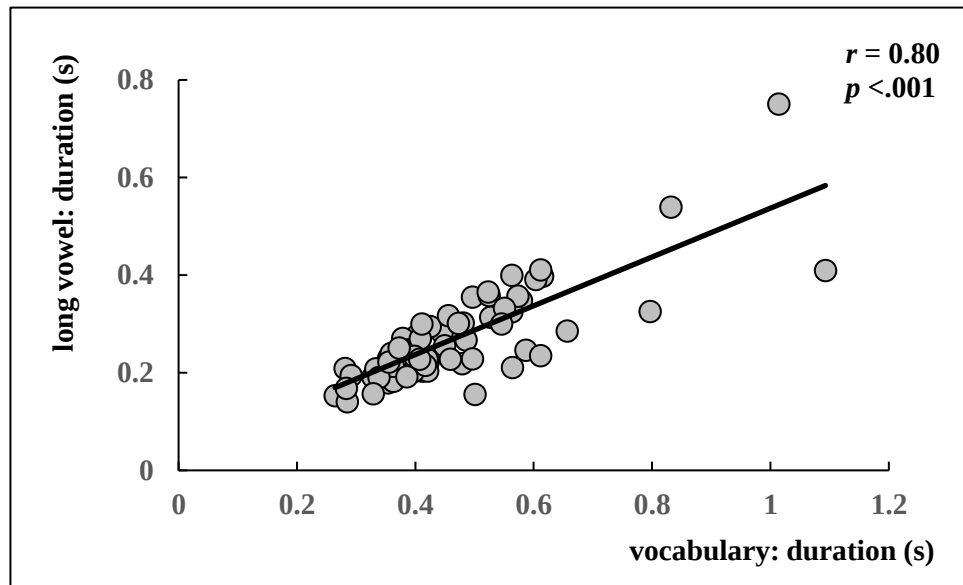


図 20. 単語持続時間と長音持続時間の散布図: 中国語母語話者

図 19 と図 20 に見られるように、日本語母語話者は単語持続時間と長音持続時間の間に強い正の相関関係が認められた ($r = 0.86, p < 0.01$)。同様に、中国語母語話者においても単語持続時間と長音持続時間の間に強い正の相関関係が認められた ($r = 0.80, p < 0.01$)。日本語母語話者と中国語母語話者の発話では共に、単語持続時間が長くなると長音持続時間も長くなることが分かった。つまり、中国語母語話者は日本語母語話者と同じく話速によって長音の長さを調節していることが示された。

さらに、日本語母語話者と中国語母語話者の長音の長さは長音の単語内での位置に影響されるのかを調査するため、日本語母語話者と中国語母語話者の長音持続時間を長音の単語内での位置ごとに比較した。以下の表 22 は日本語母語話者の発話の位置ごとの長音の持続時間をまとめたものであり、図 21 は日本語母語話者の位置ごとの長音の持続時間を箱ひげ図に表したものである。(たとえば、単語「空気 (くうき)」の場合、長音の単語内での位置は語頭 (BEG) である。これに対して、単語「理由 (りゆう)」の場合、長音の単語内での位置は語末 (FIN) である)。

表 22. 位置ごとの長音持続時間: 日本語母語話者

long vowel: position (s)		
	BEG	FIN
Mean	0.23	0.28
Median	0.22	0.25
S. D.	0.07	0.09

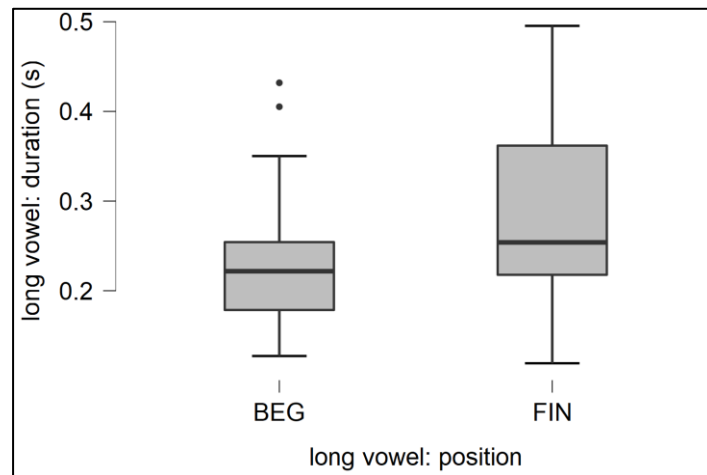


図 21. 位置ごとの長音持続時間を比較した箱ひげ図: 日本語母語話者

表 22 および図 21 に見られるように、日本語母語話者は長音の単語内での位置が「語頭」の場合、平均値は 0.23s、中央値は 0.22s、標準偏差は 0.07 であった。これに対して、長音の単語内での位置が「語末」の場合、平均値は 0.28s、中央値は 0.25s、標準偏差は 0.09 であった。日本語母語話者の「語頭」と「語末」の長音の長さに差があるのかを調べるために t 検定を実施したところ、有意な差が認められた ($t = 2.617$, $df = 30$, $p = 0.014$)。すなわち、日本語母語話者の「語頭」と「語末」の長音発話に差があるという結果が得られ、「語頭」にある長音の長さは有意に短かった。つまり、日本語母語話者の場合、「語末」より「語頭」の方での長音の短音化が起きやすく、日本語母語話者の長音発話は長音の語彙中の位置により影響された。

そして、以下の表 23 は中国語母語話者の位置ごとの長音の持続時間をまとめたもの

であり、図 22 は中国語母語話者の位置ごとの長音の持続時間を箱ひげ図に表したものである。

表 23. 位置ごとの長音持続時間: 中国語母語話者

long vowel: position (s)		
	BEG	FIN
Mean	0.26	0.29
Median	0.25	0.23
S. D.	0.06	0.13

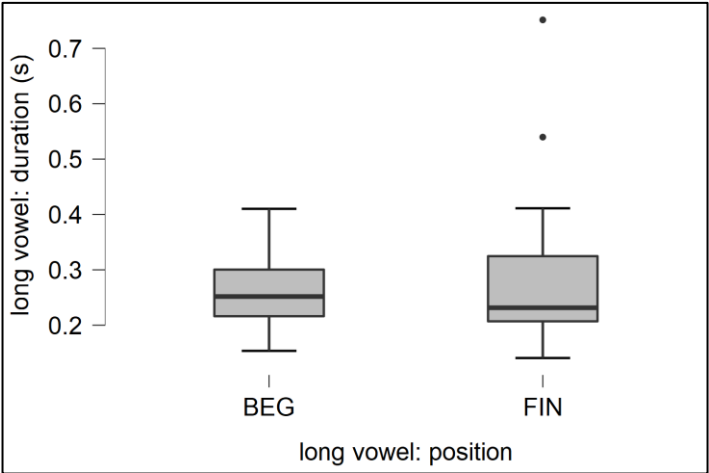


図 22. 位置ごとの長音持続時間を比較した箱ひげ図: 中国語母語話者

表 23 および図 22 に見られるように、中国語母語話者は長音の単語内での位置が「語頭」の場合、平均値は 0.26s、中央値は 0.25s、標準偏差は 0.06 であった。これに対して、長音の単語内での位置が「語末」の場合、平均値は 0.29s、中央値は 0.23s、標準偏差は 0.13 である。中国語母語話者の「語頭」と「語末」の長音発話に差があるのかを調べるために t 検定を実施したところ、有意な差は認められなかった ($t = 0.424$, $df = 25$, $p = 0.675$)。すなわち、中国語母語話者は「語頭」と「語末」での長音発話に差があるとは言えなかった。つまり、中国語母語話者の長音発話は日本語母語話者とは異なり、長音

の語彙中の位置により影響されなかった。

4.4 まとめ

本章では、日本語母語話者と上級・超級中国語母語話者の間の違いを調査するため、長音発話の短音化という音声現象の現れ方に違いが存在するのかを分析した。

総合的に分析した結果、対象とした L2 学習者の長音の長さは日本語母語話者と同程度であった。そして、中国語母語話者は日本語母語話者同様、話速によって長音の長さを調節していることが分かった。さらに、中国語母語話者にも日本語母語話者と同じような位置で短音化が見られるのかを調査し、日本語母語話者の長音発話は長音の語彙中の位置により影響される一方、中国語母語話者の長音発話では、長音の語彙中の位置による長音の長さの変化は見られなかった。

ここまでは長音の長さのポジションごとの平均値を基に分析を行った。しかし、参加者の中には、日本語母語話者と同じく、語頭において長音を短く発音する学習者も存在する可能性がある。このような学習者が存在するのかを検証するため、話者ごとに中国語母語話者の長音発話を分析した。その結果、長音の単語内での位置が「語頭」の場合、中国語母語話者の 10 人のうち、6 人の 3 モーラ語の発話において、短音化が見られた。中国語母語話者による短音化を個別に調べたところ、それぞれの話者の短音化は日本語母語話者のように、語頭に起きやすいという訳ではなく、語頭・語末両方で起こっていた。日本語母語話者の短音化現象は「語末」より「語頭」のほうにおいて起きやすい現象であるので、日本語母語話者と同様の発話傾向を持つ中国語母語話者はいなかった。

以上のように、中国語母語話者の長母音の短母音化を分析結果、長音の長さに関して、中国語母語話者は上級・超級のレベルであっても、日本語母語話者のような、長音の短

音化現象は見られなかった。このように、長音の発話において、中国語母語話者と日本語母語話者の間に違いが残っていることが明らかになった。

第5章 アクセントのデフォルトパターン

中国語を母語とする上級・超級日本語 L2 学習者と日本語母語話者との間の違いのうち、誤用としては表面化しないものに着目し、ここまで見てきたが、本章では 4 章に続き音声的側面に着目する。第 4 章は中国語を母語とする日本語 L2 学習者と日本語母語話者の長音の長さを比較し、誤用ではない、音響的な違いが見られることを示した。本章では、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語 L2 学習者との間で、アクセントのデフォルトパターンにどのような違いが存在するのかを調査する。まず、5.1 では日本語のアクセントパターンについて説明する。

5.1 日本語のアクセントパターン

日本語のアクセントは弁別的であり、日本語の語彙を L2 として学習する時には、その語のアクセントパターンも同時に学ぶ必要がある。たとえば、よく使われる例として「雨」と「飴」は、アメ、アメのように、ピッチアクセントの高低の違いによって意味が区別される。アクセントについて、中條（1989: 93）は以下のように述べた。

「一つ一つの語について社会的習慣として決まっている、相対的な高低または強弱の配置」を「アクセント」(accent)という。

日本語のアクセントは、語（または文節）内部に置ける高低の関係が決まっている高低アクセントで、高低の違いによって意味の区別をしたり、語（または文節）のまとまりを示す働きをする（中條 1989: 93）。

その日本語アクセントの体系をまとめたものが、以下の秋永（2009）による表 24 である。以下の表 24 は秋永（2009）による東京アクセント体系表を『NHK 日本語発音

アクセント新辞典』(2016)の新しい表記方法に基づき、筆者がまとめ直したものである。表 24 中の ○ は低い拍 (L) のことを、● は高い拍 (H) のことを表している。また、記号「\」は音の下がり目の位置を示し、下がり目がない場合 (平板型) には、記号「―」を語末につけた。

表 24. 東京アクセント体系表 (秋永 2009: 89)

アクセントの型		二拍語	三拍語	四拍語
平板式=滝無型	平板型	○● トリ― (鳥)	○●● サクラ― (桜)	○●●● ミズトリ― (水鳥)
	頭高型	●○ ウ\ミ (海)	●○○ イ\ノチ (命)	●○○○ オ\オミズ (大水)
	中高 2 型		○●○ ココ\ロ (心)	○●○○ ヤマ\ブキ (山吹)
起伏式=滝有型	中高 3 型			○●●○ ミズウ\ミ (湖)
	尾高型	○● ヤマ\ (山)	○●● オトコ\ (男)	○●●● ゴクラク\ (極楽)

表 24 に示したように、日本語のアクセントパターンには平板型、頭高型、中高型、尾高型がある。平板型では音の下がり目がない、LH、LHH、LHHH のような型である。頭高型は一拍の後で下がる、HL、HLL、HLLL というアクセントである。中高型は一拍の後で上がり、二拍/三拍の後で下がる、LHL、LHLL、LHHL というアクセントである。尾高型は一拍の後で上がり、最後の拍の後で下がる、LH、LHH、LHHH というアクセントである。

日本語の語彙を L2 として学習する時、上記のアクセントパターンは同時に学ぶ必要がある。しかし、新語を発話する場合、その語のアクセントパターンはまだ指定され

ておらず、アクセントパターンの正解は不明である。そのような新語を発話する場合には、どのようなアクセントパターンを話者は付与するのであろうか。そのような場合に付与されるアクセントは日本語母語話者と中国語を母語とする L2 学習者で異なるのであろうか。

窪菌（2006）によると、日本語母語話者は新語に関して同じようなアクセントパターンを用いるようである。窪菌（2006）は、新語・無意味語の発話には以下の外来語に見られるアクセント規則が適用される傾向にあると述べた。

標準語の名詞アクセント規則：語末から数えて三つ目のモーラを含む音節にアクセントが置かれる（窪菌 2006: 34）。

窪菌（2006）は、この規則によって生み出されるアクセントパターンは新語・無意味語にも適用され、日本語のいわばデフォルトアクセントであると述べた。

では、日本語を L2 として学ぶ学習者はどのようなアクセントを新語・無意味語に割り当てるのであろうか。もちろん、存在しない語であるため、正しいアクセントをインプットから学ぶことはできない。このような無意味語のアクセントには、話者の文法に内在化された音韻文法のデフォルトアクセントパターンが使用され则认为られる。本章では、アクセントのデフォルトパターンは中国語を母語とする上級・超級学習者の文法においても形成されているのかどうか、また、そのデフォルトパターンは日本語母語話者のものとどのように異なるのかを調査し、学習者レベルが高くなり、上級・超級のレベルの表出しないデフォルトアクセントは日本語母語話者のものとなるのかどうかを調査する。以下の 4.3 では範ら（2020）による研究を概観する。

5.2 範ら（2020）による L2 学習者のアクセントのデフォルトパターンの分析

範ら（2020）ではアクセントのデフォルトパターンについて、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語 L2 学習者の違いを調査した。日本語母語話者と中国語母語話者が内在化しているアクセントのデフォルトパターンには違いがあるのか、両方の群のアクセントパターンは単語内の特殊拍（拗音、撥音）に影響されるのかについて、分析を行った。

5.2.1 調査方法

範ら（2020）では、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語 L2 学習者を対象に無意味語の発話実験を行い、アクセントのデフォルトパターンの違いについて調査した。参加者は全員、マンダリン中国語を母語とする上級・超級学習者であった。参加者は合計 8 名で、すべて N1 に合格し、日本に 3 年以上の留学経験があった。そして、比較のため、日本語を母語とする関東出身の日本在住者 16 名をコントロールグループとした。

調査では発話実験を行った、参加者には 3 モーラ、および 4 モーラの無意味語を発話するように指示し、その発話音声を録音し、使用されたアクセントパターンを調査した。実験に使用した無意味語は合計 34 語であり、3 モーラ語・4 モーラ語それぞれに 3 つのタイプの語群を設けた。

以下の（18）は調査に使用した無意味語の種類である。

(18) 調査で使用した無意味語の種類

- ① 撥音・拗音を含まない語（無標語）
- ② 拗音を含む語（拗音語）
- ③ 撥音を含む語（撥音語）

撥音・拗音を含まない語（例: もぬた）は無標語とした。②の拗音語（例: ひゃわか、せけしゅ、にきょの）は、捨て仮名（「ゃ、ゅ、ょ」など小書きで表記される仮名）がアクセントパターンに影響するかどうかを調査するために設定したものである。そして、③の撥音語は、特殊拍である撥音とその語内での位置がアクセントパターンに影響するのかを調査するために設定したものである。

以下の表 25 は刺激語タイプごとの語数と例を示したものである。太字と下線になっているのは調査項目の拗音と撥音である。また、それぞれのタイプ別の無意味語リストは付録 4 に掲載した。

表 25. 無意味語タイプと例

	モーラ数	対象の位置	例	語数
無標語	3モーラ	—	もぬた	5語
	4モーラ	—	けじそな	5語
拗音語	3モーラ	1番目	<u>ひ</u> やわか	2語
		2番目	に <u>き</u> よの	2語
		3番目	せけ <u>し</u> ゆ	2語
	4モーラ	1番目	<u>り</u> よわさも	2語
		2番目	お <u>み</u> やとま	2語
		3番目	ふも <u>し</u> ゆひ	2語
		4番目	こにひ <u>き</u> よ	2語
撥音語	3モーラ	2番目	け <u>ん</u> う	2語
		3番目	そと <u>ん</u>	2語
	4モーラ	2番目	ま <u>ん</u> すに	2語
		3番目	くむ <u>ん</u> て	2語
		4番目	ちけ <u>き</u> ん	2語

表 2 が示すように、無標語 10 語、撥音語 10 語、拗音語 14 語の合計 34 語を刺激語とし、これら 34 語をキャリア文「○○がある」に埋め込んで刺激文を作成した。次に、作成した文をランダムに並べ替え、Microsoft PowerPoint のスライド 1 枚に 5 文ずつ並び、発話リストを作成した。調査では PC の画面上に発話リストを呈示し、各参加者が、PowerPoint で表示した文を順番に発話し、その音声を収録した。参加者は、それぞれの文を 3 回ずつ発話し、調査の所要時間は 10 分程度であった。

窪菌（2006）による外来語アクセント規則に従えば、3 モーラ語では 3 種類全ての語群で 1 モーラ目にアクセントが置かれ、4 モーラの無標語、拗音語では後ろから 3 モーラ目、つまり 2 モーラ目にアクセントが置かれることが予想される。一方、4 モーラの撥音語のうち、2 モーラ目に撥音がある語では、特殊拍である撥音の 1 つ前の 1 モーラ目にアクセントが置かれ、それ以外の 4 モーラ撥音語では、2 モーラ目にアクセントが置かれることが予想された。

5.2.2 調査結果

以下に示す表 26 と表 27 は、日本語母語話者と中国語母語話者が無標語発話で使
 したアクセントパターンをまとめたものであり、図 23 は表 26 と表 27 のデータをもと
 に、日本語母語話者と中国語母語話者の3モーラの無標語でのアクセントパターンの使
 用割合をグラフに表したものである。図 24 は表 26 と表 27 のデータをもとに、日本語
 母語話者と中国語母語話者の4モーラの無標語でのアクセントパターンの使用割合をグ
 ラフに表したものである。表およびグラフでは、アクセントの位置を数字で表した。
 「0」は語中にアクセント核のない平板型（無アクセント）を、「1」は語頭から1番目
 のモーラにアクセントがある頭高型を表す。「2」は語頭から2モーラ目にあるアクセ
 ントがある中高型を表す。そして、「3」は3モーラ目にアクセントがあることを示し、4
 モーラ語の場合には中高型であり、3モーラ語の場合は尾高型であることを表す。4モ
 ーラ語にのみ現れる「4」は4モーラ目にアクセントがある尾高型を示す。

表 26. 無標語発話におけるアクセントパターンの使用割合：日本語母語話者

モーラ数	アクセントパターン				
	0	1	2	3	4
3	28.75%	68.75%	2.50%	0.00%	
4	96.25%	1.25%	0.00%	2.50%	0.00%

表 27. 無標語発話におけるアクセントパターンの使用割合：中国語母語話者

モーラ数	アクセントパターン				
	0	1	2	3	4
3	75.00%	5.00%	0.00%	20.00%	
4	65.00%	0.00%	0.00%	20.00%	15.00%

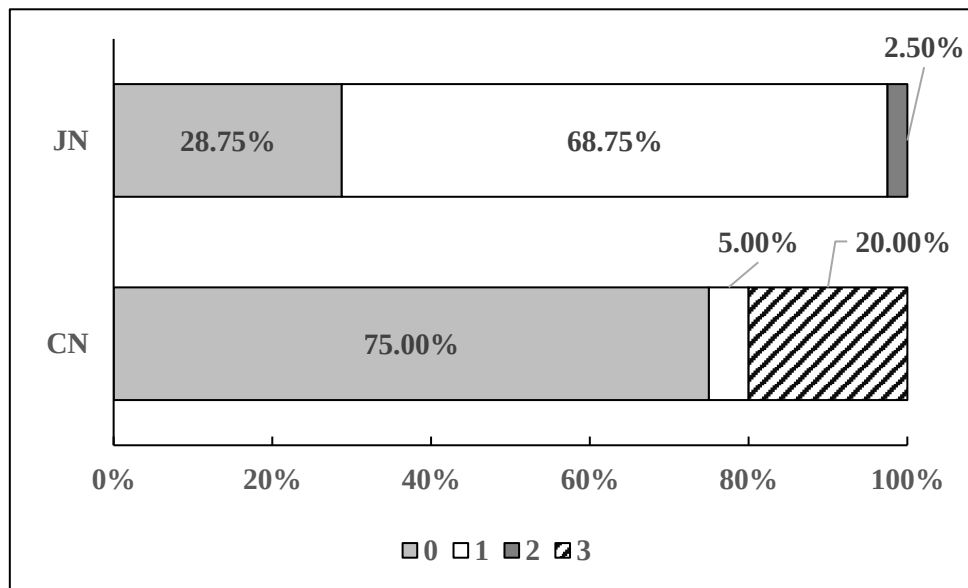


図 23. 日本語母語話者と中国語母語話者による無標語の発話のアクセントパターンの割合：3 モーラ語

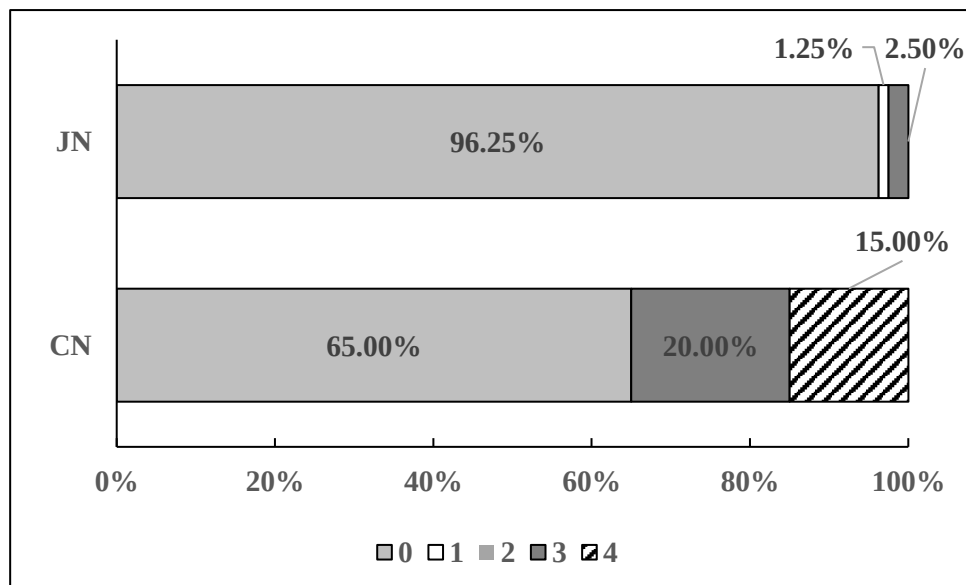


図 24. 日本語母語話者と中国語母語話者による無標語の発話のアクセントパターンの割合：4 モーラ語

表 26、表 27 および図 23、図 24 に示すように、無標語発話のアクセントを調査したところ、中国語母語話者の発話では、3 モーラ語、4 モーラ語共に、平板型（0型）

による発話が多かった。一方、日本語母語話者の発話では、3 モーラ語では頭高型（1 型）の使用が多く、4 モーラ語においては平板型が多かった。このように、日本語母語話者の3 モーラ無標語のアクセントパターンは、外来語にみられるアクセントパターンと同様であり、窪藁（2006）で述べたように、いわば日本語のアクセントのデフォルトパターンが表れている。また、4 モーラ語においては同様の傾向は見られず、平板型が多く見られた。一方、中国語母語話者の発話では、3 モーラ語・4 モーラ語両方で平板型アクセントの使用が多く、3モーラ語において日本語母語話者の適用するアクセントのデフォルトパターンとは異なっていた。

また、日本語母語話者と中国語母語話者のアクセントのデフォルトパターンが拗音とその位置に影響されるのかを調査するため、日本語母語話者と中国語母語話者の拗音語発話を拗音の単語内での位置ごとに分析した。以下に示す表 28 と表 29 は、日本語母語話者と中国語母語話者が拗音語発話で使ったアクセントパターンをまとめたものであり、図 25 は表 28 と表 29 のデータをもとに、日本語母語話者と中国語母語話者の3モーラの拗音語でのアクセントパターンの使用割合をグラフに表したものであり、図 26 は表 28 と表 29 のデータをもとに、日本語母語話者と中国語母語話者の 4 モーラの拗音語でのアクセントパターンの使用割合をグラフで表したものである。図の中の「1/3」のような表示は、対象となる拗音の語中の位置を表す。たとえば、「1/3」は3モーラ語の 1 モーラ目に拗音が位置することを表し、「2/3」は 3 モーラ語の 2 モーラ目に拗音が位置することを表している。

表 28. 拗音語発話におけるアクセントバターの使用割合：日本語母語話者

モーラ数	拗音の位置	アクセントパターン				
		0	1	2	3	4
3	1	34.38%	65.63%	0.00%	0.00%	
	2	21.88%	78.13%	0.00%	0.00%	
	3	28.13%	68.75%	3.13%	0.00%	
4	1	90.63%	6.25%	3.13%	0.00%	0.00%
	2	100.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	3	68.75%	0.00%	28.13%	3.13%	0.00%
	4	53.13%	0.00%	34.38%	12.50%	0.00%

表 29. 拗音語発話におけるアクセントバターの使用割合：中国語母語話者

モーラ数	拗音の位置	アクセントパターン				
		0	1	2	3	4
3	1	75.00%	0.00%	6.25%	18.75%	
	2	81.25%	0.00%	6.25%	12.50%	
	3	75.00%	0.00%	6.25%	18.75%	
4	1	68.75%	6.25%	6.25%	12.50%	6.25%
	2	68.75%	0.00%	6.25%	25.00%	0.00%
	3	78.57%	0.00%	0.00%	21.43%	0.00%
	4	56.25%	0.00%	0.00%	37.50%	6.25%

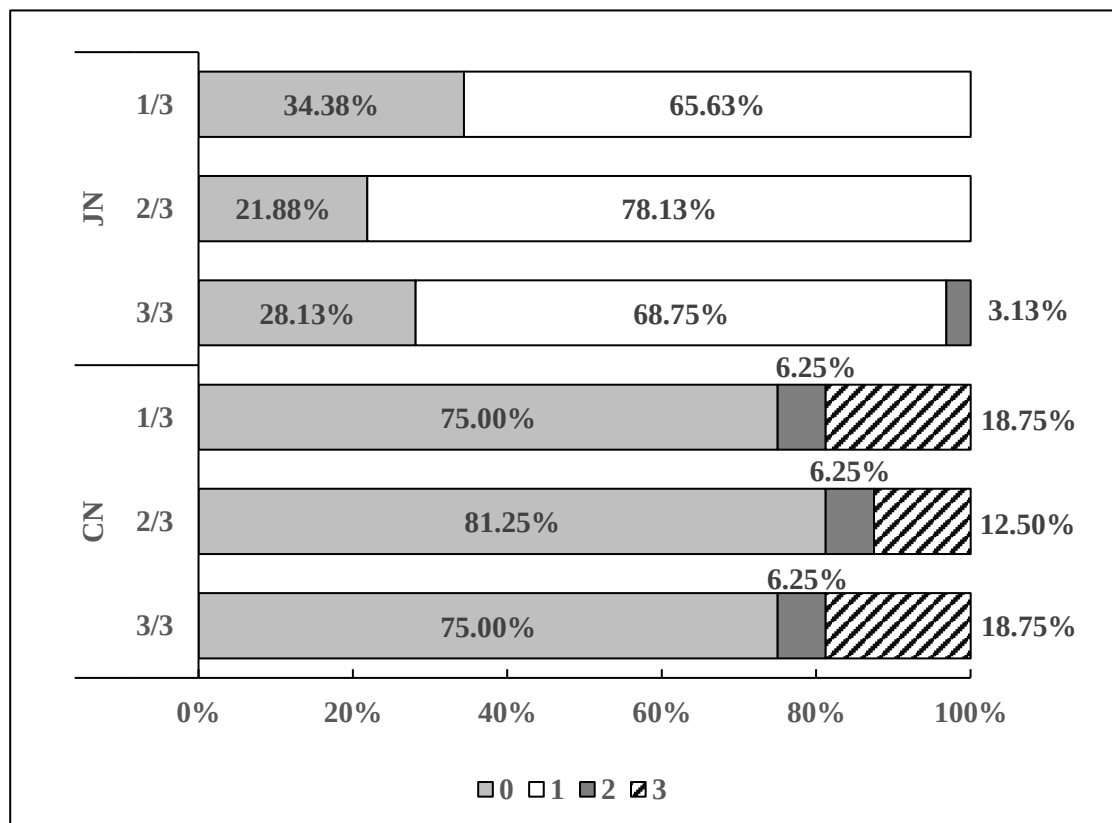


図 25. 日本語母語話者と中国語母語話者による拗音語の発話のアクセントパターンの割合：3 モーラ語

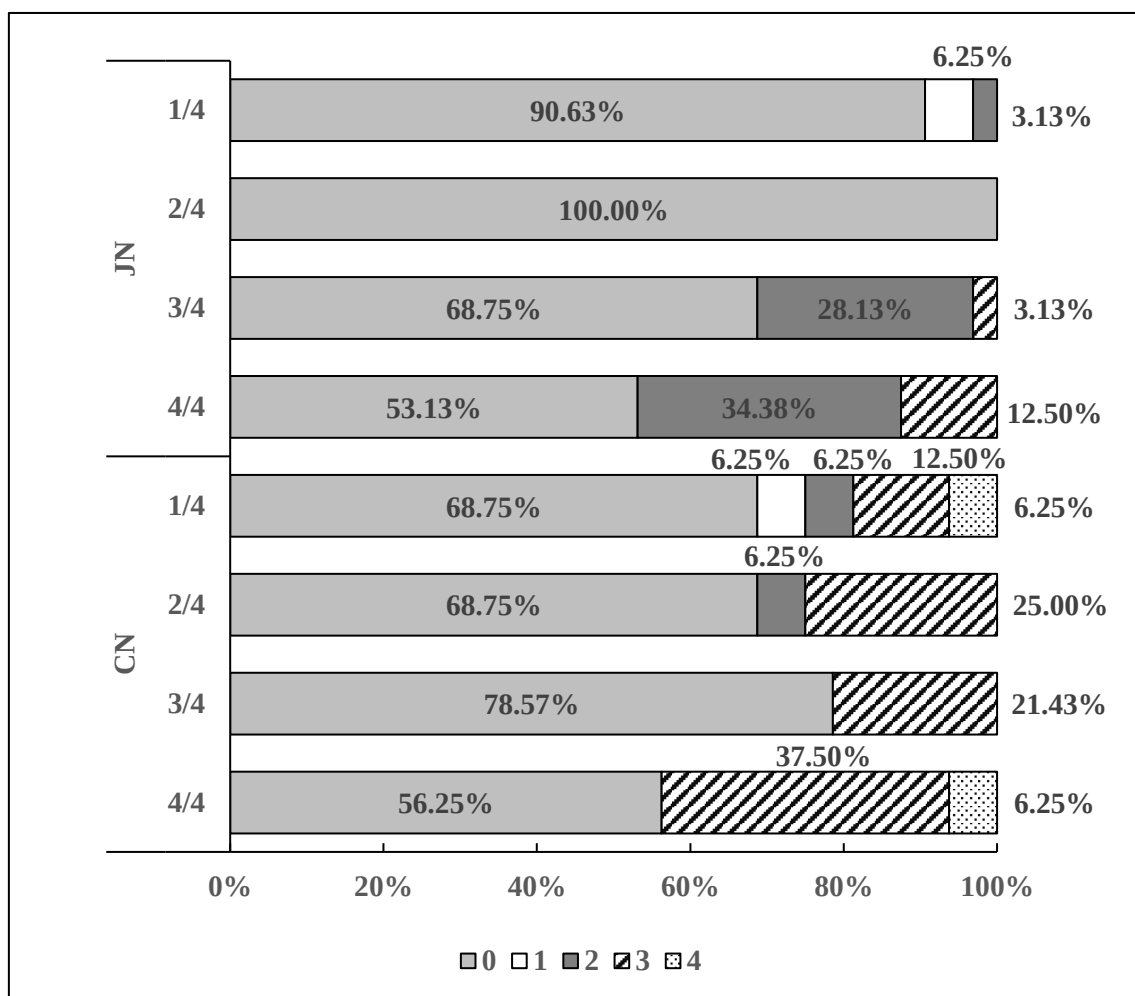


図 26. 日本語母語話者と中国語母語話者による拗音語の発話のアクセントパターンの割合：4 モーラ語

表 28、表 29 および図 25、図 26 に示すように、日本語母語話者は 3 モーラ語発話では 1 型の頭高型を（図 25 上）、4 モーラ語は 0 型の平板型を多く使用していた（図 26 上）。一方、中国語母語話者の発話では、3 モーラ語と 4 モーラ語のどちらにおいても平板型が多かった。拗音語に見られたパターンは無標語でのパターンとほぼ同様であった。

さらに、日本語母語話者と中国語母語話者のアクセントのデフォルトパターンが撥音とその位置に影響されるのかを調査するため、日本語母語話者と中国語母語話者の撥音語発話を撥音の単語内での位置ごとに分析した。以下に示す表 30 と表 31 は、日

本語母語話者と中国語母語話者が撥音語発話で使⽤したアクセントパターンをまとめたものであり、図 27 は表 30 と表 31 のデータをもとに、日本語母語話者と中国語母語話者の3モーラの撥音語でのアクセントパターンの使⽤割合をグラフに表したものである。図 28 は表 30 と表 31 のデータをもとに、日本語母語話者と中国語母語話者の 4 モーラの撥音語でのアクセントパターンの使⽤割合をグラフに表したものである。図の中の「2/3」のような表⽰は対象となる撥音の語中の位置を表す。たとえば「2/3」は3モーラ語の 2 モーラ目に撥音が位置することを表し、「3/3」は 3 モーラ語の 3 モーラ目に撥音が位置することを表している。

表 30. 撥音語発話におけるアクセントパターンの使⽤割合：日本語母語話者

モーラ数	撥音の位置	アクセントパターン				
		0	1	2	3	4
3	2	15.63%	84.38%	0.00%	0.00%	
	3	21.88%	71.88%	6.25%	0.00%	
4	2	90.63%	9.38%	0.00%	0.00%	0.00%
	3	6.25%	0.00%	93.75%	0.00%	0.00%
	4	62.50%	18.75%	18.75%	0.00%	0.00%

表 31. 撥音語発話におけるアクセントパターンの使用割合：中国語母語話者

モーラ数	撥音の位置	アクセントパターン				
		0	1	2	3	4
3	2	43.75%	43.75%	6.25%	6.25%	
	3	62.50%	18.75%	12.50%	6.25%	
4	2	75.00%	12.50%	0.00%	0.00%	12.50%
	3	50.00%	0.00%	25.00%	6.25%	18.75%
	4	50.00%	0.00%	37.50%	0.00%	12.50%

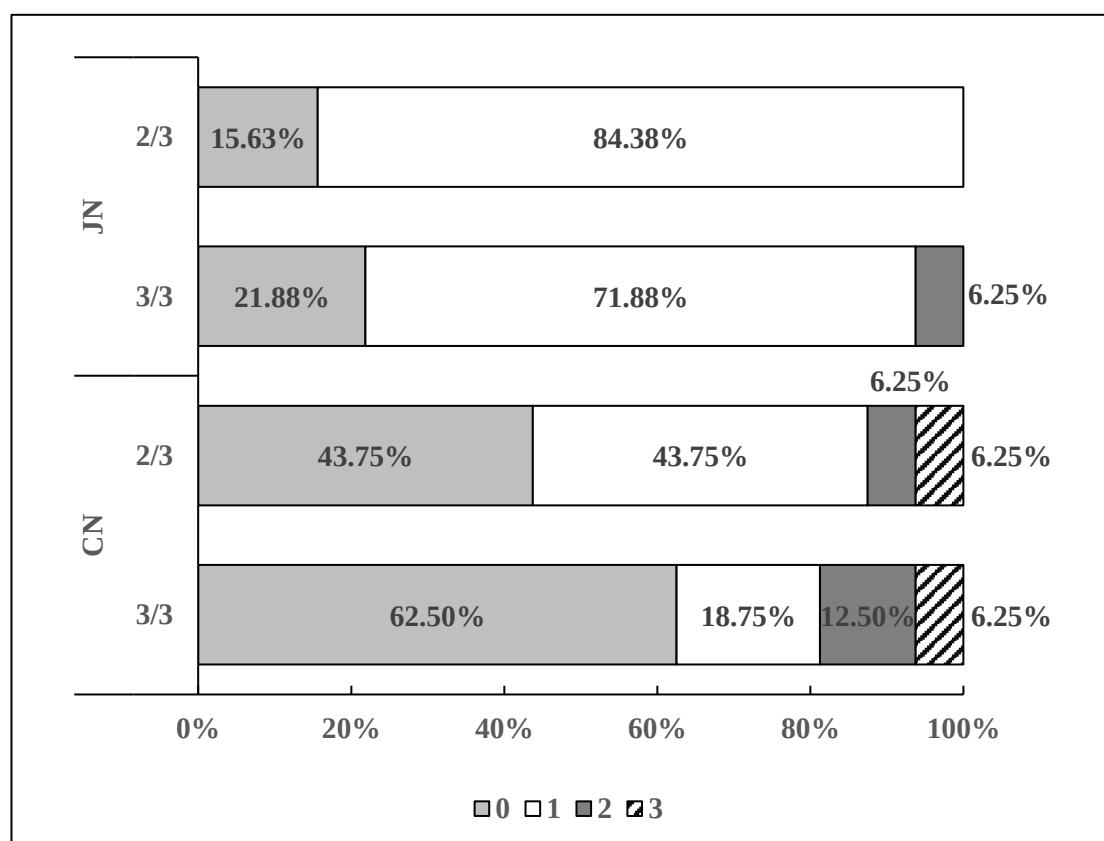


図 27. 日本語母語話者と中国語母語話者による撥音語の発話のアクセントパターンの割合：3 モーラ語

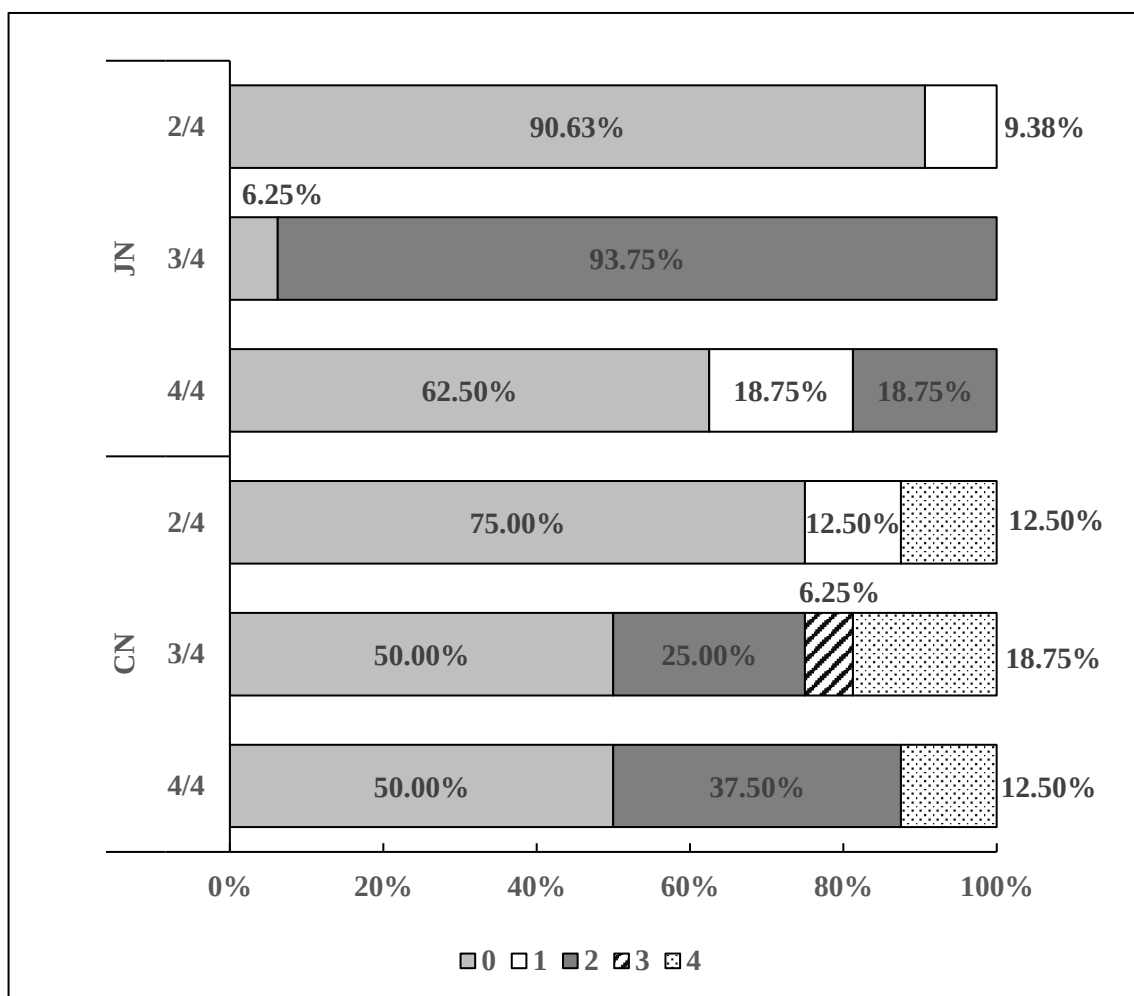


図 28. 日本語母語話者と中国語母語話者による撥音語の発話のアクセントパターンの割合：4 モーラ語

表 30 と表 31 および図 27、図 28 に示すように、3 モーラの撥音語の発話では、日本語母語話者は頭高型が多かった。中国語母語話者は撥音位置が 2 モーラ目の場合において、平板型と頭高型の使用が同じ程度見られるものの、日本語母語話者はほぼ頭高型で発話していた。また、撥音位置が 3 モーラ目の発話では、中国語母語話者は平板型が多かった。この結果から、日本語母語話者と中国語母語話者のアクセントのデフォルトパターンの使用傾向は異なることが考えられる。そして、4 モーラの撥音語の発話では、日本語母語話者は撥音位置が 2 モーラ目または 4 番目の場合において、平板型を多く使用しているものの、撥音位置が 3 モーラ目の場合では、外来語アクセン

ト規則に沿った中高型のアクセントがほとんどであった。これに対して、中国語母語話者の 4 モーラ語発話では総合的に平板型が最も多く、日本語母語話者に見られたパターンとは異なった。

5.2.3 考察

無意味語発話において、日本語母語話者は 3 モーラ語では外来語アクセント規則に従い、頭高型のアクセントを用いることがほとんどであった。また、4 モーラ語では撥音位置が 3 モーラ目の撥音語を除き、広く平板型が使用されていた。

一方、中国語母語話者の場合には 4 モーラ語に限らず、3 モーラ語においても平板型アクセントが広く使用された。無標語、拗音語では総合的に平板型アクセントが多く、3 モーラ語においても平板型アクセントを使用していた点で日本語母語話者と異なった。しかし、撥音を含む語においては、平板型の使用が日本語母語話者に比べると多いものの、3 モーラ語での頭高型（1 型）、4 モーラ語での中高型（2 型）の使用が増えていた。中国語母語話者に平板型アクセントの使用が多いのは、日本語の 3 モーラ名詞に平板型が多いため、平板化規則を一般化したことによる可能性がある。日本語母語話者の 3 モーラ無意味語発話や、撥音位置が 3 モーラ目の 4 モーラ撥音語では、平板化は抑制されている。中国語母語話者の多くでは平板化の過剰一般化が起こり、広く平板型アクセントが適用されることが分かった。

また、中国語母語話者の発話には日本語母語話者が選択しないアクセントパターンも見られた。日本語母語話者の発話はいずれの語タイプにおいても尾高型を選択しなかったが、中国語母語話者の発話には日本語母語話者には見られない尾高型の使用も見られた。

以上は中国語母語話者のアクセントのデフォルトパターンを分析した結果である。

しかし、参加者の中には日本語母語話者と同様のアクセントのデフォルトパターンを内在化している超級学習者が存在する可能性があるため、このような学習者の有無を検証するために、話者ごとのアクセントパターンを分析した。その結果、3 モーラ語、4 モーラ語両方で、日本語母語話者と同じアクセントのデフォルトパターンを示した学習者は見られなかった。3 モーラ語での頭高型アクセントの使用は 2 人の参加者で何例も見られ、また別の 1 名の参加者で 4 モーラ語の日本語母語話者と類似したパターンの回答が見られた。しかし、3 モーラ語、4 モーラ語両方で日本語母語話者のデフォルトパターンを示した参加者はいなかった。

5.3 まとめ

本章では、日本語母語話者と中国語を母語とする上級・超級学習者の間の違いを調査するため、無意味語の発話実験を行い、通常の言語使用では表面化しないアクセントのデフォルトパターンに違いがあるかどうかを調査した。

調査の結果、日本語母語話者は 3 モーラ語では外来語アクセント規則に従った頭高型アクセントを、撥音位置が 3 モーラ目の撥音語では中高型アクセントを使用した。それ以外の 4 モーラ語では平板型を使用した。一方、中国語母語話者は 3 モーラ、4 モーラ語の全ての語タイプで平板型を広く使用したことが分かった。

話者ごとに分析した結果、3 モーラ語、4 モーラ語の両方で日本語母語話者と同じデフォルトパターンを示した中国語母語話者はいなかった。

以上のように、中国語を母語とする上級・超級学習者の文法において、アクセントのデフォルトパターンが形成されていたことが分かった。しかし、中国語母語話者は上級・超級学習者のレベルになっても、日本語母語話者との間にアクセントのデフォルトパターンに違いが存在することが分かった。このように、無意味の新語のアクセントパ

ターンに関して、中国語母語話者と日本語母語話者の間に違いが残っていることが明らかになった。

第6章 総合的な考察

本論文では、プリファレンスの違い、発話の音響的な差異、通常の言語使用では表面化しづらい内在化された文法といった 3 つの側面から、中国語を母語とする学習者の日本語 L2 習得に焦点を当て、母語話者と上級・超級学習者の間に残る違いについて、探究した。本章では、本研究の全体の内容をまとめ、これらの議論によって何が明らかになったのかを述べる。

6.1 各章のまとめと考察

第1章の「序論」においては、本論文の研究背景と研究目的、および構成について述べた。

第2章の「臨界期仮説、母語話者と上級・超級学習者の違い」においては、臨界期仮説と L2 習得についての先行研究を概観した。Lenneberg が 1967 年に臨界期仮説を提唱した後、Bley-Vroman (1989) は根本的相違仮説を主張した。子どもが母語を習得する場合と、大人が L1 に加えて L2 を習得する場合では、習得システムに根本的な違いが存在するため、臨界期を過ぎてからの大人の L2 習得では子どもの母語習得と同じレベルの文法を獲得できないと述べた。しかし、L2 学習者は母語話者と同等の水準に達する可能性は存在すると主張する研究もある (Birdsong and Molis 2001)。Coppieters (1987) ではこれらの NNS と母語話者を比較し、表面上、母語話者とは区別が出来ないレベルにまで上達した L2 学習者であっても、母語話者の文法との間には差異が存在すると結論付けた。この結論から、L2 習得において母語話者と学習者の間に残る違いに関して、異なるターゲット言語、異なる文法項目についての先行研究を概観した。

習熟度の向上に伴い解消される母語話者との差異に関しては、粕谷・荒井（2015）の L2 学習者のドイツ語の母音発話の研究を取り上げた。さらに、習熟度が上がっても母語話者との間に誤用として残る違いに関しては、水野（2000）と Snape（2008）の L2 学習者の英語の冠詞使用の研究を取り上げた。また、習熟度が上がっても母語話者との間に残る、誤用とは言えない違いに関しては、Sorace（2003）の L2 学習者のイタリア語の代名詞の使用の研究を取り上げた。これらの先行研究を踏まえ、第 3 章、第 4 章、第 5 章では中国語を母語とする学習者の日本語 L2 習得に焦点を当て、母語話者と上級・超級学習者の間に残る誤用としては表れない違いについて議論を行った。以下は第 3 章から第 5 章の内容を以下にまとめる。

第 3 章の「類似表現に関する研究」においては、三つの類似表現のペアを取り上げ、選択式問題などの調査方法により、L2 学習者と母語話者のプリファレンスの違いを比較した。名詞化表現「こと」と「の」のペアを分析した結果、「こと」のみが使用可能な場合と、「の」のみ使用可能な場合において、中国語を母語とする学習者が上級・超級レベルになっても、誤用が継続して見られることが分かった。さらに、「こと」と「の」両方が使用できる場合、日本語母語話者の選択には特定の表現への偏りは観察されなかったが、中国語母語話者は「こと」をより多く使用するプリファレンスがあることが分かった。また、日本語母語話者と中国語母語話者は共に前接動詞句が「～する」で結尾するかどうかに影響されるものの、その影響の現れ方はそれぞれ異なっていた。前接動詞句が「～する」の場合、日本語母語話者は「両方とも良い」と判断する割合が多く、中国語母語話者は「こと」へのプリファレンスがあることが分かった。一方、前接動詞句が「～する」以外の場合、日本語母語話者は「両方とも良い」の判断が少なく、中国語母語話者は「の」への強いプリファレンスを示した。話者ごとに分析した結果においても、最も日本語母語話者に近い回答をした話者でも、3 つの異なった選択があり、日本語母語話者と同様の選択傾向を持つ中国語母語話者はい

なかった。

丁寧体の述語否定形表現「ないです」と「ません」のペアを分析した結果、上級・超級学習者と中級学習者のプリファレンスに有意な違いは認められなかった。また、日本語母語話者は明らかなプリファレンスを示さなかったが、中国語母語話者では「ないです」へのプリファレンスを示した。さらに、日本語母語話者と中国語母語話者は共に話し相手との社会的関係性に影響を受けるが、その影響の現れ方はそれぞれ異なっていた。話し相手が目上の人の場合、日本語母語話者は「ません」へのプリファレンスを示したのに対し、中国語母語話者は明確なプリファレンスを示さなかった。一方、話し相手が目上でない人の場合、日本語母語話者は特定の表現への顕著なプリファレンスを示さなかったが、中国語母語話者は「ないです」へのプリファレンスを示した。話者ごとに分析した結果においても、話し相手が「目上の人」と「目上の人以外」の場合の両方において、日本語母語話者と同様のプリファレンスを持つ中国語母語話者は見られなかった。

理由を提示する表現「から」と「ので」のペアを分析した結果、中国語母語話者は能力の向上につれ、「ので」へのプリファレンスが強くなるという結果を得た。また、日本語母語話者は「ので」への強いプリファレンスを示していたが、中国語母語話者は日本語母語話者より「から」を多く選択するものの、顕著なプリファレンスを示さなかった。さらに、「から」と「ので」の選択について、日本語母語話者と中国語を母語とする L2 としての日本語学習者は共に話し相手に影響されるが、その影響の度合いは異なっていた。話し相手が「目上の人」の場合、日本語母語話者と中国語母語話者は共に「ので」へのプリファレンスを示した。一方、話し相手が「目上の人以外」の場合、日本語母語話者は「ので」へのプリファレンスを示したものの、「目上の人」の場合と比べて、その傾向は弱く、中国語母語話者は明らかなプリファレンスを示さなかった。話者ごとに分析した結果においても、話し相手が「目上の人」と「目上の人

以外」の場合の両方において、日本語母語話者と同様のプリファレンスを持つ中国語母語話者は見られなかった。

以上の類似表現の選択結果を通じて、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の場合、上級・超級のレベルになっても、母語話者とは異なるプリファレンスを持っており、日本語母語話者の間には誤用としては表れない違いが残っているという結論が得られた。

第 4 章の「長音の母音長の変化」においては、長音の長さの変化を取り上げ、Praat (Boersma and Weenink 2019) を用いた計測により、L2 学習者と母語話者の音声での違いを比較した。長音の発話を分析した結果、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の長音の長さは日本語母語話者と同程度であり、母語話者同様、話速によって長音の長さを調節していることが分かった。さらに、日本語母語話者の長音発話は長音の語彙中の位置により影響され、「語末」より「語頭」の方での長音の短音化が起きやすかった。一方、中国語母語話者では、長音の語彙中の位置による長音の長さの変化が見られなかった。話者ごとに分析した結果においても、長音の単語内での位置が「語頭」と「語末」の両方で、日本語母語話者と同様の発話傾向を持つ中国語母語話者は見られなかった。以上の長音発話の比較を通じて、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の場合、上級・超級のレベルになっても、日本語母語話者のような、長音の短音化は見られず、日本語母語話者の間には違いが残るという結論が得られた。

第 5 章の「アクセントのデフォルトパターン」においては、アクセントのデフォルトパターンを取り上げ、発話実験により L2 学習者と母語話者の内在化された文法の違いを比較した。デフォルトアクセントのパターンを分析した結果、日本語母語話者は 3 モーラ語では外来語アクセント規則に従った頭高型アクセントを、撥音位置が 3 モーラ目の撥音語では中高型アクセントを使用した。それ以外の 4 モーラ語では平板型を使用した。一方、中国語母語話者は 3 モーラ、4 モーラ語の全ての語タイプで平板型を広く使

用したことが分かった。話者ごとに分析した結果においても、3 モーラ語と 4 モーラ語の両方で、日本語母語話者と同様のアクセントパターンを使用した中国語母語話者はいなかった。以上のアクセントのデフォルトパターンの比較を通じて、中国語を母語とする上級・超級学習者の文法ではアクセントのデフォルトパターンは形成されていたことが分かった。そして、中国語を母語とする日本語 L2 学習者の場合、上級・超級のレベルになっても、母語話者とは異なるアクセントのデフォルトパターンが形成されており、日本語母語話者の間には誤用としては表れない違いが残っているという結果が得られた。

6.2 結論

本論文では、中国語を母語とする学習者の日本語 L2 習得に焦点を当て、母語話者と上級・超級学習者の間に残る違いを詳細に分析した。本研究で得られた結論は以下の通りである。

1. プリファレンスの違い:

L2 学習者と日本語母語話者の間には、言語表現のプリファレンスに関して明らかな違いが観察された。

2. 長音の音響的な違い:

上級・超級レベルの L2 学習者でも、ポジションによる短音化では日本語母語話者との違いが観察された。

3. アクセントのデフォルトパターンの違い:

L2 学習者は、日本語母語話者とは異なるアクセントのデフォルトパターンを形成していることが明らかになった。

これらの結果から、母語話者と L2 学習者の間には、上級または超級レベルに達しても残る言語的差異が存在することが分かった。これらの差異の中には、通常の言語使用において誤用として表面化しないものが含まれる。これらの表面化しない「隠れた」違いは、高度な言語能力を獲得した学習者においても、完全には消失しないことを示唆している。

本研究の成果は、第二言語習得研究に新たな視点を提供するとともに、言語教育や評価方法の改善に貢献する可能性がある。

6.3 今後の展望

本論文は中国語を母語とする日本語 L2 学習者と日本語母語話者を比較の対象とし、上級・超級学習者と母語話者の間に残る 3 つの誤用として観察されない違いを明らかにした。本研究には多くの課題が残されている。以下に、今後検討すべき主要な課題を挙げる。

まず、本論文で分析した 3 つの違い、プリファレンスの違い、長音の音響的な違い、アクセントのデフォルトパターンの違い以外にも、違いが存在する可能性があり、他の多くの文法項目や言語的側面を検討する必要がある。さらに、本論文はターゲット言語を日本語、L2 学習者を中国語母語話者とした。これらの上級・超級学習者と母語話者の間に残る「誤用として観察されない違い」が、ターゲット言語を問わず、ほかの言語間の L2 習得研究にも普遍的に存在するかを検証する必要がある。

また、学習者の言語能力の発達過程を追跡し、これらの「誤用として観察されない違い」がどのように変化するかを調査することも必要であろう。もし、これらの選択指向性やデフォルトアクセントなどに学習が進むに伴い、変化が見られるのであれば、それはどのようなインプットによるものであるのか、どのような変化をたどるのかは

研究すべきポイントであると考えられる。

さらに、本研究での研究対象は超級・上級学習者であり、コミュニケーションには問題がないレベルにまで上達した学習者である。さらに母語話者と同じレベルを目指して教育方法を模索する必要性は大きく無いと思われるが、社会的関係性によって類義表現がどのように選択されているかについては、より円滑なコミュニケーションのために、教材に組み込まれるべき内容であると言えよう。

以上の点を今後の課題として認識し、さらなる研究を進めていく必要がある。これらの研究を通じて、第二言語習得のメカニズムをより深く理解し、効果的な言語教育方法の開発に貢献することが可能となろう。

謝辞

本論文は、法政大学人文科学研究科日本文学専攻博士課程に在籍している期間中の研究成果をまとめたものです。研究を続けるあたり、多くの方々にご指導とご支援をいただきました。ここに、ささやかではありますが、感謝の気持ちを申し上げたいと思います。

まず、指導教授の川崎貴子先生に感謝の意を表します。川崎先生から、研究者としてあるべき姿を学ばせていただきました。学問への道を開き、魅力的な研究の世界に導いていただきました。先生にご指導いただいた期間は、博士前期課程から計算すると8年間にもなります。この8年間は生涯の宝物です。留学生であるの私に知識だけではなく、生活面についても、ご配慮くださり、川崎先生のご指導がなければ、本論文は完成できなかったと思います。論文を構想しはじめてから完成に至るまで、文章の細かい表現など、多くの貴重なアドバイスをいただきました。心から感謝申し上げます。

次に、本論文の副査を務めていただきました椎名美智先生、浦野研先生には、貴重なご質問およびコメントをいただきました。厚く御礼申し上げます。

また、田中邦佳先生には多くのことを教えて頂きました。統計に関して、数字やデータの分析方法と図や表の表し方など、本研究の質的分析において多大なご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。

そして、チューターの四谷晴子さんと法政大学留学生ライティングサポートデスクの鈴木先生に深く感謝申し上げます。母語話者として、本論文の文法をチェックのみならず、感想とアドバイスもいただきました。心から感謝いたします。

本調査の協力者は、法政大学大学院人文科学研究科の川崎ゼミに所属する学生と早稲田大学基幹理工学研究科電子物理システム専攻情報システム研究室に所属する学生

でした。調査にご協力し、参加くださった方々に感謝いたします。皆様のご協力を持ちまして、本研究を完成させることができました。

最後に、長い間支えてくれている家族には格別の感謝をしたいと思います。語学学校 2 年、博士前期課程 2 年、コロナ期間を含めての博士後期課程 6 年、母の周紅は私のわがままを受け入れ、日本への留学を認めてくれました。執筆活動中に出産を経験しました。その際にも、母は最大限のサポートをしてくれました。夫の葉静浩と私は支え合い、この 10 年間を一緒に歩んできました。義母の羅筠嬌と義父の葉建舟は、論文の執筆中、子どもの面倒をよく見てくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。

振り返ってみると、本論文の完成には、本当に多くの方々からのご支援をいただいたことに気づかされます。この謝辞だけでは感謝の気持ちを伝えきれません。ご支援いただいた皆様への感謝の気持ちを忘れず、今後も研究を継続していきたいと思えます。

参考文献

- 秋永一枝 (2009) 『日本語音韻史・アクセント史論』, 笠間書院.
- 秋永一枝, 金田一春彦 (2014) 『新明解日本語アクセント辞典第2版』, 三省堂書店.
- Andringa, S. (2014) The use of native speaker norms in critical period hypothesis research, *Studies in Second Language Acquisition*, 36, 565-596.
- Birdsong, D. and M. Molis (2001) On the evidence for maturational constraints in second-language acquisition, *Journal of Memory and Language*, 44, 235-249.
- Bley-Vroman, R. (1989) What is the logical problem of foreign language learning? In S. M. Gass and J. Schachter (Eds.), *Linguistic perspectives on second language acquisition*, 41-68. Cambridge: Cambridge University Press.
- Boersma, P. and D. Weenink (2019) Praat: doing phonetics by computer. Version 6.1.05. (<http://www.praat.org/>.)
- Bongaerts, T. and C. Van Summeren, B. Planken, E. Schils (1997) Age and ultimate attainment in the pronunciation of a foreign language, *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 447-465.
- Coppieters, R. (1987) Competence differences between native and near-native speakers, *Language*, 63, 544-573.
- Gregg, K. R. (1996) The logical and developmental problems of second language acquisition. In W. C. Ritchie and T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition*, 49-81. San Diego: Academic Press.
- 花井裕 (1990) 「「ので」の情報領域－「から」との対話性を比較して」 『阪大日本語研究』 2, 57-81.
- 範雯婷 (2019) 「中国語を母語とする日本語 L2 学習者の日本語類似表現の選択傾向に

- について」法政大学大学院 国際日本学インスティテュート 修士論文
- 範雯婷・川崎貴子・田中邦佳（2020）「中国語母語話者による日本語のデフォルトアクセントパターン習得」,『日本認知科学会第 37 回大会発表論文集』, 545-550.
- 範雯婷（2021）「中国母語話者による L2 日本語の長音分析」,『日本認知科学会第 38 回大会発表論文集』, 429-431.
- 範雯婷（2024）「ニアネイティブスピーカーの選択傾向について一名詞化表現「こと」と「の」に基づいて—」,『国際日本学論叢』 21 号, 1-17.
- 畠山衛（2012）「日本語学習者による原因・理由を表す接続助詞「から」「ので」の語用論的使い分け能力の習得を探索横断的研究」,『ICU 日本語教育研究』 8, 3-17.
- Hawkins, R. and S. Al-Eid, I. Almahboob, P. Athanasopoulos, R. Chaengchenkit, J. Hu, M. Rezai, C. Jaensch, Y. Jeon, A. Jiang, L.I. Yan-kit, K. Matsunaga, M. Ortega, G. Sarko, N. Snape, K. Velasco-Zárate（2006）Accounting for English article interpretation by L2speakers, *EUROSLA Yearbook*, 6, 7-25.
- Helgason, P. and K. J. Kohler（1996）Vowel deletion in the Kiel Corpus of Spontaneous Speech, *AIPUK*, 30, 115-157.
- Ionin, T.（2003）Article semantics in second language acquisition, Doctoral dissertation. MIT, Cambridge, MA.
- 市川保子（2011）「日本語教育通信 文法を楽しく 「こと」（1）」.国際交流基金.
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/grammar/201112.html>,（参照 2022-12-17）.
- 鎌田修（1999）「KY コーパスと第二言語としての日本語の習得研究」 『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』 科研研究報告書 08308019 代表者カッケンブッシュ寛子, 227-237.
- 鎌田修・山内博之（1999）「KY コーパス」. Ver 1.1. (http://opi.jp/shiryō/ky_corp.html)

Kaneko, Y. (1996) Knowledge of the English article system in second language learning: To “the” and not to “the” (Unpublished undergraduate thesis) , Smith College, Northampton, MA.

粕谷麻里乃・荒井隆行 (2015) 「ドイツ語接尾辞における母音弱化に学習者の習熟度が与える影響」, 『日本音響学会誌』 71 巻 1 号, 7-13.

川口良 (2006) 「母語話者の「規範のゆれ」が非母語話者の日本語能力に及ぼす影響—動詞否定丁寧形「(書き) ません」と「(書か) ないです」の選択傾向を例として—」, 『日本語教育』 129 号, 11-20.

木山三佳 (2009) 『日本語学習者の「から」に見る伝達能力の発達』, ひつじ書房.

小林一郎 (2017) 「意味へのアプローチ：ハリデー言語学の観点から」 『認知科学』 24 巻 1 号, 8-15.

小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」, 『日本語教育』 125 号, 9-17.

小熊利江 (2001) 「日本語学習者の長音の産出に関する習得研究—長音位置の要因による難易度と習得順序—」, 『日本語教育』 109 号, 110-117.

小熊利江 (2002) 「学習者の自然発話に見られる日本語リズムの特徴」, 『言語文化と日本語教育』 Vol.24, 1-12, お茶の水女子大学日本言語文化学会.

小熊利江 (2006) 「自然発話に見られる日本語学習者の長音と短音の習得過程」, *Sophia Linguistica* Vol.54, 193-205, 上智大学.

窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』, 岩波書店.

Kubozono, H. (2015) Chapter 8. Loanword phonology, in H. Kubozono ed., *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. 313-361.

久米啓介 (2016) 「日本語母語話者による英語冠詞選択における普遍的意味素性の影響」 *SECOND LANGUAGE* Vol. 15, 31-51.

- Long, M. H. and P. Robinson (1998) Focus on form: Theory, research, and practice. In C. Doughty and J. Williams (Eds.) , *Focus on form in classroom second language acquisition*, 16-41. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, D. J. (1968) The Phonological Component of a Grammar of Japanese, The Hague, Mouton.
- 水野光晴 (2000) 『中間言語分析 — 英語冠詞習得の軌跡』, 大学書林.
- 永野賢 (1952) 「「から」と「ので」はどう違うのか」, 『国語と国文学』, 2, 30-41.
- 内藤好文 (1958) 『ドイツ語音声学序説』, 開拓社.
- ナヨアン・フランキー・R, 横山紀子, 磯村一弘, 宇佐見洋, 久保田美子 (2012) 「インドネシア語話者による日本語の長短母音の習得に関する調査—聞き取り・読み上げ発話・自然発話のデータから—」, 『音声研究』 Vol.16, No.2, 28-39, 日本音声学会.
- 奥野由紀子 (2003) 「上級日本語学習者における言語転移の可能性 — 『の』 の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて —」, 『日本語教育』 116 号, 79–88.
- Penfield, W. and L. Roberts (1959) *Speech and brain mechanisms*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐治伸郎・梶田祐次・今井むつみ (2010) 「L2 習得における類義語の使い分けの学習：複数のことばの意味関係理解の定量的可視化の試み」, *Second Language*, 9, 83-100.
- 迫田久美子 (2006) 「第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用」, 『第二言語としての日本語習得研究』 第二言語習得研究会, 9-28.
- 迫田久美子, 小西円, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」, 『国語研プロジェクトレビュー』 Vol.6, No.3, 93-110.

- 薛晋陽（2014）「日本語における長母音の短母音化」，神戸大学大学院 人文学研究科社会動態専攻 博士論文
- Snape, N. (2007) Japanese speakers' article omission in L2 English: Evidence against the Prosodic Transfer Hypothesis? In A. Belikova, L. Meroni and M. Umeda (Eds.) , *Proceedings of the 2nd Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA)* , 394-405. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Snape, N. (2008) The acquisition of the English determiner phrase by L2 learners: Japanese and Spanish, Saarbrücken, Germany: VDM Verlag.
- Snape, N. (2013) Japanese and Spanish adult learners of English: L2 acquisition of generic reference, *Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences*, 12, 70-94.
- Snape, N. (2017) 「日本人英語学習者による冠詞の習得: 概説 [The acquisition of articles by L2 learners of English: An overview] 」 , In T. Shirahata and K. Suda (Eds.) , 『第二言語習得研究モノグラフシリーズ 1 名詞句と音声・音韻の習得』 , Tokyo: Kuroshio Publishers, 1-26.
- Sorace, A. (2003) Near-nativeness. In C. J. Doughty and M. H. Long (Eds.) , *The Handbook of Second Language acquisition*. 130-151. Oxford: Blackwell.
- 杉本妙子（2005）「ベトナム語圏日本語学習者の発音に関わる誤用について II: 音声聞き取り調査と発音調査における長音化・短音化 の誤用の比較と考察」，茨城大学 人文学部紀要，『コミュニケーション学科論集』 Vol.17, 73-93.
- 助川泰彦・前川喜久雄（1997）「日本語長音の短音化現象—語中位置および発話のスタイルとの関係—」，『音声言語情報処理』 Vol.19, No.2, 9-14, 情報処理学会.
- 周升干（2009）「待遇表現から見る原因・理由を表す「カラ」「ノデ」—中国の日本語学習者と日本語母語話者を比較して—」，『言語文化学研究』 4, 123-135.

周升干（2009）「断る場面における理由の表現形式:中国の日本語学習者と日本語母語話者を比較して」,『言語文化学研究』7, 27-44.

田野村忠温（1994）「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査：「～ません」と「～ないです」」,『大阪外語大学論集』11号, 51-66.

戸田貴子（1999）「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察—英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて」,『文藝言語研究 言語篇』筑波大学文芸・言語学系 36号, 89-111.

徐筱春（2018）『新概念德语 口语初阶入门』,安徽科学技术出版社

尹帥・安原凜（2020）「ベトナム人日本語学習者の日本語の産出における長音化現象」,『環太平洋大学研究紀要』Vol.15, 43-49, 環太平洋大学.

データベース

「日本語学習者会話データベース」(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/>) 2021年5月30日参照.

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス:I-JAS」 2021年5月30日参照.

付録 1. 範 (2024) で使用した調査用紙

背景調査

名前：

性別：

出身地：

N1 点数（日本人は回答不要です）：

滞日年数（日本人は回答不要です）：

日本会社で務める年数（日本人は回答不要です）：

以下の問題文の中 " _____ " に自然だと思う表現を選んでください。

- 私の趣味は本を読む_____です。
a. こと b. の c. 両方とも良い
- 私は彼が歌う_____を聞いた。
a. こと b. の c. 両方とも良い
- 日本語を勉強する_____は難しいです。
a. こと b. の c. 両方とも良い
- 試合が終わった_____に気づいた。
a. こと b. の c. 両方とも良い
- 毎日手帳を書く_____にしている。
a. こと b. の c. 両方とも良い
- 彼が親と喧嘩した_____を見た。
a. こと b. の c. 両方とも良い

7. 昨日雪が降った_____は知らなかった。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

8. 空気が乾いている_____を感じる。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

9. 私が生まれた_____は小さな村です。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

10. 二年前富士山に登った_____を思い出した。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

11. スケジュールを調整する_____を忘れた。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

12. 友達が手を振っている_____が見えた。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

13. 油絵を描く_____が彼の趣味です。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

14. 自転車で日本一周する_____に成功した。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

15. アメリカに留学する_____に賛成する。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

16. 私が頼んだ_____はカレーだ。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

17. 親が掃除をする_____を手伝う。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

18. 田中さんから電話が来た_____を彼に伝える。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

19. 料理を作る_____が楽しい。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

20. オムライスを食べる_____にした。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

21. 子どもが溺れている_____を助ける。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

22. 大阪へ転勤する_____になった。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

23. 明日入院する_____になった。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

24. 海に潜った_____がある。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

25. 彼が来る_____を待ちます。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

26. 電車は遅れる_____がある。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

27. 彼はフランス語を話す_____ができる。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

28. 面接を受ける_____に決めた。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

29. 校則ではお酒を飲むと、退学させられる_____になっている。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

30. 彼が走りながら何かを叫んでいる_____が聞こえた。

- a. こと b. の c. 両方とも良い

付録 2. 範（2024）で使用したタイプ別の問題文リスト

「こと」のみが使用可能の問題

1. 私の趣味は本を読む_____です。
2. 毎日手帳を書く_____にしている。
3. オムライスを食べる_____にした。
4. 大阪へ転勤する_____になった。
5. 明日入院する_____になった。
6. 海に潜った_____がある。
7. 電車は遅れる_____がある。
8. 彼はフランス語を話す_____ができる。
9. 面接を受ける_____に決めた。
10. 校則ではお酒を飲むと、退学させられる_____になっている。

「の」のみが使用可能な問題

1. 私は彼が歌う_____を聞いた。
2. 彼が親と喧嘩した_____を見た。
3. 私が生まれた_____は小さな村です。
4. 友達が手を振っている_____が見えた。
5. 私が頼んだ_____はカレーだ。
6. 親が掃除をする_____を手伝う。
7. 子どもが溺れている_____を助ける。
8. 彼が来る_____を待ちます。
9. 彼が走りながら何かを叫んでいる_____が聞こえた。
10. 空気が乾いている_____を感じる。

「こと」と「の」両方が使用可能な問題

1. 日本語を勉強する_____は難しいです。
2. 試合が終わった_____に気づいた。
3. 昨日雪が降った_____は知らなかった。
4. 二年前富士山に登った_____を思い出した。
5. 油絵を描く_____が彼の趣味です。

6. 自転車で行く日本一周する_____に成功した。
7. アメリカに留学する_____に賛成する。
8. スケジュールを調整する_____を忘れた。
9. 田中さんから電話が来た_____を彼に伝える。
10. 料理を作る_____が楽しい。

付録 3. 範 (2019) で使用した調査用紙

氏名： 年 齡：

職業：

Q1. 母語は何語ですか？

Q2. 日本語をどのくらいの期間、勉強していますか？

期間： 年 ヶ月

Q3. 日本語が話されている場所に3ヶ月以上、滞在したことがありますか？

☐ はい ☐ いいえ

Q4. Q3. で「はい」を選択した方ご回答ください。どこで、どのくらい滞在しましたか？

場所：_____ 滞在期間：_____ 年 _____ ヶ月

Q5. 日本語能力試験の結果をご記入ください。

レベル：_____ 点数：_____ 点

実験の感想などございましたら、下の欄にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。本実験、および本調査書にて知り得た情報は、研究・論文執筆の目的以外に利用されることはありません。

I. 以下のそれぞれの場面で、自然な表現だと思う返答を選び、その記号を○で囲んでください。どちらも自然だと思う場合には、より自然だと思う表現を選んでください。

1. 授業に遅刻した理由を先生に聞かれました。どのように答えますか？

a. すみません、電車が遅れたから、遅刻しました。

b. すみません、電車が遅れたので、遅刻しました。

2. あなたは暑い部屋にいて、窓を開けたいと思っています。窓の近くにいる先輩に窓を開けてくれるよう頼む場合、どのようにお願いしますか？

a. すみません、暑いから窓を開けていただけますか？

b. すみません、暑いので窓を開けていただけますか？

3. あなたは友達と映画を見に行く前に食事をしています。映画の時間が近づいたので、友達に急ごうと伝える時、どのように言いますか？

a. もう時間がないから、早く行きましょう。

b. もう時間がないので、早く行きましょう。

4. 日曜日に食事しに行きましようかと誘われました。お店の予約をした方が良いと提案する時、どのように伝えますか？

a. 日曜日は混んでいるから、先に予約したほうがいいです。

b. 日曜日は混んでいるので、先に予約したほうがいいです。

5. あなたはバイトを始めました。その理由を聞かれました、どう答えますか？

a. 来年は海外旅行に行きたいですから、貯金をしています。

b. 来年は海外旅行に行きたいですので、貯金をしています。

6. 手帳を使いますかと聞かれました。どう答えますか？

a. いいえ、使わないです。

b. いいえ、使いません。

7. あなたは都会の出身です。知り合いから、「ご出身は静かな町ですか？」と聞かれました。どう答えますか？

a. いいえ、静かではありません

b. いいえ、静かではありません。

8. あなたは友達と雑談をしています。「新しい映画はどうですか？」と聞かれました。どう答えますか？

a. あの映画はまだ見てないです。

b. あの映画はまだ見ていません。

9. あなたは友達と昨日を試験について話をしています。試験をどのように評価しますか？

a. 全然難しくないです。

b. 全然難しくありません。

10. 数学の授業で先生がある問題について説明をしました。この問題はもう大丈夫ですかと聞きました。どのように答えますか？

a. 先生、私はまだ分かりません。

b.先生、私はまだ分かりません。

11. あなたは忘年会の幹事で、先生の都合を知りたいです。どのように聞きますか？

a. 先生、忘年会は出席しますか？

b. 先生、忘年会は出席するんですか？

12. あなたは友達と電話をしています。相手の居場所を知りたい時、どのように聞きますか？

a. 今はどこにいますか？

b. 今はどこにいるんですか？

13. あなたが松葉杖を付いています。周りにどうしましたかと聞かれました。どう答えますか？

a. スキーで転倒しました。

b. スキーで転倒したんです。

14. あなたは正装をしています。隣人に「お出かけですか？」と聞かれました。どう答えますか？

a. はい、これから就活の説明会に行きます。

b. はい、これから就活の説明会に行くんです。

15. あなたの新しいパソコンを見て、「そのパソコン自分で買いましたか？」と友達に聞かれました。どう答えますか？

a. いいえ、父が買ってくれました。

b.いいえ、父が買ってくれたんです。

II. 下の場合、自分の言い方を書いてください。

1. 授業中、気分が悪くなってしまいました。担当の先生に、帰宅したい旨と、その理由を伝える文を1文で書いてください。

2. あなたは図書館で自習をしています、隣のカップルが私語をしています。何を言って注意しますか？（自分が勉強していることを理由として強調してください。）

3. あなたは先輩に「お酒を飲みに行きませんか？」と聞かれました。「飲みに行く」という動詞句を使用し、断る文を書いてください。

4. 「動物に興味がありますか？」と聞かれましたが、あなたは動物が苦手です。「興味がある」という動詞句を使用し、否定の文を書いてください。

5. あなたは特売セールの店員として働いています。商品が全て売り切れてしまった後

に、お客さんが来て、「まだありますか？」と聞かれました。「売り切れ」という動詞を使用し、お客さんに状況を説明してください。

6. あなたは来月引っ越す予定で、住所を変更しよう区役所に来ています。区役所の職員にどのように伝えるか、お書きください。（「引っ越し」という動詞を使用してください。）

付録 4. 範（2020）で使用した調査問題

Profile Sheet

お名前： _____ 年齢： _____ 歳

Q1. 三か月以上、日本に滞在したことはありますか？ はい ・ いいえ

「はい」の場合、地域と期間を教えてください。

1. _____ 年 _____ 月から _____ ヶ月間 滞在した地域 [_____]
2. _____ 年 _____ 月から _____ ヶ月間 滞在した地域 [_____]
3. _____ 年 _____ 月から _____ ヶ月間 滞在した地域 [_____]

Q2. 日本語能力試験を受けたことがあれば、その結果をお教えてください。

レベル： _____ 級 点数： _____ 点

Q3. 中国語、日本語以外に話す言語があればお教えてください。

1. 言語： _____ 語
習得レベル：初級 ・ 中級 ・ 上級 ・ ほぼ母語話者レベル
2. 言語： _____ 語
習得レベル：初級 ・ 中級 ・ 上級 ・ ほぼ母語話者レベル
3. 言語： _____ 語
習得レベル：初級 ・ 中級 ・ 上級 ・ ほぼ母語話者レベル

Q4. 中国語では標準語以外、どの方言を話しますか？

Profile Sheet

お名前：_____ 年齢：_____ 歳

Q1. 日本語以外に話す言語があればお教えてください。

4. 言語：_____ 語
習得レベル：初級 ・ 中級 ・ 上級 ・ ほぼ母語話者レベル
5. 言語：_____ 語
習得レベル：初級 ・ 中級 ・ 上級 ・ ほぼ母語話者レベル
6. 言語：_____ 語
習得レベル：初級 ・ 中級 ・ 上級 ・ ほぼ母語話者レベル

Q2. ご出身を教えてください。

_____ 県

類別ごとの無意味語の単語リスト(34 個)

1. 無標語 (10 個)

3 モーラの単語

もぬた すさひ よまか りにさ てえふ

4 モーラの単語

さうねか ひつまう けじそな こほとゆ りさよろ

2. 拗音語 (14 個)

3 モーラの単語

1 モーラ目は拗音の単語

ひゃわか りよけむ

2 モーラ目は拗音の単語

にきよの なしゅら

3 モーラ目は拗音の単語

せけしゅ たきちゅ

4 モーラの単語

1 モーラ目は拗音の単語

りよわさも にやりへく

2 モーラ目は拗音の単語

おみやとま そちゆけほ

3 モーラ目は拗音の単語

ふもしゆひ むとりゆけ

4 モーラ目は拗音の単語

こにひきよ るかりしゆ

3. 撥音語（10 個）

3 モーラの単語

1 モーラ目は撥音の単語

けんう くんり

2 モーラ目は撥音の単語

そとん らさん

4 モーラの単語

2 モーラ目は撥音の単語

まんすに すんつよ

3 モーラ目は撥音の単語

くむんて みたんれ

4 モーラ目は撥音の単語

ちけきん ふにさん